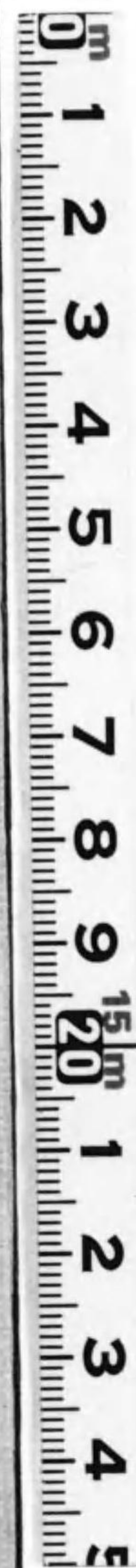


354

900

著ロケル・エヴ・エチ  
 訳ニ其名権  
**生一のル下アア**  
 —[人詩の學科]—  
 版閣文叢



始





時 233  
481



著 口 夕 心 子 伊  
訳 二 其 名 稚

# 生一のル下アア

—[人詩の學科]—



版 閣 文 叢



*Faint handwritten text, possibly a library or collection number.*



*Faint text on the inside cover, possibly a title or date.*





下下小一坐



文庫



### フアブルの序

私の敬愛する友人は、かうした仕事を企てて、寔に首尾よく成し遂げた。私の生涯と、私がたまに達成することになつた仕事との全般に互つて、讀者へその縮圖を提供することは、彼れには仕甲斐あることと思はれたのだ。

此の企てを遺憾なく遂行するために、彼れは私の手紙からと共に、幾度となく吾々が取り交はした長い會話からも、多少明確にする必要があるやうな、そして生涯の道標をなすやうな、多くの想ひ出を汲み取つた。特に私の生涯にあつては、多くの心勞が無いでもなかつたが、それにしても出來事、若しくは大なる變化に甚だ豊富ではなかつたのだ。それと云ふのも、私の生涯は殆んど全部、特に最後の三十年間と云ふものは、絶對的隱退と完全な沈黙との中に過されたからである。

思ふに、私の身邊を繞つて流布せられた誤謬、誇張、乃至は作話に對して、公衆に警戒せしめ、そして凡ての真相を明かにすることは、必ずしも無用の業ではなかつた。



かうした任務を自ら背負つて呉れた私の忠實な門人は、ある程度まで私の「想ひ出の記」の埋め合せをして呉れた。と云ふのは、彼れが私へさうした想ひ出の記を書いたらどうかと云つて呉れたに拘はらず、私の健康が勝れないので、これを企てる事が出来なかつたのだ。實際、私はもうこれなり、廣々とした地平線と「宏大な思索」を去らなければならなからう！

それにしても彼れによつて、黄色くなつた古い紙屑の中から掘り出され、こんなにも懇ろに整理せられ、こんなにも忠實に提供せられた古手紙を、今再び見て、私の奥底には青年時の凡ゆる情熱、昔時の凡ゆる感激が、今尚ほ滾るやうに思はれる。そして、若しも私の眼が衰へず、私の力が弱らず、今日かうした越えることの出来ない障碍がなかつたならば、私は尚ほその昔のやうに、仕事を熱烈にやるだらうと思ふ。

尚ほまた、傳記を書くためには、人の一生を興味あるものとする思想の領域に這入らなければならぬと云ふことを、彼れは實によく理解してゐた。だからこそ、彼れは私のぐるりに、私があるなにも長い間見詰めて來たあの世界を復活せしめる事が出来たのだ。だからこそ、彼れは私の方法（それは凡ての人に出来る方法だ）、私の思想、及び私の研究と發見との全般を、こんなにも嚴密

に解釋し、こんなにも簡潔に要約することが出来たのだ。そして、かうした企てには明らかに幾多の困難があるにも拘はらず、彼れは此處に、私もこれ以上を望むことが出来ないほど明晰に、生き生きと、完全に、天晴れ見事な叙述をやり了せてゐる。

一九二二年、ヴォクワリニウズ縣・セリニャンにて。



## 著者の序

知的進歩に於て、何んらかの段階をしるした人々の想ひ出にからまる事を、すべて敬虔に窺めることは、特にそれが教訓となり模範となるのみでなく、彼等を一層高めることになるならば——彼等の偉業にそれ相應の額縁を飾めることは、彼等を尊崇し、眞に彼等と交通する最良な方法の一である。

かうした目的に基いて、私は十九世紀末に於ける孤獨な觀察者の住居の典型、この偉大な博物學者のあの家、あの庭、あの遺物、あの實驗室、其處に在つてこそ價値あるあの標本、彼れが訪問者に接し、そして親しい人々と、プラトンを思はせるやうな會話をとり交はしたあの食堂——吾々が誇りとするに足る極めて高貴な生存の一が過された、此のほんに小さいプロヴァンスの一角の土地——それをどうしても保存しなければならないと思ふたのであつた。

やはりさうした目的を以て、今私は公衆へ「フアブルの生涯」を、彼れの光榮ある誕生百年祭に



際して提供するのである。

彼れが未だ此の世を去らない前に、私はその素描を公けにしたのであつた。何んとなれば、當時からして彼れを正確に語ることは困難だつたからである。廣告嫌ひな彼れは、實に傍目もふらずに世を避けてゐた。彼れの沈黙が、根據のない、若しくは確實性を缺いた多くの噂を刺戟して、それが時と共にますます思ひ切つたものとなつたのだ。

彼れを知り、彼れの家庭に出入する光榮を有したことは、私に取つて無上の悦びである。私は彼れの最後の綻び——終局の復活に至るまで、あんなにも際どい、あんなにも顧みられない、あんなにも感慨ふかつた彼れの勞苦の晩年、それに親しく立ち合つて、どれほど感激に満たされたことか！ また、彼れと一緒にアルマの曲り腕つた徑を歩いたり、若しくは彼れの傍近く彼れの質素な卓子に坐つて、遠く廻る出來事さへも今の今起つたかのやうに明瞭な彼れの記憶を尋ねたりして、私はどれほど多産な教訓を得たことか！

私は出来るだけ彼れ自身をして語らした。あんなにも風味豊かな「昆蟲記」の所々に於て、彼れは「孤獨な研究者の傳記」の幾分を極めて麗はしく描いてゐるではないか。さうした頁に於いて、

彼れの「博物學者としての生ひ立ち、及び思想の發達の經過」が詳述せられてゐるではないか。それにも拘はらず、私は出來事の連絡をとるために、たゞそれらの根本的な暗示を採つたに過ぎぬ。何人も「昆蟲記」の中で見出すことの出來るものを、同じ言葉を以て他の本とすることは——若しくは、フアブル自身が立派に語つてゐる所のものを、別のへまな言葉を以つて繰り返へすことは、何んの用もない、空な仕事であらう。

こんな譯で、私は彼れの話を聽き、彼れの想ひ出に訴へ、彼れの同時代の人々のそれと呼び起し、若しくは彼れの昔の生徒等の印象を醒し、以つて主として彼れが残して置いた空隙を充たすことに努めた。私は凡てこれらの證言を蒐めて確かめることに努めた。私はまた、彼れの原稿を漁り、幸ひ手に入れることの出來た彼れの手紙をも利用した。

それは實際、彼れの手紙は甚だ豊富ではない。フアブルは此の傳記の中でも分るやうに、手紙を書くことはあまり好まなかつた。然しながら、たとひ彼れは殆んど手紙を書かなかつたにしても、苟くもそれを書く段になると、彼れは骨を折つて、若しくは厭々ながら書きはしなかつたのだから、私が幸ひにも蒐集することの出來た手紙のうちには、何んらかの見地から、或る意味を持たない手



紙は一つもありはしない。彼れには輕薄な交り、無用な交際、乃至は月並な知り合ひなど、そんなものは皆無。彼れの生涯にあつては凡てが眞剣で、常に或る目的に向つてゐる。

然しながら特筆しなければならないことは、フアブルがカルパントラス (Carpentras) とアジャシオ (Ajaccio) とに中學教師をしてゐる當時、彼れの弟へ書き送つた手紙が、他のいづれよりも遙かに興味が多いことである。何んとなれば、これらの手紙は、彼れの殆んど知られない青年期に關して最も多くを語り、彼れの性格を最もよく現はし、また彼れの生涯を飾る最も麗はしい挿繪の一つ——盡きることのない精力と、私のない勤勞との、眞の詩であるからである。

フレデリック・フアブルの二人の子息が、彼等の一族に關する凡ゆる記録を、私へ寛大に解放して呉れた。また、私の親愛なる二人の友——アントナン・フアブルとアンリ・フアブルとの好意に依つて、私は多くの貴重な手紙を見ることが出来た。今改めて、私は彼等へ心からの感謝を表する。尙ほ、私は若干の手紙をアンリ・ドヴィヤリオ夫人、フェリツスク・アシヤアル氏、特にテオドル・ドウラクウルの好意に負ふてゐることを付け加へなければならぬ。ドウラクウルはフアブルの友人のうちでも、恐らく最も信頼せられた友であらう。それ故に彼れは、フアブルの生涯の最もよ

き證人の一人である。

此の實に長い生涯は、判然と三期に分たれる。第一は殆んど六十年に亙る期間で、アルマの占領で終る。第二は孤獨と深い沈黙との時期であるが、事實に於て最も活動的な、最も多産なものである。更に第三は突如としてあの暗がりに明りが射した時期で、最後の十年を含むものである。それは空虚ではあるが、それにも拘はらず、吾々をして冥想せしめ、幾らかの暗示を與へずにはゐないのだ。

私はどうしてもレオミユール (Réaumur) とレオン・デュフウル (Léon Dufour) との名前を擧げない譯にはゆかなかつた。尙ほ其他の顯著な二三の孤獨な觀察者の面影をも、此の主要な面影のほとりに呼び起すのは、私には當然のことと思はれた。それはフアブルのことから、さうした幾多の無言な高貴な人々の生活を、廣く見渡すためである。何時か、彼れの後を繼がうと思ふ人があつて、さうした生活がよく理解せられるならば、それは博物學研究に對して考へられる、最も生き／＼した序文となると私には思はれるのだ。

一九二四年二月

著

者



註一 私に彼れの原稿の中で二三の素晴らしい見つけものをした。それは玩具 (Jouets) に關する小篇、日蝕 (Eclipse) の奇妙な描寫、それから數 (le Nombre) の素晴らしい詩などである。此の數の詩は、殆んど半世紀來彼れの書齋の埃の中に埋もれて來たものであるが、私は一九一二年の此の傳記の前身に於て、はじめて公けにした。

## 譯者序

ジャン・アンリ・ファブルの詳傳としてはルグロ博士の本書以外に、尙ほ佛文では、オーギユスタン・ファブルの「ジャン・アンリ・ファブルの生涯」、マルセル・クワロンの「偉材ジャン・アンリ・ファブル」、また英文では、バーシイ・ピツクネルの「人としてのファブル」などがある。今、私がルグロ博士のそれを選んだのは、即ち、博士は長い間親しくファブルに接した人である上に、それは千九百十二年、未だファブルの在世中に彼れが公にした「ファブルの生涯」へ、彼れ自身によつて隨所に筆を加へ、新たに數章を附加されたもので、千九百二十四年「昆蟲記」十卷の決定版が出來ると共に、その第十一卷をなすに至つたほど完全な、權威あるものだからである。

近年フランスに於いて、ファブルを中心に目覺ましい論戰が行はれてゐる。彼れを非難する者の多くは、官僚學者あたりである。科學の世界にも官僚黨と在野黨、ブルジョワとプロレタリアとの闘争があるのである。事實ファブルは、百姓の子として生まれ、生涯百姓を以つて終始した科學者で、



宏壯な研究室に立派な道具を持つてゐる學者達から、常に「變則者」として斥けられたのであつた。  
あゝ！「變則者」か。あの山の麓、あの流れのほとり、あの野の中に、どれほどの變則者がゐることか。都會のドン底にさへも、どれほどの變則者が呻いてゐることか。どれだけの天才が貧と望みとの間に悩ましい生活をしてゐることか！ ジャン・アンリ・ファブルは、實に平民の典型である、魂である。その充實した、多産な、緊張した九十有餘年の高貴な生活——そこには多くの學ぶべきものがある。それは同時に感激と慰安との盡さざる泉である。私は此の譯書「科學の詩人」を、特に田舎の彼方此方に散らばつて、靜かに考へ、靜かに研究し、そして毎日の新聞にも書き立てられることなしに、靜かな尊い生活をしてゐる人々に捧げる。

## 目次

一 自然の直観……………	三
二 小學教員……………	一七
三 コルシカ滞在……………	三九
四 アヴィニヨンのファブル……………	五五
五 偉大な教育家……………	一〇七
六 隱者の生活……………	一三一
七 自然の解説……………	一五七
八 本能の不思議……………	二一三
九 進化論……………	二四五
一〇 道德の幻影……………	二七五
一一 均 整……………	二八五



一二	矛盾	二九九
一三	調和	三〇五
一四	自然の再現	三一三
一五	昆蟲の詩	三三三
一六	類型の人々	三五七
一七	セリニヤンの集ひ	三七九
一八	黄昏時	四一七
一九	光榮の晒臺	四五九
二〇	小秘密後の大秘密	四七五

# 科學の詩人

—フアブルの生涯—



—  
自然の直観

エマアソンが云つてゐる。——森羅萬象にはそれ／＼の畫家もしくは詩人があつて、お伽噺の體につかれた王女のやうに、「それ／＼豫定の救済者を待つてゐる。」  
自然の何處を掴まえて見ても、それ／＼の神祕、それ／＼の美、それ／＼の論理及びそれ／＼の理由がある。そしてギヤン・アンリ・ファブル自身が私に供給し、この書の表題となつてゐる思想は、誤つてはゐない。——泥の中に失はれ、或ひは草の中を彷徨ふ小さい蟲けらも、彼れには極めて高い、極めて示唆的な問題を掻き起させ、そこから不可思議な詩の世界を引出させたのだ。

一八二三年十二月二十日、彼れは上ルウエルグのミロオ市から程遠くないヴェザン町の行政區に屬する小さい村サン・レオンに生れた。それは甚だ著名な彼れの隣人で、その赫々たる名聲がやが



て彼れのそれをも凌ぐミストラルの誕生よりも、七年ばかり前である。

註一 Ponergue 南フランスの、今、アヴェロンと稱してゐる地方。(譯者)

註二 Frédéric Mistral 1830—1914. プロヴァンスの有名な郷土詩人。(譯者)

繪のやうに美しく、せうらぐ小川の縦横に通じてゐる、が、殆んど世間から懸け離れたこの村で、  
彼れは始めて歩き、はじめて物を云つたのだ。

サン・レオンは昔重要な中心地であつた。そして今日尙ほ過去の古い名残に満ちてゐるが、事實、  
廣漠な石灰質の曠原のたゞ中に、それは緑のオアシス見たいなものである。その曠原のむき出しな  
腕りの脊や、瘦せた窪みには、裸麥や貧弱な燕麥が備かばかり作られてゐる。その他は到るところ  
黄楊や艶々しい柊や、てふまの飛び下りる杜松や、野猪の通ふ鬱蒼たる松の林。この野猪は今尙ほ  
村の近くまでもやつて来て、大嵐の残して行つた道傍の水溜りで浴びたりする。

然しながら彼れの幼時は、殆んど全部ラヴェニス教區の云ふに足らない村落、マラヴァルで過  
された。そこから鐘樓は手近かに眺められた。この村落へ行くためには、緑りはしても寧ろ裸な面  
白味のない田舎を通り、羊の群が餌を求めに来る岩に取圍まれた放牧地や、曠野の中に波を打たせ

る白樺に縁取られた峻はしい路を通つて、四十キロ米突近くも、難儀な登りを旅しなければならな  
かつた。そして見ゆる限りは、小舎一つなく、一人一人見えぬ。たゞそれえに、いだ、ブリユイエール、  
芋畑。廣大な寂莫は、鶉の啼聲にも亂されず、稀れに山毛櫸林の端に鶉が疇高く囀り、猛禽が音も  
なく掠め飛んだりするだけだ。

註一 ファブルが一八四六年八月十八日に弟へやつた手紙に、「ひどく面白味のない地方だ。」

彼れのあらゆる父方の先祖が出たのは、此處からである。彼れの父アントワーヌ・ファブルが、  
ヴィクトワール・サルグといふ執達吏の娘と結婚したので、サン・レオンへ出て住まひ、そして彼  
れも又見習として代言の仕事を感じるために、ある日出て行つたのも此處からである。

註一 私はサン・レオンで彼れの父方の生存者を二人三人見付け出した。特に私はサルグ家の一後裔の女と  
話をした。この女は頗る年老いてゐたに拘らず、その心が生々し、應答が巧みて、本當に雄辯にルウエ  
ルグの方言で——これは偶然知つた友が、その場で私に譯して呉れたのだが——自由自在に思ふことを  
言ひ現はしたには、私もひどく驚いた。

ファブルが自然の最初の印象を受けたのは、マラヴァルの茨に縁取られた道や、林の中の羊齒の  
生えた空地や、えに、いだの野原などに於てである。尙又彼れの祖母が住んでゐたのも此處である。



此の人の好いお婆さんは、夕べになると糸を紡いだり、紡錘を廻したりしながら、美しいお伽噺や、あどけない昔噺をして、彼れを寝つかせるのだつた。然しながら、新鮮な肉の香を嗅ぐ食人鬼、又は南瓜を四輪馬車に變へ、とかげを馭者にかへたりする妖女や、すべてさうした想像上の不可思議も、彼れがすでに感じはじめた實際の不可思議には較べものにならぬ。

何んとなれば、彼れは特に詩人として生れたのだ。彼れは本能から云つても、天職から云つても詩人なのだ。彼れの「脳髓が無意識の樞樑から抜け出すか出さないかの」極めて幼い頃から、自然の事物が彼れに強い、深い印象を残すのであつた。遠く記憶を遡つて、「まだごつ／＼した粗毛織の小さい着物を引かけた六歳の小僧、」若しくはやつと「初めてズボン吊りを引かけた」頃でさへも、「彼れはすでに」歩行蟲の翅鞘、もしくは蝶の翅の差靨に打たれて恍惚としてゐた」様を思ひ浮べてゐる。夕暮れ、鼓の中で、彼れはきり／＼、すの啼聲を聴分けることを知つた。彼れ自身の言葉によると、「粉蝶が玉菜へ行き、蜻蛉がいら／＼草へ行くやうに、」彼れは花へ行き、昆虫へ行くのであつた。

岩に籠もる畜、水の底に蠢めく生命、「不可思議な詩」である動物と植物——自然全體が彼れの好

奇心をそゝり、彼れを驚嘆せしめる。「言葉よりも優しく、夢よりも定かならぬ、何んとも云ひやうのない或る聲が、彼れを熟睡せしめる」(昆蟲記)

かうした性向は彼れにあつて徹頭徹尾自發的なもので、少しも遺傳的ではないらしいのである。ますます驚くべきことには、彼れの両親はどういふ人達であつたか。それは彼れ自身が吾々に語つてゐる——瘦地を引掻く小百姓、「地を耕ひ、裸麥を蒔き、牛を飼ふ」貧農。そして夕べには、壁へ突込んだ一片の石板の上で、松脂を染み込ませた木片を燃やして灯を取つたり、嚴寒になると僅かばかりの薪を儉約し、宵を過すために羊小屋へ閉ぢこもつたりする。そんな時には寒い風を通してすぐ近くに狼の吼える聲がする——さうした彼れの幼時が過てされた慘めな環境には、彼れがあつた趣味を先天的に持つてゐたのでないならば、それを生ぜしめるやうな何等特殊の事情もあつたやうに思はれぬ。

然しながら、不可見の底から迸出するのが本能の特性であるやうに、正にそれは天才の本質ではなからうか？

それにしても是等の野生的な頭脳には、どんな默々たる思想の保存、どんな閉ぢ込められてゐる



観察の知られざる寶、どんな言ひ現はされざる省察などが含まれてゐて、そこに暗々裏のうちに、恐らく才能の芽生が蓄積し、誰れか恵まれたる後裔が、やがてこれに浴することが出来るのではなからうか。たと表現に缺けてゐたと云ふので、詩集を公けにせず、もしくは認められずに死んで行つた詩人が、どれほど有ることだらう！

彼れが七歳の時である。両親は彼れを學校へやるためにサン・レオンへ呼び寄せた。この學校は彼れの名付け親のビエル・リカアルによつて經營されてゐた。このリカアルは村の教員で、同時に床屋であり、鐘撞きであり、詠歌隊の歌手であつた。レムブランド、テニエル、或ひはヴァン・オスタードだつて、この學校よりも美しいものを描いたことはない。そこへは鶏や豚の子がやつて來るし、同時に臺所でもあれば食堂でもあり、また寢室の用も足すのであつた。「そして壁には安物の繪紙が一ぱいに貼られ、その大きな爐には、冬、火の近くへ坐らして貰ふために、朝、各自薪を持つて來なければならなかつた。

註一 Vian Ryn Rembrandt 1606—1669, オランダの有名な畫家。(譯者)

註二 David Tenier 1582—1649, フランダルの畫家。(譯者)

註三 Van Ostade 1610—1685, オランダの畫家。(譯者)

かうした幼時の祝福せられた懐かしい場所に於て、彼れは自然木のやうに成長した。彼れはそれを終生忘れはしない。あらゆる物質的不自由やあらゆる苦痛を通し、老後の諦觀の中に於てさへも、さうした場所の野趣に富んだ想ひ出が、彼れの生活を香ばしくするに足りた。父のつゝましやかな庭、はじめて鶉の巢を見つけた泰皮、平たい石の上で、はじめて鈴振り臺のしんみりした音を聞いた村端れの小さい沼、また大木に蔽はれた狭い、深い、遙かの谷底の、よく海老を捕つたりした小川なんか、常に彼れの眼を離れはしないのだ。後に弟へやつた手紙の中で、彼れはまだ生の苦しみを知らず、「仰向けになつてヴェザンの村の苔の上を轉つたり、クレームや黒パンを食べた」り、「サン・レオンの鐘を鳴らした」り、または「ラヴェイスの牡牛の尾を引張つた」りした愉快な頃を想ひ出してゐる。

事實、アンリには二つばかり年下の、フレデリックといふ弟があつた。彼れの性質もやはり思慮



に富み、眞面目な、正直な精神を持つてゐたが、その嗜好は寧ろ經營のことや、實務の方に傾いて行く。で、フレデリックがつまりなく思ふところでも、アンリは反對に幸福を見出し、科學に陶然として、「丘の青い桔梗や、山の赤いブルーエールや、野の黄金色したきんぼうげや、林の香り高い羊齒などの間に」、詩を手に一ぱい摘んだりするのであつた。この點を除いては二人の兄弟は「ただ一人を成してゐた。」彼等はよくお互ひに理解して、常に相愛してゐた。アンリは何時までも兄貴らしい配慮を以て、フレデリックに氣を配り、惜しみなく助言を與へ、自分の經驗を以て彼れを扶け、努めて彼れのあらゆる困難を除き、彼れを鼓舞して自分のあとを追はせ、そして世に出させようとする。彼れは弟に起るところのものは、悲しいことにしろ、うれしい事にしろ、善いことにしろ、悪いことにしろ、すべての恐怖、失望、希望及びあらゆる想ひを、親身に聽いてやる。彼れは弟の勉學や研究のことについて、何呉れとなく世話をする。その代り、アンリにはこの弟ほど確かな、忠實な、そしてその最初の成功を喜んでくれた友はなく、後年に至つても、この弟ほど熱心に彼れを讚美し、そして彼れの光榮を切に望んだものはない。

註一 Frederic Fabre 兄のアンリと同じやうに、ヴォクリュズ (Vauluse) 縣の師範學校を出て、最初同

縣のラブリュ (Lagard) の小學教員となり、それからオランザンヌ (Orange) の中學校の教授となつた。一八五九年に、彼れは自ら教育界を退いたが、その頃はアヴィニヨン (Avignon) の師範學校附屬の小學校長だつた。その後彼れはアヴィニヨンの商業會議所の書記を務め、それからヴォクリュズ船渠所長となり、最後にクリヨン運河 (Canal de Crillon) の支配人となつた。この地位をば彼れは死ぬ (一九一三年?) まで占めてゐた。

彼れが十二歳の頃である。彼れの父は「此の家あつて始めて都に心を惹かれ、カフェを開くためにロデ市に一家を連れて出た。未來の博物學者は此處の中學校へ入つた。其處で授業料を拂ふ爲めに禮拜堂で、日曜、彌撒のお手傳ひをした。此處でもやはり特に、彼れの興味を惹いたのは蟲けらだつた。彼れがザイルヂイルを翻譯し出した時に、彼れを魅惑し、彼れが記憶した唯一のものは、それは人物の動いてゐる景色であつた。又それは「蟬や、山羊や、えにしだなどに關する得も言はれない、多くの細かな描寫だつた。」

こんな風にして更に四年経つた。ところが彼れの兩親は他方に幸運を求めなければならなくなつて、トゥルウズ (Toulouse) 市へ棲家を移した。此處でも彼れの父はカフェを開いた。若いアンリ



はエスキルの神學校へ無月謝で入學を許可せられ、どうか斯うにか五年級を卒へた。不幸にして彼れの進歩は間もなく家族の新たな移轉のために中斷された。一家は此度遠くモンペリエ(Montpellier)へ移つた。此處で彼れは妙に醫學と云ふものに魅せられたが、彼れは生れながらにして之れにも適して居つたもののやうだ。結局、不運が依然として續くので、彼れは勉學におさらばをし、そしてどんな仕事をしてでも自分のパンを儲けなければならなくなつた。

こんなわけで彼れは眞白な大道へ上つた。そしてこの矢はれて、殆んども宿ない少年は、何んといふ汗をもつて生を試みたことか！ 時にはポオケエル(Baucaine)の市や、市場の軒下や、もしくは遊園地の屋臺店の前でシトロンを賣つたりした。時には當時建設中だつたポオケエル・ニイム間の鐵道工夫の群にも入つた。彼れは暗い、痛ましい、身も世もないやうな思ひをした。何をして居つたか！ 何を夢見て居つたか！ それにも拘はらず、自然の愛と勉學の情熱とが彼れを支へ、そして屢々食物の代りとなつた。と云ふのは、ルブウル(Roboul)の小さい詩集を手に入れるために、なけなしのお錢を拂つてしまひ、道傍でこつそり摘んだ葡萄を食べながら、此の勞働詩人の詩句を誦して飢ゑをまぎらしたこともあるのだ。此のしんみりした詩人は、當時名聲赫々たるもので、

ラマルテイヌも推讃し、シャトウブリアンなどはニイムへやつて来て、そのパン屋の帳場で敬意を表したりしたのである。時にはまた何んか蟲けらがアンリの伴侶となつた。そしてこれまで見たことのない蟲を見付けでもすると、それが屢々何よりも喜びだつた。松のこぶきこがね(Mecolobus fullo, Lin.)なんかも、當時彼れははじめて出逢したので。これは素晴らしい甲蟲で、その着物は黒もしくは栗色で、白繻子の斑點を撒かれてゐる。捕へられることの甲蟲は、恰度指先をしめして硝子に觸れると響きが出るやうな、さうした微かな音を立てる。

ロマンテックでクラシックなこの小さい魂は、理想に満ち／＼てゐると同時に、それが生物や無生物に執著して支へを求めてゐると思はれるほど實證的で——即ち殆んど相容れない、屢々相反撥する二つの資性を持つてゐて、その頃すでに研究の愛や眞理の熱情と共に、すべてを感じ、すべてを理解することの、此上ない悦びを味ふことが出来るのであつた。

かうした事情、即ち極めて苦しい貧困のたゞ中に於て、彼れはアヴィニオン師範學校の給費生たらんことを欲し、大膽にも競争試験を受けた。そして彼れの意力は最初の奇蹟を現じ、彼れはいき



なり、首席を奪取した。

教育が未だなく、下層階級に及ばなかつた當時、即ち一八四〇年代に於ては、師範學校に於て與へられる教育たるや、極めて大ざつばなものでつた。綴字法と數學と幾何學とが、殆んどその全部をなしてゐた。博物學などに至つては輕蔑せられ、殆んど知られざる碌でもない學問で、誰れ一人、これを思ふものもなく、況んやこれを研究するものなどはなかつた。そしてこんな學問は何んにもならないといふので、學校のプログラムもそれを眼中に入れてゐなかつた。しかしながら、一人フアブルに取つては、それは念頭を離れることのない不斷の専心だつた。そして「彼れの周りでは、書取りが根掘り葉掘りしられられたりしてゐる間に、彼れは机の中でこつそりと、胡蜂の針や夾竹桃の實なんかを調べて見たりする。」そして詩に酔ふては休暇を利用して、彼れはコンタの素晴らしい田舎を彷徨ひ歩き、アヴィニヨンから二十五キロ米突も遠いボオクリユズの泉までも歩いて行つたり、水の低い時には一しほ美しかつたと云ふ洞穴の中で夜を過したり、奇妙に蹲んだ、素晴らしい熊みたいな、眞黒な苔をつけた岩の上へ寝ころんだりした。こんな譯で、學校の勉強は影

響を蒙つた。そして師範學校在學中にはじめは、決して成績がよい方ではなかつた。第二年目の眞ん中頃に、彼れは怠け者と云はれ、低能の生徒とさへ記された。それが骨身にまで感じられて、彼れはお情けとしてまだ残つてゐる半期の間、第三年の課業を繼續する資格を與へて貰ふやうに頼んだ。そして彼れは偉い努力をなしたので、學年末には優等の證書を贏ち得たのであつた。

註一 私は彼れの無数の原稿の中で、彼れが恰度この時期に作つた多くの小詩を見出した。それは何れも即興のもので、韻も踏んだりしてゐるが、後年彼れが成つたやうな本當の詩人を思はせるものではなかつた。

註二 その時彼れは弟のフレデリックに席をあげる。フレデリックは彼れの例にならつて、すぐあとからついで來てゐたのだ。そして *Klévenaire boursier* といふ名稱を得たのであつた（一八四二年八月）。

正規の研究が終る一年前に、彼れの好奇心はあらゆる方面に對して自由に眼覺め、そしてだんだんと一般的になつた。偶然に聞いた化學の講義が、彼れの中に知る慾望——少くも原理を知りたいと渴望してゐたあらゆる科學に對して情熱を燃やさせた。時々彼れは再びラテン語に没頭し、ホラスを翻譯し、またヴィルヂイルを再讀した。ある日、校長はギリシヤ語とラテン語とで併べて書してあるイミタシオン (Imitation) を彼れの手に入れた。可成りよく分り出したラテン語は、ギリシ



ヤ語の意味を取る助けとなつた。彼れはその單語や、語句や、言ひ廻しなどを片端から暗記した。こんな奇妙なやり方によつて、彼れはギリシヤ語を覚えてしまつた。

だが、それが言語を學ぶ彼れの秘訣なのだ。彼れはラテン語を學ぼうといふ弟に奨めたのも、さうした行方である。

「ヴイルヂイルと辭書と文典とを持て。そしてラテン語をフランス語に、何處までもく翻譯せ。よい翻譯をするには、常識が肝腎だ。文法の智識や、他のベダンテツクな七むつかしい事なんか、あまり必要はない……」

「茲に消滅しかけた古い碑銘があるとして見る。缺けてゐる語を補ふために、正しい判斷を以てする。と、凡てが讀み取られるかのやうに意味がちやんと見付かる。ラテン語はお前にとつて、所謂古い碑銘である。語の根だけが分る。未味な言語の覆ひが、その語尾の意義を隠してゐる。お前の眼に見ゆるのは語の半ばに過ぎぬ。だが、常識と云ふものがある。それを働かせるんだ。」（一八五一年六月二日及び九日、弟へ與へた手紙）

## 二

## 小學教員

優等賞をもつて、十九歳の時、彼れは師範學校を卒業し、そしてカルバントラス (Carpentras) 公立中學校の附屬小學校に教師の初陣をなした。

一八四二年代にあつては、教員の給料は年俸七百フランを越えなかつた。教員はかうした収益のない職業によつて、僅かに「エヂプト豆と少しの葡萄酒とをもつて、」どうにか口を糊するに過ぎなかつた。それにしても、その後生活がますます騰貴してゐることを思へば、昔の小學教員のかうした甚だ貧弱な、その仕事とその社會的有用さとに甚だ不相應な給料も、數年以前の狀態と比較して、そんなに釣合ひが取れてゐないわけではないかも知れぬ。それから殆んど五十年経つたときでさへも、矢張り同様云ふに足らぬ額をもつて、若い教員等は教育界へ乗り出してゐるではないか。然しながら當時にあつて尙ほ酷いことには、彼等に恩給が貰へる見込みもなかつた。生活のためには、



たゞ勤勉を何處までも繼續するより他には道がなかつた。そして五六十年苦しい不安な生活をやつてから病氣にかゝるとか、老衰するとかすると、彼等を待ち構へてゐるものは、實に貧困のみではなく、多くの場合、それは眞暗な悲惨あるのみだつた。も少し経つて、彼等が救ひの最初の望みを垣間見出した時でさへも、遠くの方でびか／＼光らして見せられた恩給は、最初六十フランを出でなかつたのだ（一日三スウ！）。そして初等教育が、かうした恥かしい低級な状態から少しく擡頭しはじめると同時に、偉大なる文部大臣にして教育界の救済主たるデュリュイ (Duruy) の就任を俟たなければならなかつた。

此の中學校たるや、陰氣な建物で、それは何處か僧院風のところがあつた。一人／＼の教師は、二つの獨房を占めてゐた。と云ふのは大部分の教師は僅かばかりを拂つて、此の建物内に宿泊し、そして食事は校長と共にしたので。

それは面白くもない、うんざりするやうな、義務だらけの、甚だ骨の折れる生活だつた。かうした環境や、かうした教育が、どんなものだつたかと云ふことは、フアブル自身が描寫してゐる示唆的なる光景によつて、譯もなく想像される。「四つの高い塀に囲まれた、熊の穴見たいな中庭が、ちらりと私の眼に入る。あのプラタマの擴がつた枝の下では、生徒等が場所を争ふて、よく戯れ遊んだものだ。その周圍には、ずらりと日光も空氣もない、陰惨な、猛獸の檻見たいなものが擴がつてゐた。それが悲哀と、濕氣の沁む教室だつた……腰掛と云へば、壁にはめ込まれた一枚の板……真中には破れた一脚の椅子、黒板、それから一本の白墨！」（昆蟲記）

今日の廣々とした、眞白な學校の先生達は、未だそんなに遠くない此の時期に思ひを走らせて、一爾來成し遂げられた進歩を計つてみるがよい。そしてカルバントラスのハンブルな同僚の記憶を呼び起し、以てその先輩の凡ゆる偉大さを感じるがよい。それは極めて高貴な、極めて光榮ある範例で、彼等はこれを誇りとなす事の出来るものである。

然も何んといふ生徒だつたか！「汚い、無作法な生徒、五十人ばかりの腕白小僧、小さいのや大きいのや」のかうした碌でなし共と、恐らく「彼れは諍ひをしたであらう。」が、何がなんでも、



彼れは旨く彼等を制御し、彼等に尊敬せられ、耳を傾けられた。何んとなれば、彼れはどんなことを話せばいゝかを知つて居り、遊びながら極めて眞面目な事柄を、うまく教へ込むのだつた。けだし教へる喜びと、教へて常に自ら學んで行く喜びとが、彼れをしてどんなことにでも堪へしめたのだ。彼れは彼等に読み書き算數のやうな、當時小學教育の殆んど全プログラムを成してゐたところのものを教へたばかりでなく、また自分自身で智識を得るにつれて、それを旨く彼等に傳へることに、その頃すでに工夫を凝らしてゐた。そこで彼れの指導の下にあつた生徒等は、とん／＼拍子で進歩した。そして日増しにその數が増加した。エクス(A. E.) 技藝學校もしくは、アヴィニオン師範學校に入學志望をした多くのものは、好成绩でパスした。また彼れのお蔭で、カルバントラスの中等學校の評判はますます／＼高くなつて、未曾有の威望を得るに至つた。

彼れを支へたところのものは、單に仕事の愛のみではなかつた。それはまた此の轍を脱しようといふ熱望、尠くも此の驛を飛び越えようといふ熱望、つまり此の悲惨な位置を脱却しようといふ熱望でもあつた。ところで彼れをして中等教育界に「割込める」望みを懷かせたのは、單に自然科學と數學とであつた。そこで彼れは「彼れの流儀で作つた奇妙な實驗場を以て、たゞ一人物理を研究

し出した。そして化學を學んだのは、それを生徒等に教へることに依つてであつた。即ち彼等の前で「雁首を埒場にし、茴香の顆粒を入れた硝子壺をレトルトとして、」費用をかけないで初歩の小實驗をやつて見せたのだ。實際、自分の社會的役目を彼れの如くよく理解し、自分の努力について彼れの如く高い觀念を持つた小學教員は、たゞの一人も有りはせぬ。

彼れはよくかう云つた。「私の生徒等は田舎からやつて來てゐる。彼等はそこへ歸つてそれ／＼の土地を耕すであらう。だから土壤が何から出來てゐるか、植物が何を食つてゐるか、これを彼等に教へなければならぬ。また工業方面へ向うものもあるであらう。或ひは革屋、鑄物師、酒屋、石鹼屋、アンシヨワ(Anchois サアデンに類したもの)屋となるものもあるであらう。だからかういふ連中へは、鹽漬、石鹼製造、蒸溜器、タンニン、金屬などのことを教へなければならぬ。」(昆蟲記)

彼れが面白く物語つてゐる通り、彼れが代數を學んだのも、やはり同じ筆法だつた。それについて講義をはじめの前は、彼れ自身でんで何んにも知らないのだつた。

どんな風にして彼れは學んだか。彼れの方法の祕訣はどんなものだつたか。それから數年後、彼れはあとから同じ經歷を辿つて來た弟へ物語つてゐる。此の經歷——それは随分無駄骨にもなり、



甚だ儲けのないものではあるが、然し「極めて高貴な経歴の一つである。氣高い精神をもつたものや、善の友にはこれほどよい経歴はない。」（一八五〇年六月十日アルザエリーのアジャシヨオから弟へ）  
彼れが弟へ與へた教訓はかうだ。

「今日は木曜。外には何んにもお前を呼ぶものはない。お前は森閑とした、奥まつた部屋を選む。そこへ射し込む陽は、恰度いゝ位だ。そこでお前は兩腕をテーブルへ突いてゐる。兩方の親指は耳のかけへ行つてゐる。そしてお前の前には本が開かれてゐる。知性が眼さめる。意志がその手綱を取る。外界は消えて、もう聽えるものもない。もう見えるものもない。肉體は無くなつた。魂が自からを究める。それが自らを想ひ起す。それが自らの叡知を見出す。そして光りが射す。その時、時間が速く、實に速く經つ。時は刻まれはせぬ。もう夕べだ！……でも、幾多の眞理がちやんと記憶の中へ入つた。でも、昨日お前を阻んだ困難が、今日省察の火に溶けた。でも、幾冊かの本が呑み込めた。そしてお前はこの一日をうれしく思ふ……」

「……何んかお前に困ることのある場合、濫りに仲間の扶けを借りてはならぬ。扶けを借りたのは、困難が單に避けられるだけだ。忍耐と省察とをもつてすると、お前はそれを突き破る。それ自ら學ぶものでなければ、よく分るものではない。で、私はお前に出来るだけ、特に科學に對しては、省察以外の扶けを求めてはならないことを、切に忠告する。一冊の科學書は、解かなければならない謎である。もしもお前がその鍵を他から貰ふならば、その説明ほど簡單で且つ自然なやうに見えるものはなからう。だが、謎がもう一つ出て來てご覧。するとお前は、第一のそれに對すると同様、全く無力であらう……」

「何んか教訓が、求めないでも呈供せられることもある。故意に容易な、割のよいのを探つてはならぬ。むしろ、それがお前の未だ知らない事柄に關するものである場合でさへも、最もむづかしいのを探るべきである。見透かされまいと思ふ自尊心が、意志の力強い補ひである。備かばかりの、碌でもないラテン語の稽古をさせるために、巴里を戸毎に駆けずり廻つたジュール・ジャン(Jules Janin)のやり方を忘れてはならぬ。——私がどんなに努力をしても、生徒等は愚かで何んの効果もない。で、侯爵ののつば息子へ教へる時などは、私は同時に生徒であり、先生だつた。私は古代の作家を相手關はず自分自身のために解釋したのだ。こんな風にして二三ヶ月のうちに、私は自分自



身へ立派な修辭學の講義をした……」かう彼れは云つてゐる。

「何よりも落膽してはならぬ。意志が常に緊張し、常に働き、そして一刻もゆるまないならば、時などは問題にならぬ。——歩きさへすれば力が出る。」

「僅か兩三日でも、かうした勉強法をやつてご覧。一點に集中せられた全精力がダイナマイトのやうに爆發して、障碍物を飛散せしめる。忍耐の力、緊張の力、それを二三日の間試めしてご覧。すると不可能なことが分るだらう」(一八五〇年四月十日、アツヤシオから弟へ送つた手紙)

これらの實に高い、嚴肅な省察は、彼れの精神が當時すでに、その後には於けると同じやうに熱して居り、眞剣であり、緊張してゐたことを語るものである。そして又、これらの弟へ送つた立派な手紙の中に、彼れの自然に對する情熱が最もよく現はれ、同時に彼れの忍耐、執拗、研究愛、未來に對する動かすことの出来ない信念なども見られるのである。それは實際、素晴らしい勇氣と精力との教訓で、肩頭へ「苦味と甘味との混合」を残すところの、孤獨な研究に取りかゝることの出来るものには、何んといふ力と、何んといふ獨創力とを與へることか！

彼れは訓へに實例を結びつけてゐるのみではなかつた。彼れはまた周圍を見廻し、そして自然を有りのまゝに觀察し出した。ある日生徒をつれて、測量を教へるために荒地を過ぎつた時、彼れは始めて左官蜜蜂に出逢はした。この蜂の動作がひどく彼れの興味を唆り、彼れは到底好奇心を抑へることが出来ないで、たうとう、當時模範的著作だつたブランシヤアル (Blanchard) の關節動物研究 (Histoire naturelle des animaux articulés) を、あゝ！食ふものも食はないで購つたのであつた！この書は今日尙ほ、彼れが最初の感動と最初の悦びとの想ひ出として、彼れの書架の最も目につく場所へのせられてゐる。

石類もまた彼れの注意を惹きつけた。また終ひには彼れの龐大な植物標本となつた所のものも、當時すでに重なりはじめた。休暇にヴィザンへ出かけようとしてゐる弟へ、彼れは彼れの蒐集を完成すべき色々な植物を云つてやる。何んとなれば、彼れは幼い時去つてから、再び足を運んだことがないにも拘はらず、實に驚くべき正確さをもつて、生れた地方のあらゆる植物、それらが繁茂する場所、それらの確實な特長、それから彼れが小さい悪戯兒の頃、よく彷徨ひ歩いたすべての場所



をも想ひ起すのだ。——梅鉢草 (*Parnassia palustris*) が「村の西の山毛櫸林の中で、濕地に生える。そして少しく換れた莖の頂に素晴らしい一つの白い花をつける。その莖の中頃には一枚の卵形の葉がある。」狐尾草 (*Digitalis purpurea*) 「手袋の指の形をして、内側には白斑を撒いた赤い大きな花の、長い紡錘」のやうになつて、何處その道を縁取つてゐる。曠野に繁茂して「中へ入り込んで、は方角を知るに苦しむ」あらゆる羊齒。また干乾びた丘の上には、赤、白、青、そして葉はいろいろに違ふが「それにしても無数の種類に大した相違はない」あらゆるブリュイェール。それに、斯うも念を入れてゐる。「植物は大きからうが小さからうが、稀であらうが普通であらうが、すべてどんな植物にしても、それが一片の苔にしろ、尙ほ且つそれ／＼の興味が有るものだ。」(一八四六年八月十五日、カルバントラスから弟へ)

彼れは仕事に倦怠することはなく、あらゆるこれらの寶を研究するために、彼れの小さい博物館へ不斷に蒐集する。彼れは曾てローマ人の住んだこの古い土壤を發掘して、あらゆるメダルを拾ひ集める。それは「書籍などよりも雄辯な人類の記録」であつて、彼れに歴史を學んで眞にこれを復活させる唯一の方法を示すのだ。何んとなれば彼れは學問のうちに、單にパンを儲ける手段を見た

ばかりではなく、また、ある更に高貴なもの、眞理に對する瞑想の中に精神を高め、それを隨意に現實の悲惨から引離し、そしてかうした智的領域に於て、吾々に味ふことの許されてゐる唯一の幸福な時を見出す手段をも見たのであつた。(一八五〇年六月十日、アツヤシオより、弟への手紙)

かうした學問に對する情熱、彼れはそれに深く染まり、強く魅せられてゐる所から、ロオヌ河上、オランヂユより遠くないラバリユの小學教員となつてゐる弟にも、それを注ぎ込んでやりたいと思ふた。若しも弟と共にし得るならば、彼れは一層彼れの富を享樂することが出來ると考へた。(一八四六年八月十五日、カルバントラスより、弟への手紙) 彼れは弟を刺戟し、鼓舞し、そして彼れも持つてゐるやうに思はれた數學に對する著しい傾向を、どうにかして發揮せしめようと努めた。彼れはあらゆる力を用ひて自ら染つてゐる所の「あの眞と美との趣味」を弟の魂へも吹き込まうと努めた。「數年この方、あんなにも骨を折つて蓄めた」蘊蓄を、彼れは弟へも頌ちたいと思つた。彼れはよく休暇を利用しては、それを弟の前に開陳した。彼等はよく一緒に研究もした。「そして光りが射す」のだつた。何がどうあつても、弟の知性がそのまゝ眠つてはならぬ。「この神聖な光りを消さして



はならぬ。それは實際この光りがなくとも、實業をやるには差支へはなからう。が、立派な、しつかりした人間を作るものは、たゞこれのみである。」

いや、弟の知性をそのまま眠らしてはならぬ。その反對に、彼れをして不斷にその心——「吾々二人ともあてにすることの出来る此の唯一の世襲財産」を耕させなければならぬ。その報酬は精神的幸福である。恐らくまた物質的幸福をも、彼れは望んだことであらう。

彼れは更に次のやうな麗はしい勸告をなして、その助言を強めてゐる。この勸告こそは、常に彼れ自身の北斗であつた。

「……フレデリック。學問、學問がすべてである。……新しい智識を獲るためよりも、よりよく時間を用ひる途はない。こんなことはお前には分り切つたことで、私と一緒にそれを云ひもしないのだ。……で、機會がある場合にはうんと勉強せ……機會といふものは、澤山の人には無いもので、それについてはお前はひどく幸福だと思ふべきである。けれども私は擱筆する。何んとなれば、感激が此の頭へ上つて来るやうに思はれるから。また私の理由はすでに立派なもので、お前を説服するために更に堂々たる理由を持ち出す必要はないと思はれるから……」(一八四六年八月十五日、カル

パントラスから弟へ)

そして私は尙ほ彼れの精神の構成期にあるのだから、此のことをも忘れてはならぬ——即ち、彼れが一生愛惜して措かないトウツスネル (Toussanel) の著作を見出し、そして此の有名な作家の戀に關する描寫を通ほして、すでに蟲けらの中に習性や本能の重大なる役目を垣間見たのも、彼れにとつて凡ゆる種類の獲得に甚だ多産だつた此の時期のことである、と云ふこと。

彼れの娛樂と云へば、たゞ一つ狩獵だけだつた。それは特に雲雀狩りで、「到るところ葉末にかゝつた露の滴りや、霜柱が輝く中で、朝の太陽の光線を鏡を以てきら／＼と投げ返して」は、時の經つのも知らないのであつた。

彼れの眼と來ては素晴らしく確かなもので、狙ひを誤るやうなことは滅多になかつた。それにしても此の娛樂は、常に同じ動機に基づくものだつた。即ち新しい智識を得、未知の生き物を手に取つて見、何を彼等が食つてゐるか、どんな風に彼等が生活してゐるか、これを知るためだつた。



もつと後になつて彼れが再び獵銃を手にした時も、それは矢張り生に對する愛のため、羽根のあるセリニヤンの同郷人等を列擧し、リストを作り、そして研究するため、更に彼等の食物を調べ、餌袋や砂袋の中味を點檢して見るためだつた。

だが、彼れは間もなく、かうした娛樂は止めた。現在の必要や、未來の不安から來る殘忍な憂苦に迫られて、彼れは雜作もなく此の犠牲をなしたもののやうである。「明日は何處へどうなるかも分らないやうでは、何んにも面白くない。」(一八四八年九月三日、カルバントラスより弟への手紙)

第一、彼れをめぐる負擔が増した。彼れは結婚した。一八四四年十月三日、彼れは、やはり小學教員をしてゐたマリー・ヴィラルといふカルバントラスの若い女を娶つたのであつた。そしてもう子供が一人出來てゐた。それから彼れの兩親は、相變らず不運で、何處へ行つても旨くは行かなかつた。彼等は廻り廻つた揚句に、ドローム(Drôme)縣下の可成りな町、ピエールラツト(Pierre-la-Tour。石の多い町の意)へ流れ込んだ。この町の名前はそれを蔽ふてゐる大きな岩から來たものである。そのアルム廣場で彼等は勿論、またカフェを開いた。

此度は全家族がそれ／＼僅か二三里を距てて同じ地方に集つた。然し實際の首長は彼れである。

弟と母との間に何かたゞ／＼が起つたのを聞いて、彼れはフレデリックへ手紙を送り、彼れをさとし、しんみり叱り、そして「過ちが全然彼れにないとしても、」きつと仲直りするやうにと云つてやつた。

「父がある手紙の中で、近くに拘はらずお前がまだやつて來てくれないと零してゐる。面白くないことのあることは、俺もよく知つてゐる。だが、それが如何したと云ふのだ。諦める。何もかも忘れてしまへ。そしてかうしたつまらない、みつともない仲違ひなんかをきつぱり止すやうに、出來るだけのことをしてくれ。俺の云ふことを聽いてくれるだらう、ね？ みんなの幸福のために、俺はどうかさうして貰ひたい……」(一八四八年九月八日、カルバントラスから弟への手紙)

彼等の中にあつて、彼れは彼等の仲裁者であり、相談相手であり、神託であり、楔である。

さうかうしてゐる間にも、彼れは彼れの未來を決定すべき二つの試験を受ける準備をした。間もなく彼れはモンペリエに於て、殆んど相次いで、僅かに二三ヶ月の間を置いて、二つの學士號を貰ひ、それから數學と物理學との教員免狀を得た。



彼れがこれらの試験準備に熱中してゐる間に、不幸がはじめて彼れの戸口を訪れた。彼れの長子が突然病氣にかゝつて、兩三日の中に死んでしまふ。この場合に於て、彼れのあらゆる熱烈な精神主義が、弟へその喪を知らせてやつた手紙の中で、悲痛な調子をとつて現はれた。

「二三日この方、眼に見えて快方に向ひ、私も奴が助かつたものだと思ひ込んでゐたら、二つの大きい齒が落ちた……恐ろしい熱が三日のうちに奴を搔拂つてしまつた。勿論何時までも忘れることの出来ない吾々からではない。此の悲惨な世からである。可哀さうな子、あゝ！ 茫乎とした大きい眼をお前は空へ向け、そして新しい祖國への道を探してゐたあの最後の瞬間に於けるお前を、私は何時までも忘れることは出来なからう。胸に涙をたゝえて、私はしばしばお前の行方を思ふであらう。しかし乍ら、あゝ！ 肉の眼では、お前はもう見えなからう。私はもうお前に逢へなからう。それにしても僅か二三日前のことではないか——私がお前のためにいろ／＼な、此上もなくうれしい計畫を立てたりしてゐたのは。私はたゞお前のためにのみ精を出してゐたのだ。研究をしてゐるうちにも、私はたゞお前のことのみ考へて、よくお前さんへかう云つてゐた——大きくなれ。そしてたらお前の魂の中へ、私は随分苦しい思ひをしながらも、少しづつ蓄めてゐる智識を注ぎ込んでや

らう……然しながら私は省察を通ほして、更に高い思想に達する。私は涙を胸の中に吞み込む。そして天が慈悲深くも、彼れをしてこの世の辛酸を嘗めさせないことを、心から祝福する。……可哀相な子よ……お前はお前の父のやうに、悲惨や貧困や不幸やと闘はなくともよからう。お前はこの世の辛酸や、實に多くの道が不運に導く時代にあつて、一つの位置を作ることの困難などを知るとはなからう……私はお前にあこがれる。それはお前がゐるので、淋しいからである。けれども私は喜ぶ。何んとなればお前が幸福であるからだ……お前は幸福だ。それは悲哀にくづ折れた父の狂ほしい希望ではない。否、お前の最後の眼差がこれを疑ふ餘地のないやうに、明らかに私に語つた。あゝ！ 唇頭の息も將に消えようとし、眼を天に向け、魂は將に神の懷に飛入らうとし、臨終の蒼白なお前は何んと美しかつたことか！ お前の最後の日は、もつとも美しかつた！」（一八四八年九月八日、カルバントラスから弟への手紙）

研究が彼れの隠れ家であり、これによつて彼れはかうした不幸な日の重さをも、それほど感ずることなしに過すことが出来た。けれども彼れの窮状たるや、實に残酷なものだつた。そして彼れ



は「乞食のやうに、その日／＼の」みぢめな生活をした。

教育も重きをなさなかつた暗い當時にあつては、小學教員の給料仕拂が、數ヶ月も遅れるやうなことは屢々あることだつた。カルバントラスの町なども、「資金がないので」僅かづゝしか拂はないのみか、何時までも永く待たせるのであつた。「僅かばかりのものを貰ふために、會計係の戸口へ詰めかけなければならぬ。私もこれにはうんざりする。で、何處か他所で金が引出せるんだつたら、喜んでこんなものは棄權する。」

そこで彼れは轉任の報告をしきりに望んでゐた。そして彼れはたゞ官立中學校へ物理の先生として就職したいと云ふ、ひどくつゝまじやかな野心を持つてゐるだけだつた。すでに二回も學士號を得たこんな珍らしい力柄のある青年が、高い位置にある人達によつて少しも認められず、彼れにふさはしくない低い位置に、かくも永い間放擲して置かれるのは惜しいものだ、と、彼れの校長が不審に思ふてゐたのも尤ものである。

それにしても終ひには、何時まで経つたつて何んの音沙汰もないので、とう／＼勘忍袋の緒が切

れた。トゥルノン (Tournon) の數學の教職が、彼れには與へられない。アヴィニヨンのそれも彼れには如何にして、また何故だか分らないが、「やつぱり彼れの指をもぐり抜けて了ふ。」彼れは「世間とはどんなものか、またあらゆる空席を狙ふ陰謀家、嘆願者、馬鹿者などの群の中で、頭角を現はすことの如何に困難であるかを、はつきりと認めはじめ。」

然しながら彼れの胸は、「それにしても憤怒に燃える。」彼れは「こんな碌でもないカルバントラスの穴」にうんざりしてしまふ。そしてもう一遍休暇がやつて來た時、彼れは「問題を正面から考察し」て、「小學校なんかへ二度と足を突込みやしない」と宣言した。(一八四八年九月三日、カルバントラスから弟への手紙)

彼はニイム (Nime) のアカデミイ院長へあてて書いた。

「長い間幾多の極めて苦がい失望に馴れては居りますが、此度のことほど私を激しく打つたものはありません……私があなたに差上げた最初の手紙の中で、私はかう申し上げました。——私の占めてゐる位置について申しますと、何が如何あつても私は二度とそれを繰り返へさうとは思ひません。當時と同じやうに、私には最早や他の位置につく望みのない今日、私の決心は行先きたゞ極めて悲





36  
惨な年があるのみですが、依然として斷乎たるものであります。動詞の活用や言葉の分析をやらしたりして、私の時を過ごすなどといふことは、到底私の堪ゆるところではなく、私は最早やこれを受諾する勇氣をもつては居りません。初等學校の狭い範圍に閉ぢこめて置かれないうで、私に私の研究と思想とに適した位置が與へられるならば、その時にはどんなものが私の頭に潜んでゐるか、どんなに倦むことのない活動力が私の中にあるか、これをお目にかけます。然しながら今日まで私が託されて來た位置は、いろ／＼な理由によつて堪へられなくなりました。そして私はもう一年これを勤めて行くだけの我慢は持ち合はせません。斯様な次第ですから、院長殿、閣下は最初の機會に私自身を如何にでもせられることが出来るやうに、私の位置をも如何にでもして下さい。私はさうした機會の間もなく實現されることを切望いたします。」(一八四八年九月二十九日、ニームのアカデミイ院長への手紙)

それにしても彼れは我慢をした。彼れは自分の運命に對して呪ひ、またぶり／＼怒りもした。でも「これといふこともないので、」彼れは再び居居わらなければならなかつた。彼れはまた弟へ思ひの有りつたけを打明けてゐる。その計畫なり考へなりを、弟へ洩らさないでゐることは出來ないの

だ。居居わることには居居わつても、さすがに「その不公平は前代未聞のことである。こんなことは曾てなかつた。また何時になつても無いことであらう。學士號を二つも呉れて置いて、鼻たらし小僧共へ動詞の活用をやらせるなんて、實にひどい！」(一八四八年九月二十九日、弟への手紙)

バルザックの天才は、つゝまじやかな、同時に天晴れな、貧しい、そして高貴な生活の典型を、幾つか不死にした。彼れは村の牧師や田舎醫者を描いた。然しながら、さうした澤山の生々した人物と共に、五十年前の教育家の生活の描寫、當時の小學教員のそれをも彼れの著作の中に見られたならば、如何にうれしいことだつたらうか。あゝした切りつめた奴隷的な苦しい生活、それにしても立派な、時には義務の觀念に満ち、何よりも特に隱忍の生活——フアブルはさうした生活の好個のモデルとなることが出來たであらう。彼れ自身がさうした生活の忘るべからざる輪郭を描いてゐる。



### 三

#### コルシカ滞在

たうとう俸給千八百フランの物理の講座が、アジャツシオ (Ajaccio コルシカ島) 中學へ偶然出来た。彼れはそこへ一八四九年一月二十二日附、省令によつて赴任した。

「極めて幸ひな天賦の才をもつた氏に與へられた此の報酬は、久しい間期待されたもので、甚だ遅蒔きである。氏は自らの意志と努力とのみによつて、かくも數學を深く研究したのである。」(一八四九年一月一日、Echo du Ventoux 紙)

當時の諸新聞が、彼れの任命を歓迎したのは、さうした言葉をもつてであつた。それほど彼れの人格も、彼れの教授の質も、すでに世人の輿論に重きを成してゐた。

その時彼れはコルシカを知つた。この島から、彼れは強い印象を受けた。アヴェイロンの百姓の



悴が生れながらに持つてゐた強い感性が、此所でいよく判然となり、ますます鋭くなつて行つた。この素晴らしい自然が、彼れのために作られ、また彼れは自然のために生まれ、そしてこれを理解し、これを紹介する任務を帯びてゐるかのやうに、彼れは感ずるのであつた。彼れは酔ふた様な氣持で、よく深い林や、香の高い花に満ちた山などに分け入り、或ひは桃金娘の籠、或ひは乳香樹、楊梅などの密林の中をさまよふた。そして幹の巨大な、枝葉の混んだバステリカの幾百年も経つた栗の老木にでも差しかゝると、その小暗い崇高さに一種の詩的な、宗教的な哀愁を感じ、殆んど感激を抑へることが出来ないであつた。(セリニャンに於ての會話) 彼れはまた際涯なき海を前にして波の歌を聞いたり、泡立つ水が濱に残して行く素晴らしい貝類を拾つたり、さうしてはよく恍惚の境に入るのであつた。さうした貝殻に思ひがけない形のものでもあると、彼れは此上もなく喜ぶのであつた。

永遠の緑に飾られた郊外を持つ、かくも美しい、かくも魅力のある靜かなアジャツシオ滞在に、彼れは間もなくすつかり親しみを覺える。漠然たる轉任の希望があるにも拘らず、彼れはもう此處

を去ることになりはしないかと慮れる。彼れはそれを讚美し、その壯大な詩的な方面を激賞して倦むことがない。周囲の灌木密林の中をさまよひ歩いた時、如何に彼れはその感激を父や弟と頌ちたと思つたことか!

「海は足下に限りなく續いて光り輝いてゐる。花崗石の恐ろしい大岩が頭上に聳えてゐる。眞白な小綺麗な町が水際に坐つてゐる。そして桃金娘の果てしない繁みからは、酔ふやうな香氣が漂ひ、曾て犁の刃も立つたことのない荊棘が、山を麓から頂上に到るまで蔽ひ、漁夫の小舟が灣を縫ふてゐる。それはすべて實に莊麗な、實に印象の深い一幅の圖であつて、一度びこれを見たものは、必ず再び見んことを欲するであらう。」(一八五〇年四月十四日、アジャツシオより弟への手紙)

「此處の丘の上に横はつてゐる根もあらはな花崗石の岩に較べれば」ピエールラットの巨岩——彼等が住んでゐる場所を俯瞰してゐる巨岩——沖積土の太古の海の表面に突立つ暗礁もお話にはならぬ。

また「アジャツシオ灣のほとりに屹立し、平野が焼けて瓦のやうな響きを立てる時でさへも、常に雪の白衣をつけ、そして雲に蔽はれてゐる劍山と較べては、」故郷の平野を走つてゐるオウブラツ



ククの山々もお話にはならぬ。ヴァントウ山、あの素晴らしいアルプスさへも顔色がない。

かうした最初の印象は、時のために弱められはしない。滞在すること一年有餘にしても、彼れの驚嘆は尙ほもつゞいてゐる。「これらの大理石の山嶺は、天候の峻烈さに嚙まれ、雷電のために轉覆せられ、ぎざ／＼にせられ、遅々たるものではあるが、確實な雪の作用によつて崩解せられてゐる。そして眩惑するやうな深淵の中では四方の風が哮え、巨大な斜面には深さが十、二十、三十米突もある雪の床が敷かれてゐる。そして其處を冷たい流れがうね／＼し、一滴また一滴、あんどりと開いた噴火口を満して湖水を形成する。それが曇つた時には墨のやうに黒く、晴れた時には空のやうに青い……」

「けれどもこの眼狂ほしい光景、恐ろしく不秩序に重ねられた此の岩石の混沌に關して、少しの概念でもお前に傳へることは不可能である。眼を閉ぢてかうした地の激變の結果を想ひ見る時——底もない暗い闇、見るだに恐ろしい深淵を翔ける鷲の叫聲を聞く時、私は眩暈にかゝる。そして私は何うなることかと思つて眼を開く。そして、ほつと……」

そして後れはもつとも高い山嶺の永遠の雪の中で、白銀の毛氈を敷くオランプ山の鼠麴草（Helichrysum des frimas）の葉を幾枚か、彼れの手紙へ入れてやる。「これを何んか本の間へ挟んで置け。そして何時かその本を開いて鼠麴草がお前の眼につくやうなことがあつたら、それはいゝ機會だ、それが摘まれた場所の美しくも恐ろしい光景を想ひ見よ。」（一八五一年八月十一日、アジャツシオより弟への手紙）

「今、何處か平地のつまらない、うんざりするやうな地方へでもやられるならば」彼れにとつては何んといふ不幸だらう。彼れはどんなに名殘惜しく思ふであらう。

彼れにとつては此處のすべてが、單に植物のみではなく、この特異な地方の海の富も、未だ人の眼に觸れないものである。彼れは一片のパンをポケットへ入れて、朝早くから家を出で、入江を訪づれ、素晴らしい灣の濱邊を駆けずり廻る。そして淡水が見付からないので、海水をもつて湯を醫したりした。



實際それは、紅の幻想に満ち／＼た朝だった。その頬笑むやうな希望が、弟へ送られた素晴らし  
い手紙の中にあふれてゐる。その頃すでに彼れはコルシカの貝類學——その陸と水とに棲んでゐる  
あらゆる貝類の、大規模な比較研究を思ひ立つてゐた。彼れは手に入れられるだけの貝類を採集す  
る。單に海の種類のみでなく、また陸や淡水に棲む種類の、生きたのや化石したのを描寫し、分類  
し、排列する。彼れはラパリュの沼、オランヂュ近傍の小川、若しくは溝に見付かる貝類を、片端  
から採集して呉れるやうに弟へ云つてやる。彼れは熱情のあまり、恐らく弟には滑稽な、もしくは  
無益な業と思はれるかも知れない斯うした研究の、測り知るべからざる興味を彼れにも信ぜしめよ  
うとする。さう、滑稽でもあり無益でもあらうが、たゞ地質學を念頭に置かなければならぬ。ひよ  
つこり手に入るつまらない様な貝も、突然かく／＼の地層の構成を明らかにするではなからうか。  
どんなものでも輕蔑すべきではない。最も稀な貝や、もつとも美しい貝に、偉人の名をつけて、彼  
等を尊崇しようと考へたのは、さすがに道理のあることである。たとへばコルシカの楊梅が繁る高  
山の洞穴以外には見付からない華麗なまいまいつぶり、が、ラスバイユ (Raspail) に獻げられて、ラ  
スパイユのまいまいつぶり (Helix Raspail) と云はれてゐる如きである。

註一 一八五一年六月九日、弟への手紙に「……私はコルシカ島の貝類學を研究しだした。間もなくこれを  
出版したいと思ふ」

尙また「ライブニッツ (Leibnitz) の微積分は、ルウヴル (Louvre) の建築も、一蝸牛のそれほど  
巧妙ではないことを證明するであらう。凡々たる世人のやうに、お前も蒨葎草とオランダのフロマ  
アヂユとをもつて料理せられたものしか知らない蝸牛も、實は永遠の幾何學者であつて、その殻の  
上へ優秀な螺旋線を巻きつけてゐる。」(一八五〇年六月十日、アジャツシオより弟への手紙)

だが、そのため彼れは數學をゆるかせにするやうなことはなかつた。彼れはそれに豊富な、暗示  
的な氣休めを見出してゐる。ある圓形、もしくはある曲線の性質を新たに發見して、それがため彼  
れは二晩も三晩も眠れないやうなこともあつた。

「今朝一ぱい、私は星形の多角形を研究した。そして驚異から驚異へと進んだ……進むにつれて遠  
くに思ひがけない靈妙な結果を認めながら……」

そして多角形の「刺のたゞ中に於て、」突如として彼れの心に浮ぶいろ／＼な問題のうち、その一



つはかうしたものである——太陽の大氣が地球にまで及ぶならば、その自轉の速度は何うなるであらうか。そして此の疑問は他の問題を生ますにゐない。「それが無ければ鎖は即座に斷絶する——數、空間、運動、秩序等が、たゞ一個の鎖を形づくつてゐるのだ。そしてその最初の環が他のすべてを動かしてゐる。」(一八五〇年六月十日、アジャツシオより弟への手紙)

さうしてと、植物及び貝類とに熱中してゐると、時間は速く、實に速く經つて、「文字通りに食ふ暇もない」(同前の手紙)

抑も彼れは生れながらの詩人である。そして數學は詩に接觸してゐる。彼れは代數の中に「素晴らしい羽化登仙の思ひ」を感じる。そして解説幾何の圓形は、彼れの想像の中に「莊嚴な聯句となつて」展開する。——楕圓は「遊星の彈道で、その親戚關係のある二つの焦點が、動徑の不變な和を護り合ふ」——雙曲線は「相容れぬ焦點を持つた絶望的な曲線で、次第に漸近線となるけれども決して直線となることはなく、無限の觸手のやうに空間に突入る」——拋物線は「その失はれた第一の焦點を、無限に空しくも探し求める。それは砲彈の彈道である。それは一日吾々の太陽を訪づ

れに來て、それから幽玄の中へ去つて再び歸ることのない彗星の道である……」

そして情熱に満ちた感激にふるへながら、彼れはある朝、「不可抗な、萬能な宇宙の鍵たる數 (Le Nombre) が、同時に時間と空間とを調整する」ところの高い領域にまで登る。シャリオ (Chariot 座の名) よりも遙かに遠く

空間をうなひ、諸天の畝に

太陽を蒔く農夫 (Boivier 金牛宮) の彼方へ

彼れは登り進む。

彼れは焔の道をよち登る。さうした高みの

……狂ほしい戰場に於て

賢き調整者——數は無數の馭し難い



荒馬の手綱を採つてゐる。

數は無數のレヴィヤタンの泡吹く口へ  
轡をはめて、手に力を込めて、

彼等をそれ／＼の道に導く。

.....

彼等の背は鞭の下に空しくも顫へて汗を流す。

空しくも彼等は泡の代りに鼻穴から、

溶岩の熱い瀑布を噴く。暴れ狂ふても詮方はない。

數は勇み立つ彼等の足並を整へる

數は或ひは銜をもつて彼等をしづめ

或ひは彼等の腹へ、その神々しい拍車を突立てる。

.....

—— Le Nombre と云ふ詩、一八五二年九月アジャシオに於て

後年、彼れは文章家として、幾何學に負ふところのものを打ち明けてゐる。嚴格な幾何學の訓練は、精神を練つて型をつけ、思索に正確と明晰との有益な習慣を與へ、不正確な、もしくは漠然たる言葉を避けしめる。それはあらゆる「修辭學の譬喩」などよりも遙かにすぐれたものである。

彼れはその頃、アヴィニオン生れの植物學者、ルキヤン (Requien) の門人となつた。ルキヤンは高貴な精神の持主ではあつたが、眼界はあまり廣くなく、彼れへ他の地平線を開いてやることは出来なかつた。が、ルキヤンを通してファブルは、尠くも未だ知らなかつた多くの植物の名を覺えた。彼れはファブルにコルシカの無數の植物を示した。ファブル自身もこれを研究しに來たのであつた。そしてあんなに多くの材料を採集することになつたのである。

ファブルはルキヤンのうちに師を見出したのみならず、何かにつけて相談の出来る友をも見出した。そしてルキヤンが殆んど突然ボニファシオ (Bonifacio) で亡くなつた時、彼れはその悲報を手



にして泣きくづ折れた。恰度その日、彼れは自分のために摘まれた植物の一梱を机に載せてゐた。「私はそれを見ると胸が押しつけられ、眼が涙にくもる。」かうその瞬間に弟へ書いてゐる。(一八  
五一年六月二日、アジャツシオより弟への手紙)

とは云へ、ルキヤンの代りにコルシカへやつて来たトルウズの教授、モツカン・タンドン (Moy  
quin-Tandon) との邂逅は、實に驚くべきほど多産なものだつた。それはフアブルの將來に決定的な  
影響を及ぼした。モツカン・タンドンがコルシカへ来たのは、ルキヤンの完成しなかつた事業、あ  
の素晴らしい植物の富の完全なリストを完了するためだつた。そしてそれにはモツカン・タンドンと  
フアブルとが共に、モント・レノソ (Monte Ranoso) の山腹や頂上へ、時としては「マントを背  
負ひ、寒さに凍えながら雲の中までも、」無数の種や變種やを採集しに行くのであつた。

然しながらフアブルの伴侶は、なか／＼彼れと一緒に來ないのみか、間もなく足が棒になつて、一  
遙か後方にまご／＼したりしてゐるのであつた。そんな時には元氣をつけるために、彼れは頂上で  
彼等を待ち設けてゐる素晴らしい植物を、伴侶の眼の前に浮ばせて見せたりするのであつた。(一八

五二年十月十日、弟への手紙)

モツカン・タンドンは單にすぐれた博物學者であるのみならず、また當時もつとも雄辯な、もつ  
とも博識な科學者の一人であつた。フアブルは彼れから、勿論その天才ではないが、彼れの取るべ  
きたしかな道の、たしかな暗示を受けた。そして彼れは最早やこの道から逸れることは出來ないの  
であつた。

モツカン・タンドンはまた傑れた作家であつて、「その郷土モンベリエの言葉で書く巧みな詩人」  
である。そして彼れはフアブルに、植物學のやうな純然たる記述科學の陳述に於てさへも、文體の  
價値や、形式の重要さを忘れてはならないことを教へた。それどころではない。彼れはある日、突  
然果物とフロマアヂユとの間に「水を滿した皿の中で」蝸牛の解剖をフアブルに示した。それが後  
に述べる決定的啓示の前に於ける彼れの、本當の使命に對する端緒となつた。たとひ今後の經歷が  
如何にどうならうと、數學へ執着してゐるよりも、寧ろこの方面でたしかに自分が、大いに成すこ  
ろあると云ふことを、フアブルはその日、その時悟つたのである。

註一 ミストラルの Mémoires. — モツカン・タンドンはモンベリエで生まれ、次々にマルセイユ、トル



ウズ、及び巴里で博物學を教授した。彼れが Fretot の雅號をもつて公けにした *Le monde de la mer* は、フアブルの愛讀書であつた。そして今日尙ほセリニヤンの小書架の上段に飾られてゐる。

「幾何學者は作られる。科學者は生れる。そして博物學が私の愛好する科學であることは、誰よりもお前によく分つてゐる」——かう、尙も出來事に感激して彼れは弟へ書いてゐる。「一八五〇年十月十日、アジャツシオにて弟へ」

そこで彼れは單に好奇心を満足させるために、死んで動かない、もしくは干上つた研究材料を蒐集するばかりではなく、また彼れが今まで會てしたことのない解剖を熱心にやり出した。彼れは戸棚の中へいろ／＼な小さいお客を澤山宿す。もうこれから先きは、彼れは小さい蟲けらにのみ氣を奪はれるのだ。

「私は無限に小さいものを解剖してゐる。私のメスは細い針をもつて自分で作る小さい劍である。私の大理石の臺板は、皿の底である。私の捕虜共は十四位づゝ、古いマツチ箱の中へ宿される——」

*Maxime miranda in minimis.* (同前)

さうかうしてゐる間に、彼れは熱病にとつつかれた。ソロオニユ (Solong) 地方が八十年以前にさうであつたと同じやうに、今日尙ほ頗る不衛生な此の島に於て、彼れは、病氣と死とが岸邊に潜む沼地のほとりを、夕べ彷彿たりしたためである。數回の恐ろしい發作が、はげしい震ひを伴ひ、間もなく甚だ疲勞し衰弱して、不本意ながら彼れは遂に轉任を請願し、速かに大陸へ歸られるやうに切願さへしなければならなかつた。

とかくするうちに、彼れは健康回復のために休暇を得た。そしてプロヴァンスへ歸つたのであるが、甚だしい三日二夜の恐ろしい航海には、彼れはもうこれが最後とさへ思つたのであつた。

註一 一八五一年十二月三日、カルバントラスにて、弟へ。「私達の航海は堪らなかつた。私はあんな恐ろしい海を見たこともない。そして汽船が濤に打ち碎かれなかつたのは、私共の最後がまだ來なかつたからなんだ。二三回、私はもうお終ひと思つた。その時私の感じた恐ろしい印象は、想像に任せる。普通ならば吾々を載せた汽船が、アジャツシオ・マルセイユ航海に十八時間ばかりかゝる。此の船は地中海のもつともすぐれた歩き手だつてことだ。此度と來た日には、それが三日二夜もかゝつたぢやないか。」

だん／＼と彼れは健康を恢復する。そして更めてアジャツシオへ一寸滞在してから、彼れはアズイニヨンの官立中學校へ任命の報を受けた。



仙境のやうな此の島に滞在すること四年にして、想像は豊富にせられ、精神は擴大せられ、彼れはもう之れから先の仕事に對して判然と定つた、徹頭徹尾圓熟した觀念をもつて歸つて來る。

#### 四

#### アヴィニヨンのファブル

執拗な働き手である彼れは一層の熱心さをもつて、再び猛烈な仕事に取りかゝる。それはある高貴な希望、即ち高等教育界に入つて、大學の講座で「動物や植物のことを話さう」といふ希望が、今や絶えず彼れの念頭を離れないからだ。彼れが數學と物理との二つの學士號へ、更に自然科学のそれをも附け加へたのは、この目的のためである。その成功たるや、眞に勝利であつた。

すでに眞理と信ずることは、飽くまでも、大膽に斷定するに憚らない彼れは、トゥルウズの教授連を驚かせしめ、困惑せしめた。試験の問題の中には、當時熱烈に議論されつゝあつた、やかましい自生 (générations spontanées) の問題があつた。そして試験官は、たま／＼この學說の大なる使徒の一人であつた。未來のダアキンの敵は、失敗の危険をも顧みないで、堂々と「彼れに反抗」して彼れ自身の信念を開陳したのであつた。彼れは彼れなりに責任を帯びて、この困難な問題を片づけ



た。すでに甚だ顯著なこの人物は、賞讃の眼を以て見られた。この人並でない志願者は、情熱をもつて迎へられた。若しも國民教育に對する豫算があんなにも貧弱でなかつたならば、彼れの受験料は返却せられたことであらう。

註一 一八五四年八月一日、アヴィニヨンにて、弟へ。「私はトゥルウズから今歸つて來た。こんな願つたり適つたりの試験を受けたことはない。私は御丁寧な祝辭をもつて學士の稱號を與へられた。そして受験料は私に戻される筈である。試験は思つたよりも程度が高かつた。」

が、かうした花々しい成功をしてゐながら、何故フアブルは大學教授の資格を得ようとはしなかつたのか。それは未來に於て、彼れに多くの失望を免れしめることが出來たらうではないか。然しながら、彼れの眞使命がそこには無く、その方面を辿れば道を誤るといふことを恐らく彼れは密かに感じてゐたのだらう。いろ／＼慫慂せられたにも拘はらず、彼れは「只管博物學のなつかしい研究にのみ」心に向けた。彼れは競争試験の準備をしたりして、貴重な時間を失ひ、「空と思はれるさうした骨折りによつて、」彼れがはじめてゐる研究——すでにコルシカに於て企てた調査を「臺なしにする」ことを恐れる。それは彼れが最初の獨創的研究、自然科學の博士號に對して準備してゐる

論文のことである。「これはやがて教授の資格や數學などよりも、易々と大學の門戸を開いてくれるだらう」(一八五〇年十月十日、アジャシオにて弟へ)

割つて見れば、彼れは稱號や顯職なんかに對して全く無頓着なのだ。彼れは特に知るために努力するのであつて、成り上るためでもなく、縋るためでもない。何よりも彼れの希望するところのは、ゆつくりと自然の不可思議な學問に獻身の出來ることである。そこに彼れは魅力に満ちた研究、何んだか活氣があり、生々してゐるもの、そゝるやうな無數の主題、妙に詩的なものなどを漠然と垣間見てゐるのである。

未だ現はれない彼れの天才は、暗がりの中で熟してゐた。そして將に跳り出でんとするそれに缺けてゐるものは、たゞそれをして兩翼をひろげしめる好機だけだつた。

彼れは未だ摸索してゐた。見出すことは出來なかつた。恰度そのとき、當時ランド (Landes) の



奥に住んでゐた有名な昆蟲學者、レオン・デュフウル (Leon Dufour) の著作が、偶然彼れの手になり、それが最初の火の子を燃やさして、彼れの思想の方向を決定した。

すでに彼れの中に潜んでゐた多くの芽を、不意に吹かしたところのものは、即ちこの出来事だつた。それらの芽は、一八五四年の冬のある夕べ、恰度よくやつて来たさうした機会を、只管に待つてゐたのだ。それは恰度マイヤヌ (Mailane) に於けるエティヤヌ・ブラボン (Etienne Pelabon) のマニクロ (Maniclo) の上演が、ミストラルの天稟を覺ましたと同じである。

こんな風にファブルも亦、才能の發顯に於て、屢々偶然の演ずる役目の實例を見せてゐる。實際、少しも期待することはなく、全く例外なある機会によつて、如何に多くの人々が、夢想だにもしなかつた資性を彼等の中に覺まされたことか！

パストウル (Louis Pasteur 1822—1895) があの實に多くの素晴らしい發見の端緒となつた分子の不均性に關する研究に熱中したのも、ある結晶の持つ特性の比較に關するロシヤの化學者ミツチエリツヒ (Mitscherlich) の一ノートに眼を通ほしたといふことだけに依るではないか。

更に他の場合を云へば、蜜蜂の有名な觀察者ユベール (Fr. Huber) は、レオミュル (Reaumur) の

ある實驗を單なる好奇心から實證して見ようとして、直ちにこの研究に熱中し、そしてそれに全生涯をさしげることになつたのだ。

またクロオド・ベルナル (Claude Bernard) がもしもマデヤンデイ (Magendie) と逢ふ機会がなかつたならば、彼れは果して如何なつたであらうか。

これと同じくレオン・デュフウルの小冊子は、ファブルにとつてダマスの道だつた。そして電撃のやうに彼れの使命を決定した。

註一 Chemin de Damas — 聖ポールがダマスへ行く途中で灯を見、その時までキリスト教信者を迫害して來たのが、突然キリスト教の使徒となつた、といふ故事からダマスの道と云へば、吾々の思想、感情を急激に變化させる突然のある光りを意味する。ダマスは今のアジャトルコの町である。(譯者)

その小冊子といふのは或る膜翅類、ある胡蜂、あるつちすがり (Cerceris) の習性に關する甚だ奇妙な一事實を取扱つたものだつた。デュフウルは此の蜂の巢の中で、死んだやうに見えながら、尙ほ嘘と思はれるほど永い間、金や眞鍮や綠玉やの光澤美しい着物が少しも損はれずに保存せられ、肉の新鮮味も全く保存せられてゐる吉丁蟲屬たまひしの小さい甲蟲を發見したのである。一言にして云へば



かうしたつちすがりの犠牲共は、なか／＼干上つたり腐つたりするどころか、全く思ひもよらぬ完全な状態を呈してゐたのだ。

デュフウルは簡単に、これらの吉丁蟲が死んでゐると考へてゐた。そして彼れはかうした現象をこの胡蜂の毒には所謂保存性があると云ふ假定に基いて、どうやら片付けて居つたのだ。

ファブルは好奇心と興味をそゝられて、自ら事實を観察して見る氣になつた。そして彼れのひどく驚かされたことには、當時「昆蟲學の長老」と呼ばれてゐたこの學者の觀察が、如何に不完全であり、如何に不徹底であるかが分つた。

その瞬間から、彼れは自分の前途を明らかに見た。そして自然のこの廣い方面には、多くの研究すべきものと、多くの訂正すべきものとあることを思ひ、レオミユルとユベエル兄弟とによつて、あんなにも素晴らしく着手せられ、然もこれらの傑出せる大家以後、殆んど顧みるもののない研究を、我こそやつてやらうといふ氣になつた。こゝに新しい畑、開發すべき無限の未開の野、思ひもよらぬ創設すべき科學、發見すべき美事な祕密、解決すべき素晴らしい問題などのあることを、彼れは看取した。そして彼れは全力を盡して自分をこれに献げ、全生涯を此の目的のために使用せん

ことを望んだ。そしてあの長い生涯の多産な活動が、殆んど九十歳に至るまでも繼續せられ、そして何よりも人間としての權威、科學者としての正直さ、觀察者としての天才、作家としての獨創などの點で、眞に代表的なものとなつたのである。

突如として科學界の視線を惹いた彼れの素晴らしい論文が、始めて自然科学雜誌 (*Annales des sciences naturelles*) 上に現はれたのは一八五五年である。それは非常なもの、奇蹟的なものと云つてもよいやうな大きいつちすがり、ある巨大な胡蜂「ヴァントウ山の麓で餌をあさる膜翅類中の最も美しいもの」の歴史であつた。

註一 つちすがりの習性と、この胡蜂が幼蟲へ與へる甲蟲の長い間腐敗しない理由とに關する觀察 (自然科学雜誌、一八五五年、第四卷)

今やファブルは三十二歳である。そして碌々たる物理の助教としての彼れの位置は、寧ろ心もとないものである。海向うのアジャツシオで得てゐた千八百フランの俸給が、大陸に於て千六百フランに減ぜられてゐる。そして彼れがこれからアヴィニオンにゐる間といふものは、本職以外、も



しくはそれに伴つて手に入るいくらかの収入を除いては、彼れは昇進することもなければ、一零れの増給を得ることもない。彼れが二十年の職務を果していよ／＼中學校を去る時でさへも、彼れに幾多の功績あるに拘はらず、彼れは一個の助教として同じ稱號、同じ等級、同じ俸給などを以て、入つた時のまゝで出て行く。

彼れの周囲は「到るところ、皆んなにとつてたゞ暗黒あるのみだ」(弟への手紙) 彼れの家族は殖えた。彼れの負擔も多くなつた。今や毎日食卓につく人数は七人である。そのさゝやかな俸給は、間もなく必要を満すに足りなくなる。で、彼れは猛烈な仕事、講義、復習、個人教授などをして、餘儀なくこれを補はなければならぬ。これらの仕事は彼れ自身の時間を全部吸収し、そのため好きな研究、靜かな、孤獨な觀察に献身することが出来ないで、勿論彼れの嫌惡するところである。それにして彼れは辛棒強く、良心をもつてこれを果す。何んとなれば彼れは生來この職を愛し、そして彼れが生徒に對して先生といふよりも寧ろ學友であるからだ。それはまた、彼れをめぐる若い人達が、何れも感心なほど熱心に勉強し、質のよくない生徒、やくざ者、他の課業では見込のない

干乾びた果物のやうな奴も、彼れのところへ來れば突然生れ變り、他の連中とともに熱心に勉強をつゞけて行くことにも依るのである。實際彼れは旨く秩序を維持し、威嚴を保ち、必要に應じてはきびしく叱責もし、荒々しい言葉も用ひ、とても彼れの前ではぼんやりしてゐることは出来ないのだが、然しました、彼れは冗談を云ふことも旨く、みんなへ親しみのある言葉遣ひをし、彼等の位置に立つて見たり、彼等の考へに入つて見たり、そして彼等のお相手になるやうなことも出來た。ああ！彼れの監督の下に於ては、みんなが一生懸命に勉強をした。と同時に、みんなが愉快に時を過ごした。その最もよい證據には、學校の記録に珍らしいことであるが、彼れは中學校のあらゆる同僚中、あだ名のなかつた唯一人である。

こんな工合で、彼れは悦んで授業をした。然しながら、カルパントラスに於ては、彼れは校長かちもちやほや云はれ、みんなに好かれ、そして科外講義などでは自由に思ふところを述べる事が出來たのであるが、此處では時間もプログラムも彼れを束縛した。そして彼れの堪へ難く思ふのは、正にこの屈從である。



それに彼れの外観の揚らざること、彼の少しく野生的な性格、彼れの寂寥に魅せられた魂など、すべてが彼れにとつて困難の基である。

かうした教育家の階級づけられた社會のたゞ中に於て、彼れは獨立してゐる。彼れは中學校内の噂や事件などはてんで知らぬ。そして碌でもないプログラムの中に埋もれて出づることのない同僚は何んでも彼れよりはよく知つてゐる。彼れには大學教授の資格がないところから、よくそれを感じしめられ、目下の取扱ひをされた。さうした稱號を鼻にかける他の教授達は、一寸彼等に方角違ひな彼れの眞價を認めることも出来ないで、彼れの名前をめぐつてちよい／＼評判が立つたりすると、ますます彼れをねたむ。そして彼等は彼れの愛惜して措かない研究主題を思はせるやうに、同僚の間で彼れを「蠅」(厄介者の意)と呼んで嬉しがる。

註一 私にはたゞもうゆつくりしたい、中學校を去りたいといふ考へしかなかつた。何しろ私には大學教授の資格がなかつたので、目下のやうに取扱はれたからね。視學官がある時私にかう云つた。それは文字通りにかうなのだ。「教授の資格がないと、あなたは何時まで纏つたつて、如何にもならないだらう。」

私はかう答へた。「さういふ名稱は私も好きません」——會話。

稱號を持つてゐる人々に對してばかりでなく、稱號そのものにも冷淡であり、禮儀作法を好まず自らを抑へるやうなことも出来ず、彼れはかけ離れてゐて、虚偽の、もしくは世間並な、そして自分には無用であり、忌はしいものであると思はれるいろ／＼な習慣に従ふことを拒む。以前アジャツシオに於て、年始の廻禮を旨く避けてゐたのも、そんな譯からである。

「俺は上流社會などといふものは、なるべく避ける。自分自身を友としてゐる方が好い。で、私は誰にも逢はぬ。校長から公式に廻禮をして來いと云はれたが、それにも應じなかつた。」(一八五〇年一月十四日、アジャツシヨにて弟へ)

若しくはまた、どうしても招待を受けなければならぬ場合には、燕尾服を着て儀式張つた裝束でもしなければならぬやうな盛典の日を除いては、彼れは何時でも、丁寧に刷毛をかけたシルクハットの間に汚點をなす所の、彼れの黒のフェルト帽を被るのである。彼れはたしなめられる。彼れは意見をされる。彼れはやつといや／＼ながら云ふ通りになる。時には反抗して辭表を叩きつけ



るなどと威嚇する。お追従を云つたり、人の氣に入らうとしたり、目上の人の前に平身低頭したり——さうした真似は、彼れにとつては出来ない相談だ。彼れは頼み込むことも、機に乗することも、割り込むことも、自分の關係を利用するやうな術も心得ては居らぬ。

とは云ふものの、自然科学の博士試験を受けるために、はじめて巴里へ行つた時、彼れはさすがにモツカン・タンドンを訪ねたのであつた。モツカン・タンドンは以前コルシカで彼れに生物學のどんなものであるかを教へた人で、彼れがその貧しい家庭に迎へ、厚くもてなして泊めたことさへあるのだ。

すぐれた大家となつたこのトルウズの以前の教授は、その時巴里の醫科大學で博物學の講座を占めてゐた。曾ては自分の家に客となつたこともある斯うした重要な位置にある人に取り入り、一緒に過ごした愉快だつた過去を物語り、同時に自分の計畫を打ち明けて彼れの力を借りるには、何んといふいゝ機會であるか！ 運命が自分の出世のために與へてくれた、何んといふ有りがたい保護者であるか！ だがたとひ彼れはそんな如何がはしい野心をもつて階段を登つて來たとしても、

間もなく幻滅せざるを得なかつたのだ。

この「親愛なる大家」は、もうとつくにアヂヤツシオのつまらない先生のことなんか念頭になかつた。そして彼れの歡待は、當然ファブルが期待することの出來たものではなかつた。その時彼れはたつて何うの斯うのと云ふやうなことはなく、心の底では少しく恥しく思ひながら、本當にうんざりしてしまふ。そしてさつさと引退る。

ファブルが持つて行つた論文は、彼れ自身の考へではやがて大學の講座を贏ち得させるやうなものだつたにしても、實は大して獨創的なものではなかつた。

彼れは奇妙な蘭科植物の呈する凡ゆる特長——その花の非對稱、その花粉の異常な構造、及びその無数の種子などによつて心を惹かれ、興味をそゝられたのであつた。然しながらこの科に屬する多くのものが、その根につける二つの丸い奇妙な塊根は、果して何んであらうか。カンドル (Candolle) やアントワヌ・ド・ジュシツ (Antoine de Jussieu) のやうな偉大な植物學者も、それはたゞ根に過ぎないものやうに思つてゐた。ファブルはその論文の中で、この不思議な器官は、變態



せる球根のやうに形の變つた眞實正銘の小枝に過ぎないことを實證したのであつた。

註一 Recherches sur les tubercules de l'Himantoglossum hircinum. 一八五五年、植物學の學位論文。

彼れは尙ほ橄欖樹のはらたけ、(Agaricus)の燐光に關する奇異な記録を一緒に出してゐる。この現象については、彼れは後年再び研究してゐる。

動物學の畑では、彼れのメスはこれまで意見が甚だまち／＼で、然も事實の分つてゐなかつたむかでの生殖器の複雑な構造を發いたのであつた。尙又動物學の見地から甚だ興味のある、この奇妙な動物の發育に關しても、或る特長を述べたのであつた。蓋し、彼れはもう手を放さない擴大鏡を取り扱ふことが上手になつたばかりではなく、極めて微少なものの中に無限な世界を見せる顯微鏡の取扱ひにも巧みになつたのだ。然しながら、フアブルの光榮をなしてゐる傑れた觀察で、一として顯微鏡に負ふてゐるものはない。

註一 Recherches sur l'anatomie des organes reproducteurs et sur le développement des myriapodes.

動物學の學位論文、一八五五年。

彼れが研究したのは、彼れの臺所、好んで私に云つた言葉で云へば、彼れの「流し元」の「ストオヴの傍」に於てであつた。そして興味も限られ、影響の範圍も狭いかうした研究に踏み込んで行つたのであるが——植物を切り割いたり、厭々ながら「生き物の腹を掻き開いたり」して行つたのであるが、それは木曜と日曜の他には、毎日の激しい仕事から氣をそらすことは不可能なので、何よりも彼れが心を惹かれてゐる研究を企てるやうなことは、なか／＼覺束ないのであつた。短かい途切れ／＼の暇しかないやうに、職務のためにきびしく束縛せられ、またその日／＼のパンの心配に驅られてする恐ろしい骨折りのために、彼れには殆んど休暇や休日以外に觀察する機會はなかつた。

こんなわけで有りがたい木曜(此の日も學校は休み)などには、彼れはアヴィニオンから六キロ米突のボンテへ出かけるのだつた。そこにはピエラットの舊カフェ屋たる彼れの父が、ある豊かな紅葛栽培者の持つてゐたロベルテの農場で、たうとう骨の折れない、樂な仕事をさせて貰つてゐた。單純な、やさしい心持のこの老人は、幸ひにもその人達の信用を得て、そして此處で「彼れの樂しい餘生」を送つたのであつた。また時としては野の鍵を握つて胸を躍らしながら、一氣にカルバ



ントラスへ走り、そして窪んだ道や田舎をぐる／＼歩き廻つて、美しい昆蟲を窺つたり、思ふ存分大氣や葡萄や橄欖の香を吸ふたり、銀色の頂が雲に蔽はれては消え、太陽の光線に射られては輝やく近くのヴァントウ山をつく／＼眺めたりした。

註一 セリニヤンに於ける會話。

彼れは「紅蔓を引つこ抜きに出かける百姓のやうに、發掘の堅固な道具、當地方の所謂リュシエ(Luchae 一種の鉄)を擔ぎ、背中には箱、壘、園丁用の鍬、硝子管、ピンセット、擴大鏡、その他いろ／＼な道具を突込んだ革袋を背負つて」出かける。そして夕方になると、渴に焦がされ、腹は激しい太陽の反射にただらされ、それでも一寸氣だるい位のもので、大して疲れもせず、却つて晴した氣持で歸つてくるのであつた。

カルバントラスは單に彼れの義理の兩親が住んでゐる地方と云ふだけではなかつた。それは特に昆蟲に對する天與の場所だつた。それは此の地方の植物によるものではなくて、砂と粘土の交つた一種の石灰石、穴掘り蜂等が骨を折らないでも容を穿ち、巢を築くことの出来る泥灰石、此の地方のさうした土質によるものである。ある穴掘り蜂などは、此處にしか棲まないのだつた。そして他

所でそれを見付けようとしても、甚だ困難なことである。素敵なつちすがり(Ceroetis)がそれである。「いかさまヴィオロン弾き」なる蟋蟀を刺して巧みに麻痺させるもう一つの胡蜂、あの黄翅のあな蜂もそれである。

アントフォラ(Anthophora 蜜蜂の一種)が澤山に棲んでゐたのもカルバントラスである。カンタリデス(Cantharides はんめうの一種)の小さい兄弟分たるシタリス(Diatraea はんめうの一種)とメロエ(Meloe つちはんめう)との、あの謎のやうな、はら／＼する歴史——彼等の複雑な變態や驚くべき習性をファブルが物語つてゐる中に、此の野生蜜蜂の歴史も編み込まれてゐる。この記録は、彼れが科學者としての生活の第二階段を示すもので、つちすがりに關する驚くべき觀察から二年の後である。

これら二つの研究は、まことに科學の傑作で、すでに光榮に對する二つのすぐれた稱號をなしてゐた。そしてたゞこれら二つの研究だけでも、博物學者の全生涯を充たし、その名を響びかせるに足るものである。



この時以來、彼れは嶄然として頭角を現はした。學士院團は彼れにモンテヨン賞金の一つ（一八五六年、實驗生理學賞）を授與した。「勿論、かうした名譽を私は夢想しなかつた。」（一八五七年二月一日レオン・デュフウルへの手紙）恰度この頃公けになつた「種の起原」に關する有名な著書の中で、ダアキンは彼れを「眞似の出来ない觀察者」と呼んでゐる。

アヴィニヨンでフアブルは三十年のうちに、三度も住居をかへた。最初はサン・ドミニック區に甚だ人目につかない生活をしてゐた、それから最後に染屋街へ引越したのだが、彼れはここに一番長く住んでゐた。新たに住居を探す時の第一條件は、何よりも先づ眼の満足と心の幸福とのために、出来るだけ多くの草木が植ゑられるやうな庭のあることだつた。彼れはわざ／＼コルシカから羊齒や、うまのあしがた（Renoules）や、豚のまんぢう（Cyclanens）などの、いろ／＼な不思議な種を持つて來たのであつた。彼れが植物學者テオドル・ドウラクウル（Théodore Delacour）と知り合つたのは恰度この頃である。ドウラクウルはアヴィニオンに住んでゐた。そして彼れは巴里の有名な園藝種苗會社ヴィルモラン（Vilmorin）を支配してゐた。ドウラクウルはフアブルの栽培

にそゝられて、それを見に行つた。そして殆んど直ちに「相互の深い理解と愛情」とに基づく關係が、この二人の間に成り立つた。ドウラクウルはアヴィニオンに二人三人しかいないフアブルの親友の一人となつて、植物採集旅行や、えらいヴァントウ山登りなどには、必らず彼れの伴侶となつた。そこにドウラクウルがゐるといふことは、彼れの仕事に對する刺戟となつて、いろ／＼な憂慮を忘れさせた。一度ならずドウラクウルはフアブルの慰藉者、助言者、もつとも貴重な救濟者ともなつた。こんなわけで、彼れが何處かへ出かける度毎に、フアブルは彼れの出發をいたく悲しむのであつた。

註一 一八六一年四月四日、ドウラクウルへの手紙。

註二 「親愛なる友よ、私はあなたが待ち遠しい。歸つて來られたらどんなにか私はあなたの兩頬へ接吻することであらう。私はあなたと共に、あの素敵なヴァントウ山登りを喜んで復したいと思ふ……」

彼等を惹きつけ、彼等を結んだのは、植物である、然しながら蟲けらは依然としてフアブルの主なる情熱となつてゐる。そこらあたりを探検して、彼れは間もなく殆んど他の昆蟲だけに通ひつめられてゐる新しい場所を發見し、今度は彼等の習性によつて注意をひかれる。



註一 一八六一年四月四日、ドウラクウルへの手紙。「植物も植物だ……が、之れまででないほど私はちつちやい蟲けらに氣を奪はれてゐる。旨い。とん／＼拍子でゆく。」

それは第一にアングル (Angle) の砂地の岡である。毎春、その陽を萬遍なく受けて羊に好かれる野の中で、スカラベ・サクレ (Scarabée sacré、金龜子の一種) が内側へ曲つた肢とぶまな眼を持つて、「古代人にとつては宇宙の姿」である所の、その永遠の糞玉を轉がしはじめる。彼れの歴史はアラオンの時代以來傳説の織物に過ぎないのであつた。然しながらファブルは彼れを作話の刺繡から抜き取つて、これを自然の事實に返へし、彼れが古代エチプトのあらゆる物語よりも、更に更に驚嘆に値するものであることを見せた。彼れはこの昆蟲の本當の生活と、その作業の目的、更らにその吹き出させるやうな、實に滑稽な仕草とを物語つた。然しながらこの微妙にして至難な研究の精密なることは、それが殆んど四十年もこの昆蟲の習性と、その搖籃の神祕とを究めるために要したほどである。(昆蟲記)

ロオヌ河の右岸、デュランヌ河のそよぐところに青櫛の小さい林、即ちイツサアルの林がある。それもいろ／＼な理由からファブルの最も好いた場所の一つだつた。其處で焼けた地面に腹這ひに

なり、「頭を兎の穴か何んかの入口の蔭へ突込み、もしくは大きな洋傘の下へ太陽を避けて来て、「青い翅のばつたが喜びに身を顛はしてゐる時、」彼れははなむぐりの仔蟲殺しである強壯な胡蜂、あかず、蜂 (Sootia) の歴史を描きはじめた。それが完成を見たのは、漸く二十有年後のことである。彼れはまた、日々に仔蟲へやるために、細かな砂地に埋もれたその窠へ、蠅の定食を運んで来る優雅なはなだか蜂の、速かな、しゆう／＼と音のする飛行をつけて見た。

彼れは其處へいつでも一人で行つたのではない。日曜などには、彼れは自分と一緒に野の中で一日を過ごすやうに、「春の生の目覺めの得も云はれぬ盛典」へ、しば／＼教へ子を誘ふのであつた。

彼れに取つてもつとも懐かしい教へ子、後年特に彼れが愛情的的となつてゐた生徒等は、ドウヰイヤリオ、ポルドオヌ、ヴェシエール等である。「吾々をして湧き立たせ、知ることに切な望みを持たせるあの生の春の樹液にあふれ、そして熱情に富んだ、快活な、想像に満ちた若い人達」と彼れは彼等のことを云つてゐる。



註一 Henry Devillario カルバントラスで終生豫審判事を務めた。老練の昆蟲採集家で、すぐれた政論家だつた。

註二 Bordon 醫學博士でフロンティニヤン (Frontignan) の開業醫。

註三 A. Vayssière ャルセイユ理科大學の動物學の教授。

彼等の間にあつては、彼れは「年寄りで彼等の先生である。が、それよりも彼等の同僚であり友人である。」そして彼れは内に燃えてゐる聖火をもつて彼等を焚きつける。その指の器用なこと、山猫のやうなその眼の鋭いことなどは、常に彼等の感嘆の的となる。ノートを取るための帳面や、昆蟲學者に必要なあらゆる道具、擴大鏡、網、珍らしいものを捕へるための癩醉劑を沁み込ました鋸屑の入つた小さい箱などをもつて、彼等は「からはなさうや山楂子（さげす）に縁どられた徑に沿ひ、藪をつついて見たり、砂をほじくつて見たり、石を起して見たり、生垣の邊りや草地で網を振つて見たり、そして何んか素晴らしい見付けもの、未だ昆蟲界に知られてゐない不思議なものでも發見すると、どつと歡聲を放つたり、さながら單純な、あどけない子供等みたいにして「行くのであつた。

當時の彼れの門人等は、すべて例外なく、彼れを誠心から崇拜して、彼れの人格から出て來る光

りの前に頭を下げるのであつた。彼等は優しみと機才とに富んだ、そしてお嘶を編み込まれた彼れの講義や、彼れの感興や、彼れの純朴さや、それから人の心を引き立たせるやうな彼れの陽氣さなどの記憶を持つてゐる。と同時に、彼れが時として散歩のはじめから終ひまで、たゞの一言も云はないやうなこともあつたほど、實にその氣分の急變することをも彼等は記憶してゐる。

また平常やさしい、おとなしい彼れの機嫌さへも、たとへば意地の悪い中傷的になるか、もしくは説明の明晰さにも拘らず、自分の云ふことが充分呑み込まれない時のやうな、何んか氣に食はぬことでもあると、彼れは忽ちかつとなつてその機嫌が激烈なものとなり、そしてぶり／＼當りちらす。そんな時には彼れは大げさな怒り方をしたので、その憤怒は評判なものだつた。たとへばある日の如き、とても我慢が出來なくなつて、彼れは教室の眞ん中に燃え盛つてゐるストオヴを蹴り轉ろがした。と、それがかん／＼燃えてゐる火を吐き出した。生徒等は恐怖にふるへた。が、さうした恐怖も、忽ち柔いで平靜に返つた先生の顔によつてさつさと掻き消された。こんな風に、とても恐ろしいことになると思はれた嵐も、一瞬の間に消散するのだつた。

かうした氣性は恐らく苦勞性の、痼癩持で、怒りばい彼れの母から來たものであらう。フアブル



自身もそれには随分苦しい思ひをしなければならなかつた。

それに彼れは若い頃、よくはげしい頭痛にかゝるのだつた。「それがしばしば脳膜炎になるのだつた。」それからよく不思議な精神錯亂にもかゝるのだつた。そしてはげしい不満なことでもあると、それがよく彼れにひどい影響を及ぼした。結婚しようといふ場合に、両親の反對に逢つて、彼れは一種の癲癇状態に陥つたのであつた。(彼れの弟との會話)

註一 一八四八年九月三日、弟への手紙。「遂ひ此の間、私は夕方、突然恐ろしい神経病にかゝつた。今以て何が何んだか分らない。」

然しながら、彼れを取り巻いてゐた若い人達は、かうした氣分の激しい變化を長く氣にかけるやうなことはなかつた。寧ろ彼等はそれをたゞ自然の償ひ、彼れの豊富な活氣の云はゞ釣り合ひに過ぎないと考へてゐた。

「何やかやと打ち解けた話をしながら」彼等が一緒に出かけたのは、單にロオヌ河岸やアングルの砂地の岡だけではなかつた。彼等はまた一緒にヴァントウ山登りもするのであつた。フアブルは常

に此の山に對して、何んといふ本能的な魅力を感じてゐたことか！ 前後通じて彼れはそこへ二十回以上も登つてゐる。そして遂ひには此の山のあらゆる祕密、その植物のあらゆる色合——麓から頂上に到るまで、その山腹に階段をなしてゐる「柘榴の深紅の花から、スニス山のすみれ、アルプス山の勿忘草」にまで及ぶ、實に多種多様の植物を悉く知つたのである。

堂々たるこの山塊へ彼れが登つて行つたのは、普通カルバントラス、若しくはベドワンからだつた。後にはオランヂユとセリニアンとから、彼れは此の魅力に富んだ山や、これまた植物學者にとつては天國たるサン・アマンの高地、それからダンテルへさへも登つて行つた。このダンテルの如きは、「私の知つてゐる限りでは、この失はれたる方面では、まだ一人として植物を採集したものはない」といふ、寄つてもつけない劍山である。

彼れがその場で私に物語つてくれたポオモン方面からの登山の一つを、私は記憶を通して想ひ見る。三百米突のスラン山の頂、山の草を食ひ歩く羊の群の來るところへ、夕べ立ち止つて身體を毛布に包み、壯麗な星空の下に幾時間かを眠つた彼れの露營を、私は想ひ見る。

屢々たつた一人、荷物と云へば背囊たゞ一つで出かけるやうなこともないではなかつた。が、多



くの場合、よほど前から、昔の生徒のある者、殊に彼れのすぐれた友人ドウヴィヤリオやドウラク  
ウルを驅り集めるのであつた。それには博物館の植物部長で、植物園の園藝部長であり、フランス  
の植物に關しては極めて詳しいベルナル・ヴェルロ (Bernard Verlot) も参加するのだつた。

そんな時にはヴァントウ山登りは、何一つ手落ちのない、本當の遠征見たいだつた。たしかな先  
達として先頭に立てた驢馬へは一切の小道具をつけ、後方には幾頭かの驢馬を従へて食糧、外套、  
毛布、壓搾器、その他あらゆる眞の植物採集家に必要缺くべからざる荷物をつけて行つた。彼等が  
スペインのリラヤ、香味ある上等の飲物が出来る黒い實のアメランシエ (Amelanchiers) やざら／＼  
した葉の低い紅蔓などの間を通つて、登るにつれて開ける山の小徑を辿り、そして山毛櫛帯に達す  
れば、それから先はグリーンランドのけしや銀色をした苔など、新しい植物が一面に咲き擴がり、  
そして緑の毛氈のやうに頂を敷きつめてゐるゆきのしたの間には、徒歩のペソテテクス (Psotetix)  
がのろ／＼してゐる。それは飛行の喜びを否まれた眼の赤い、肢の青い、美麗なばつたである。そ  
こにはまたバルナシウス・アポロ (Parnassius Apollo) の毛蟲が草を食つてもゐる。バルナシウス・  
アポロは、かうした高山のもつとも眼につく輝かしい蝶で、その純白な翅は新芽のやうに清く光る

赤い眼状斑をもつて飾られてゐる。夜になると、くづれかゝつた羊小舎の枯草の床へ横たはるので  
あつた。それから太陽の復活を迎へるために、夜の未だ明けない中を急いで、たゞ石と藓とより他  
には何んにもない恐ろしい峻しい頂きをよぢ登つて行く。と、岩山の群の上に曙が白み渡り、突然  
リュベロンの山波、コンタの丘陵、それからドウファイネのアルプス連山の上へ、太陽が冷たい空氣  
の中に現れる。そして遙か下界には霧を通して、銀の帯のやうにロオヌ河がきら／＼と光る。

然し乍ら、どれだけの登山者が、やつとこの望遠閣に達しておいて、空しく雲の中に溺れたこと  
か！ 後年かうした荒涼たる場所へ打ち建てられたホテルの帳簿には、*Voni, nihil vidi, fugivi!*  
(私は来た、私は何も見ない、私は逃げる!) といふ文句が、常に繰り返へされて書き止められてゐる。  
不思議と驚異とに満ちたヴァントウ山登りのかうした露營生活は、彼れにとつては何よりも魅力  
のあるものだつた。そして彼れは常にさうした漂浪の過去に對して、ぞく／＼するやうな、小氣味  
のよい想ひ出を持つてゐた。

一八六五年、バストウルが彼れを訪問したのは、アヴィニオンに於て昆蟲學を研究してゐるもの



が、彼れのみであつたからである。この傑出せる化学者は、養蠶を荒してゐた原因の未知な災ひを除かうとしてやつて來たのである。しかしながら、彼れは自ら進んで究はめようといふものに就いて、絶対に、さう、繭の構造、蠶の發育さへも知らなかつたので、その必要な初歩の概念をフアブルの昆蟲に關する智識から汲み取るために、彼れを訪づれたのであつた。

フアブルは「昆蟲記」のある印象深い頁に於て、「喪服をつけた貧困」に對する何んといふ無理解をもつて、この偉大な化学者が彼れの貧しい家の中を見渡したか、それを物語つてゐる。温める方法をもつて葡萄酒を改良するといふ問題に没頭してゐるバストウルは、中學教員級の云ふにも足りない無産者であつて、葡萄酒糟で作つた二番葡萄酒しか飲んでゐないフアブルへ、いきなりその酒倉を見せて貰ひたいと申し込んだ。「酒倉！ 年數や産地によつてちやんと標をつけてある樽、埃だらけの壺ちや如何でがせう！」……だがバストウルは斷つて見せて貰ひたいと云つた。そこで勝手元の隅つこにある藁の抜けた椅子、その上に載つかつてゐる貧乏徳利を指差しながら、「私の酒倉つてのは、先生、あれでがさあ……」

つまらない一教授のフアブルは、彼れの冷たさに呆氣に取られた。そして彼れの態度にも驚かさ

れた。フアブルの話の聞くと、僅か一年歳上のバストウルが、彼れに對して幾らか傲慢な態度を取つたもののやうである。この天才の物識らずが、その身分の低い同僚に質問し、自分の意見や計畫、及び如何なる方面に對して彼れの助力を乞ふのであるかを説明したりするに、頗る横柄な調子をもつてしたので。

さうしてみると、吾々はこの場合に於ても、都會の大家達が田舎の極めて教養ある教師、若しくは醫師に對してさへも常に取つて來たやうな、あゝした傳統的な不當な輕侮の悲しい實例を見せられてゐるのだらうか。それにしても、獨創的研究の趣味をもつてゐる教師の待遇は、當局の力に依つて大いに改善せられなければならないといふ意見を、あんなにも屢々洩らしてゐるバストウルのやうな、廣大な精神をもつた人としては甚だ意外なことである。それはとにかく、彼れがフアブルの中に見たところのものは、當時未だつまらないと目されてゐた自然科学、もしくは昆蟲學を、いくらか知つてゐる一小教授に過ぎなかつたやうである。

かうした初対面からは、どうしても同情の關係が生れる筈はなかつた。獨立心と自尊心とが性格の核となつてゐるフアブルは、たとひバストウルの訪問に依つて深く印象せられたとは云へ、彼れ



を少しもゆるしはしなかつた。蠶の病氣の神祕を明らかにして、これが救済を講ずるためにやつて來たパストウルが、蠶の歴史や變態に就いて何等の智識も持つてゐなかつたと云ふことは、彼れをしてますく、憶斷に警戒せしめ、そして書物の上から學んだ學問では、とても駄目——と云ふ觀念を、はつきりと彼れの念頭に植まつけた。

然しながら此の選まれたる魂にも、當時のあらゆる醫者や科學者が持つてゐたやうな缺點があつた。人體解剖學や生理學と共に、形態學についても何等知ることなき純然たる一個の化學者は、醫者、もしくは自然科學者のことに容喙する資格がないと、彼等は考へてゐたのだ。それにまたファブルはこの人に對してひそかに反感を懷いてゐるところから、科學者としての彼れの著作にも殆んど振り向かないやうになる。彼れは勿論最後の日まで、あらゆる人智の進歩を知ることゝ怠らなかつた。が、時代を同じくしてゐながら、死ぬまでラヴォアジエ (Lavoisier 1743—1794 有名なフランスの科學者) の著作を故意に知らずに過した有名なプリエストレイ (Priestley 1733—1804 イギリスの理化學者) の場合を思はせるやうな、それは實際、嘘のやうな事實であるが、いろ／＼なパストウルの發見の素晴らしい影響が、終生、殆んどファブルに知られなかつた。後に、たとへば彼れが屍

毒の作用に關する奇妙な實驗を思ひ立つたとき、彼れは不安定な、そして實に複雑な生命組織の中へ、死んだ細胞が入り込むと、たゞそれだけで極めて重大な結果を惹起し、壞滅と死とをさへ招くに至るといふことを、彼れは驚くべき明晰さをもつて看破した。然るに細菌學——この甚だ實證的で生々してゐる科學——有機物間に醱酵素や黴菌をもつとも熱心に傳播する昆蟲へ適用せられるならば、たしかに無数の問題に光りを投ずることの出来るこの科學も、彼れにとつては一個の空論と等しく、何等の意義もなく、何等の重大さもなかつたのである。そして彼れは進化論を見たと同じやうにこれをも懷疑の眼をもつて見た。それ故に「不可見の境界」は彼れにたゞ疑惑、もしくは用心をさせるだけである。彼れは幼時に於て幾度も種痘せられたに拘はらず、<sup>二</sup>痘瘡に罹かつて顔が穴だらけになつた。この事實も彼れのさうした疑心の原因となつたのだ。

註一 昆蟲記の「蛆の或る寄生蟲。」——細菌學を知らなかつたところから、技術には缺點はあるが、結果が實に巧妙に開陳せられてゐる實驗の中で、ファブルは少しも氣はつかないが、事實に於て色々な昆蟲へ、驚くべき敗血症の現象を起さしてゐる。

註二 「私は幾度も種痘した。だが、これの通り、私は痘瘡で穴が出来てゐる。私の孫娘のルシイなんぞ、種痘が因となつて腕を一本片輪にしてみました。——かうファブルが私に話しました」 シャラツス (L.)



それにしてもこの二人ほど理解し會ふやうに生れた人は、恐らく他にはないと云つてもよいほどだ。實際彼等は同等の忍耐をもつて、ひろくとした自然の中に彼等の驚嘆すべき眼を働かせると共に、事實の厳格な範圍から一步もそれないやうに、自分をきびしく批判する力を持つてゐた。そしてまた、たとひ彼等の幸運は甚だしく異なるものだつたにしても、創意の領域に於ては、彼等は等しく偉大だつたと云はれよう。さう、彼等の幸運には甚だしい相違があつた。實際、發見が如何に卓越し、如何に天才的なものにしても、それは屢々、單にそれから引き出される直接の結果、若しくは實際上の有用さの見地からのみ計られるではないか。

二人ともフランスの科學の最も優れた代表者である。そして彼等はその知的及び道德的の本當の姿を最もよく現はしてゐる。一八七〇年後、彼等は二人とも、何んでもドイツのものに對しては、等しく反感を持つた。二人ながら、よしんば何等の信仰告白をしなかつたにもせよ、等しく極めて熱烈な精神主義に染つてゐた。

不斷に「昆蟲記」の主題となつてゐる種の特性に關する概念も、パストウルの根本的な思想の一つだつた。即ちパストウルは單なる細胞、もしくは孢子が、あるものから他のものに變化するといふやうなことは認容しなかつたのだ。そして彼れの眼には、「種の變化といふ考へがこんなにもわげもなく採用せられてゐるのは、厳格な實驗をしないからだ。」

實際、彼等は賢者の天國に於て、兩々相並べらるべき競争者ではないか。一は自生の假定を拂ひ退け、他は本能の起原に關する機械論を粉碎し、さうして彼等は二人とも、生命の深い謎を永遠に藏つて置くやうな、あの未知の神祕な大いなる力を第一位に引き戻したではないか。

今や、彼れは最初の成功の舞臺でもあり、彼れにとつて研究主題の實に豊富でもあるヴォウクリユウズの、此の地をば去りたくないと思ふ。彼れは彼れの昆蟲や、ルツキヤンが遺言によつてアイニヨンの町へ遺した豊富な圖書、及び貴重な植物標本などの近くに、何時までも止まりたいと思ふ。給料が多くないにも拘はらず、彼れはもう何んにも要求はしない。それどころではなく、彼れは一種の矛盾な態度に出で、——それは勿論吾々にもよく合點のゆくことであるが——たとひ他所にもつと有利なこと、若しくは昇給の話などがあるにしても、一切それを避けるのだ。ポアチ



エ (Poitiers) とマルセイユとの大學に助教の席があつたにも拘はらず、彼れは引越し費用にも値しなからうと云つても、二回とも拒絶した。

それは實際、彼れがつまじやかな位置が少しくよくなつてゐる。と云ふのは、圖案の心得があるところから、彼れは中學校で、製圖係に任ぜられたのであつた。實際、彼れは何んでも出来る。他方アヴィニオン市では、彼れをルツキャン博物館係とし、それから間もなく彼れへ市民講話を委任もした。かうした仕事のお蔭で、彼れの収入は千二百フランばかり増加する。そして彼れはこれまで給料が少いので止むなくやつて來た「あの厭な個人教授」を、やつと斷ることが出来る。それにしてもこれらの新しい職務は、勿論多くの努力と多くの時間とを要求せずにはゐないので、殆んど前と同様、彼れを束縛した。

註一 一八五七年二月一日、レオン・デュフルへの手紙——「今、私を製圖係の職に就かせようといふ交渉があります。私が圖案を少しく心得てゐるので、もしもそれが成功するならば、私の収入は三千フランといふ可成りな額になります。さうなつたら私は厭な個人教授なんかを止してしまつて、あなたに仕向けていたゞいた研究を、もう少しは眞面目にやつて行けるでせう。」

そこで自由の身となるために富むこと——好きな研究、没頭することの出来るやうに、自分の時間を自由に使へること——それは彼れの寸時も念頭を離れない願ひ、彼れの不斷の懸念、彼れの主調觀念だつた。

そこに彼れの紅蔓研究の主な動機があつた。一八六六年頃に、彼れはまことに單純な方法を用ひて、直接にその色素を旨く引出した。これがしばらくの間、甚だ原始的なこれまでの染色法にとつて代つて、甚だ有益だつた。これまでは、單に紅蔓から引出されたものが用ひられてゐたのだが、それはひどく不純なもので、精練に時間も金もうんとかゝるのであつた。のみならず、そんなことをやつてゐる間には、盛んに胡魔化しも行はれ、煉瓦、赤味を帯びた土、それから植物など、いろいろなもの紛にしては打ち混ぜられて、それが不正な富や破廉恥な取引となつてゐた。

二年前、視學官として彼れの教室を訪れたこともある文部大臣ヴィクトル・デュルイ (Victor Duruy) が、一八六八年に、彼れがサン・マルシャルの實驗室でその研究に熱中してゐる最中に、突然やつて來た。その時、彼れはもう八年以來、紅蔓研究をやつてゐた。デュルイがどういふ考へか



ら彼れと交際する氣になつたのか、それはともかくとして、二人は此の最初の會合からして、お互ひに腹藏なく相愛した。それほど彼等の間には、性格と云ひ趣味と云ひ、甚だ似通つた點があつたのだ。デュルイはファブルの中に自分自身の本質を見出した。何んとなれば彼れもファブルのやうにつましましやかな、單純な人間だつたからである。二人とも平民から出て、二人とも勞働、自由及び進歩の理想を根本原則となしてゐた。

この記憶すべき會見の後、幾許も経たないうちに、デュルイはアヴィニヨンの隠れた學者を切に請ふて巴里へ呼び寄せた。彼れはあらゆる心づくしをした。そして殆んどその場で、彼れにレヂョン・ドンヌウル勳章を得させた。ファブルはかうした榮譽を誇つたり、眼につくやうにしたりしたことはたゞの一度もないが、それにしても彼れはなつかしい「形見」このすぐれた友人の想ひ出して、何時も心の中に懐かしい思ひを懐いてゐた。

前にも云つたやうに、吾々の國はじまつて以來の最も聰明な文部大臣デュルイが、その頃いかなる意志を持つて居つたにしても、とにかく彼れがすでにバストウルの天才を豫感したのと同じやう

に、最初にファブルを認め、彼れに前以て注意を拂ひ、そして當時帝國政府の注意を惹くに足るところの、稀有な人物の一人として指定したことは、たしかに彼れの光榮の一部をなすものである。

翌日、ファブルは皇帝に拜謁を仰せつかるために、テユイルリイ宮殿へ招かれた。皇帝の御前に罷り出でるといふので、彼れが少しでもおど／＼したらうなどと思ふてはならぬ。華やかに着飾つた多くの人達の前で、彼れは恐らく時世後れの型の着物を着けて、どんな印象を與へるだらうかなどといふことは氣にかけぬ。蟲けらのすぐれた觀察者であると共に、人間のすぐれた觀察者でもある彼れは、一向平氣でぐるりを見廻す。彼れは殆んど影のやうな、そして眼を始終半ばつむつてゐる「全く單純な」皇帝と二言三言取り交す。「短かいズボンをつけ、銀の環のついた靴を穿いた侍従等が往つたり來たりする。それは牛乳入りのコーヒ色した翅鞘をつけて、几帳面な歩るき方をする金龜子を大きくした恰好だ。」もう彼れは吐息をつく。うんざりする。苦悶する。そして何がどうあつても、またとこんなことはしたくないと思ふ。彼れは博物館のほめそやされる標本を見に行く氣にさへもならぬ。そして彼れが帝都に於ける短かい厭な逗留から受けて、五十年後にも尙ほ思ひ出しては興がるもつとも生々した、もつとも美しい想ひ出といふのは、それはボン・ヌウフ（橋



の名)の上で見た乞食の姿である。其奴は犬と猫とが隣り合つて入つてゐる籃の傍に佇んでゐた。そして籃の上には、かうした變挺な文句が書かれてゐたといふ。それがファブルの記憶に執拗くいつまでも彫りつけられてゐるのだ。

シヤモニツクスのピアールさんは

犬を殺し

猫をつぶし

そして町へ行く。

彼れは早く歸りたくて堪らなかつた。なつかしい昆蟲、狂ほしい蟬に満ちた灰色の橄欖樹、たじやかうさうや絲杉の香る野原、特に彼れの發見を出来るだけ早く完成するために、その増塙やレトルトへ一刻も早く歸りたくて堪らなかつた。

然しながら彼れの結構な發明は、他の人達のために利用されてしまつた。即ち彼れが十二年間も骨を折つて「井戸を穿ち」上げると、もつと器用な人達があとから／＼とやつて来て、「彼れの踵を

蹴つては」うまく彼れを押し退けたのだ。それは恰度、彼れが作つた素晴らしい寓話の蟬みたいなものである。この寓話は詩と眞實とのこもつた傑作であるが、この蟬が小枝の汁の多い皮から折角の蜜の泉を泌み出させると、「蠅、くまばち、すいめばち、角のある金龜子」などのやうな不躰な多くのごろつき共がやつて来て、彼れをおつ拂ひ、そして飽くまでも蜜を呑み潤らすのだ。人造アリザリン色素が現はれて紅蔓の工業がやがて徹底的に覆へされるが、それ迄といふものは、かうした抜目のない連中がファブルの巧妙な製造法を思ふ存分利用したのである。そこであんなにも根氣よく研究した實際の結果といふものは、彼れにとつて全く零で、彼れは以前よりも鑑一文豊かにはならぬ。

こんな風にして彼れの夢は消えた。彼れの家庭に於ける憂苦を除けば、それは確かに彼れの生涯を通じて受けたもつとも深い、もつとも残酷な失望だつた。

そこで彼れの救済は、もう教科書を書くことにしかなかつた。そしてそれが遂ひに彼れへ自由の扉を開放することになつた。

彼れは常に自由の希望を抱いてゐたのだから、デュルイの強い刺戟を受くる前、すでにさうした



仕事にとりかゝつてゐた。それに「野の仕事に化學の初歩を應用することを、田舎の學校へ普及する」ことを目的として、教育界に甚だ新しい調子を齎らした農業化學の手ほどきは、彼れが今後大いに成すところあるべきを語つてゐた。

然しながら、彼れがこの計畫に向つて眞剣に献身し出したのは、工業のことが失敗に歸し、紅蓮のことが痛ましくも遠算に終つた後である。それはまたシャルル・ドラグラアヴ (Charles Delagrave) フアブルの著作を引受けた出版者)の助力を前以つて確めた後だつた。當時未だ青年出版者だつたシャルル・ドラグラアヴの時期を得た申出は、彼れの救済に少なからず貢献した。ドラグラアヴは彼れの大きな仕事の力を信じ、また彼れの通俗化する無類の手腕を看取つて、仕事を途切らせるやうなことはないといふことを堅く約束したのであつた。二十八年も根氣よく勤めたにも拘はらず、中學は彼れへ鏝一文の年金も與へないのだから、かうした約束は、彼れにとつてますます喜ばしいものだつた。

ヴィクトル・デュルイはフランスに於ける教育の復興者だつた。初等教育はその解放期と極めて

目覺しい進歩の起りとを、この偉大なる自由主義者をもつて劃すべきである。また中等教育も、彼れがあらゆる要素を取り入れて作つたものである。デュルイはまたフランスに於ける自由教育の本一の創設者だつた。そして第三共和國は單に彼れの事業をとつて、その計畫を完成したに過ぎないものである。更にまた成人教育——労働者、農人、商人、及び若い婦人などを集めて、彼等の教育の不足を満さうといふ夜學校を創設し、以つて彼れはあの寛大な多産な思想、即ち何人も生活を分つて二つとし、一は物質的需要、日々のパンを目的とし、他は精神生活と理想世界の享樂とに獻げ得られるといふ思想を實現したのであつた。

同時に、彼れはこれまで僧侶の監視の下に抑へつけられて來た若い婦人等を解放し、そしてはじめて彼等へ科學の金門を開いてやつた。何んといふ大膽な、何んといふ威嚇的な革新であつたか！何んとなれば、それは教會の利益に觸れたからである。それは日増しに大きくなつた教會の勢力を殺ぎ、神聖だとせられてゐた特權や、古いドグマに痛棒を加へたからである。

アヴィニオンで、フアブルは實行の任を託された。彼れは喜んでこれに當つた。そして彼れがサン・マルシアルの古い僧院で、この時代の人々の記憶に有名となつてゐる素晴らしい自由講座を開



講したのは、この時である。師範学校の生徒と混つて、その古いゴシック式の圓天井の下へ、彼れを聴きのがすまいとする群集が詰めかけた。もつとも熱心な人々の間には、ミストラルの友人で、階調の中へ「少女の笑聲と春の花とを巧みに編み込む術を心得てゐる人、」あのルマニエ (Romanie) も見られた。蓋し何人もフアブルほど巧みに事實を開陳し、彼れほど明晰に説明するものはなかつたのだ。何人も彼れのやうに單純に且つ印象的に、然も獨創的な方法をもつて教へたものはなかつたのだ。

實際、男の子にも女の子にも、そもぐの幼年時代から世人の夢想だにしない多くの事柄、特に博物學を學ばせ、そして愛させることの可能を、彼れは信じてゐた。それは彼れにとつて何人も讀むことの出来る本だつた。けれども教育の仕方が之れを効果のないものとし、乾燥無味なものとして、そこでは文字が「生命の息の根を止めてしまつてゐる。」

それに彼れは聽衆へ、彼れの信念、深い信仰、彼れに生氣をつけてゐたあの聖火、自然のあらゆるものに對する生れながらのあの情熱を巧みに傳へることが出来るのであつた。

これらの講義は一週二回、夜、市民講座と交るゝに行はれた。それにもフアブルは等しく勤勉

と熱誠とを捧げた。この講話を創設した人達の考へでは、それは特に農業や工藝に應用せられる實際的科學の講義たるべきものだつた。

然しながら、觀念の世界に熱中して「科學の實際方面をば顧みず、只管、自然を動かす力の作用を知つて、そして精神へ靈妙な地平線を開きたいと思ふやうな、」さうした一部の聽衆も混つてゐたかも知れないではないか。

これがフアブルの良心を苛んだ高貴な懸念で、彼れが自ら甚だ重大な使命と思惟したところのものを委任せられた場合に、市の當局へ送つた氣高い手紙の中に、それは實によく現れてゐる。

「……直接應用の出来ない、純然たる科學的方面は、すべて嚴密にこの講義から除かれなければならないのでせうか。飛び越ゆることの出来ない狭い範圍に立てこもつて、一つ一つの眞理の値打を見積り、そして單に知ると云ふ感心な希望を満す目的のものをば、これを一切黙殺しなければならぬのでせうか？ 否、左様ではありませんまい。何んとなれば、若しもさうだとするならば、この講演にはまことに根本的な一つのもの、即ち生命を與へる魂が無いことになりませう……」(アツイ

● ロンの市參事會へ宛た手紙)



當時の人々の證に依ると、彼れの様子は數年後に撮つた立派な寫眞が示すやうに、すでに廣い、黒いフェルト帽を被り、縮れない眞直ぐな髪が兩肩へ垂れ、髻のない顔にはいくらか痘斑があり、額は高く、額はきりりとし、鋭い眼差、深い、突透すやうな、据わつた眼、同情に富んだ微笑には皮肉がこもり、着物は單純でさつぱりとし、冬には長いマントを引かけるのだつた。これから先も彼れは殆んど變りはしない。そして老後に至つても、彼れは矢張りさうした様子である。

この講演が行はれたサン・マルシアルの古い僧院は、同時にフアブルの監督の下にあつたルツキヤン博物館にも占められてゐた。彼れがある日、スチニアート・ミル (John Stuart Mill 1806—1873) —イギリスの經濟學者、政論家、そしてまた哲學者) に逢つたのは、實に此處である。

英國の最大なる光榮の一なる此の有名な哲學者にして經濟學者であるミルは、恰度その頃「彼れの生活のもつとも貴重な友誼」であり、そして永い間待つてはじめて結婚することの出來た婦人を失つたのであつた。愛情のない、恐ろしく嚴格な父によつて、夙くから極めて嚴肅な訓練にかけられたミルは、子供の時すでに「大人になつてはじめて學ぶやうなもの」を學んだのであつた。樞樞

を脱ぐが早いか、彼れはもうプラトンの對話篇や、ヘロドトスを解釋した。そして彼れは精神科學や數學の廣い世界を走り廻つて、乾燥無味な全青年期を過ごした。そこで今まで壓搾されてゐた彼れの心は、ハリエツト・テエラ嬢を知るまでは、曾て綻びたことはなかつた。

彼女は詩や小説に於てのみ見られる異常な典型のやうに、まことに恵まれた婦人の一人だつた。稀有な驚くべき才能を授かつてゐると同時に、美貌の彼女は極めて鋭い智力、極めて切實な雄辯、それから彼女が屢々出來事を豫感して未然にこれを知覺したらしかつたほど、それほど細やかな感性をも兼ねてゐた。

ミルは彼女と一緒になつてから、僅かに兩三年過ぎたに過ぎなかつた。そして彼れは南歐の美しい大氣の中で、靜かに研究へ没頭するために、東印度會社の勤めを退いて幾許も経つてゐなかつた。その時突然アヴィニヨンでハリエツト・ミルは激烈な病氣のために生命を奪はれたのだ。

それからと云ふものは此の哲學者の地平線は、突然、彼れの全生涯の唯一の魅力だつた熱愛せる伴侶、彼れにとつて無くてならない天才だつた彼女の消え去つた、その場所に限られてしまふ。悲痛な思ひに困憊した彼れは、アヴィニヨンの郊外のうちでも、極めて人通りの少い場所で、親愛な



る死人が永久に眠る墓場の近くへ、小さな別荘を購ひもとめた。プラタアヌと桑との静けき並木道が、柔かな葉の桃金嬢に蔽はれた玄關にまでつゞいてゐた。彼れは周圍に山楂子、ねずこ、及び絲杉などの厚い生垣を植ゑさせた。一階の高さに築かせた小さい築山の上から此の生垣を乗越して、彼れは毎日、いつでも、絲杉の帷を通して眞白な墓を見ては、しみじみとその悲しみを味ふことが出来た。

註一 私はこの家を訪づれて見た。少くもその外觀は、今日まで少しも變化を被つてはゐない。

伴侶と云へば、たゞハリエツトの残した娘があるばかり、仕事に慰安を求め、彼れの生涯を振り返つて著名な自叙傳を書きながら、「想ひ出に生きて」彼れが閉ぢこもつたのもそこである。

註一 ミルが「自由論」「代議政體論」「功利説」「コントと實證主義」及び「婦人解放論」などを書いたのも此家である。

フアブルは時々この隠れ家を訪づれた。隠者となつたミルが心を惹かれたのは、唯々氣性の同じいフアブルにだけだつた。即ち彼れはフアブルの中に天性の類似ではないにしても、尠くとも彼れ

の趣味と同じ趣味や、自分にも劣らない廣大な教養などを見出したのだ。何んとなれば、ミルは人智のあらゆる方面に通じて居つたのだ。彼れは單に歴史や經濟學の宏遠な問題を考察したばかりではなく、また數學、物理、博物學などあらゆる科學をも深く究めたのであつた。然しながら、兩者の間を結んだところのものは、特に植物學だつた。そして屢々二人は相携へて田舎へ植物採集に出かけた。

世間には發表にならないが、ヴォウクリユウズ縣の豊富な植物を採集しようといふ計畫は、抑もミルの抱いたもので、フアブルは主としてその隠れ植物の部に對して協力を約したのであつた。この目的をもつて、彼れは完成に二十年近くも費す大事業に取りかゝつた。それは黒味がよつた多形の小さい實をもつて、枯葉や枯枝を蔽ふところの不思議な菌、海生植物を去ること遠くなく、陸生植物の素描のやうな單純な植物、即ち球果菌 (*Sphæriaceae*) に關する辛棒強い研究である。

註一 最初の研究は一八八〇年に自然科學雜誌に發表された。

フアブルにとつて有益であつた此の交際は、ミルにとつては一層貴重だつた。彼れは昆蟲學者の來訪の中に、彼れの悲哀に對する一種の慰安を見出した。だが彼等の會話の内容は、想像させられ



るやうなものではなかつた。ミルは自然の祭りや野の詩をばさほど感じないのだつた。彼れが植物學に對する興味も、分類及び種の組織的排列といふ、寧ろ抽象的な見地からだつた。常に悲しく、冷たく、打ち解けず、深く考へ込んで、あまり物を云ひはしなかつた。然しながらフアブルは、この瘦せた身體の中に、この頬髯に縁取られた品のよい顔の蔭に、この外觀の無感覺の下に性格のきびしい正直さ、確かな交際、犠牲の精神、及び稀な心の善良さなどを感じたのであつた。

さうして彼等は恰も二本の並行な道を行くかのやうに、お互ひの胸襟を開くこともなく、各自はそれ／＼の考へを追ひながら、田舎を歩き廻るのであつた。

さうかうしてゐる間も、フアブルは困難を脱却してはゐなかつた。そして隱密の間に彼れに對する反感が、次第に増してゐた。サン・マルシアルの自由講座は、太陽にも堪へないやうなぶよ／＼した眼瞼の信者の一味に不平を鳴らさせ、黨派心の強い人々を怒らし、似而非學者等の憎しみを増さした。そして彼れは中學校の同僚から、特に當時彼れに必要だつた同情も鼓舞も、なか／＼期待の出來た話ではなかつた。彼れは公けに弾劾されもした。ある日、演壇の上から彼れは、秩序を

紊亂する危険人物として指摘せられた。これにはさすが高等師範學校の生徒等は、憤激せずにはゐなかつた。

ある人達は「獨修の子なる此の變則者」が、その著作と教授との魅力によつて、こんなに並外れた身分相應の位置を得たことが、以ての外だと考へた。他の人々は若い娘達をして科學を學ばせようといふかうした甚だ新奇な企てを、異端者の仕業とし、墮落への機會を作るものとした。

たとへば若い娘等の前で、植物の生殖作用を云々するなんてことは、アヴィニヨンの敬虔な公衆にとつて、何んといふ不信仰演の極みであるか！ 特に政争によつて分裂してゐた此の市にあつて、當時頗る有勢だつたカトリック黨は、女子中等教育のかうした講演の創設者たる、あの偉大な文部大臣デュルイに對して、眞の十字軍を起した。司教等はかうした教育の唯物主義を公然と弾劾し、それに對する憤怒を含んだ抗議を上院の演壇に響かせさへもした。

とは云ふものの、こんな非の打ちどころのない教授は、未だ曾てなかつた。それほどフアブルは極めて困難な説明に於てさへも、常に極端な慎重さを示すのであつた。常に清淨潔白な見本とも云ふべき彼れの文章に於ても、將た又彼れの講演に於ても、極めて取り扱ひ難い、極めて云ひ悪い事



柄さへが、何んといふ比喩をもつて述べられ、然も何んといふ明るい光りをもつてゐることか！

註一 彼れがまだ子供の時分に、あの歴すと煙を吐く輩が「狼の透し尻」と云はれるのを聞いた。それが「行儀の悪い人を思はせるので」彼れの氣に食はないのだつた。

彼等の中傷、彼等の陰謀、彼等の秘密な運動が、たうとう勝利を占めた。そしてデュルイは僧侶の不斷の攻撃の下に倒れた。彼れを失つて、フアブルは同時に彼れの友、彼れの保護者、彼れの唯一の支へを失つた。憤懣を懷き、萬事意の如くならず、彼れは一切を放擲するために、もう何んかの出来事、何んかの口實、何んか一寸とした機會を待つてゐた。

ある日、敬虔な老嬢達である彼れの家主は、彼れの敵の怨恨の道具となつて、残酷にも彼れを追ひ出した。彼れはその月の内に立ち去らなければならなかつた。それといふのも信じ易い純な彼れは、家主と何等の貸借證書を取り交してゐなかつたのだ。

ところで當時の彼れと來た日には、移轉費にも困るほどの赤貧だつた。世間が騒がしくなつてゐた。それは普佛戦争の恐ろしい年だつた。そしてもう包圍せられた巴里からは、やつとも、のになり

出した彼れの教科書の、ほんにさゝやかな印税さへも受取ること出来なかつた。他方に於て彼れは常に一切の交際を避けて來たので、アヴィニオンには彼れの救ひを求められるやうな、一人の知人もなく、彼れを威嚇する極端な必要に應じ、何うにか困難が切り抜けられるやうな、信用貸を見出すことも出来なかつたであらう。で、彼れはミルに思ひを走らした。そして此の逼迫せる場合に於て、彼れを救つたのは實にミルだつた。この哲學者は、その頃英國に歸つてゐた。彼れは暫く下院議員となつてゐた。そしてアヴィニオンに住んではゐるが、倫敦へ出かけては二三週間滞在するのであつた。それにしても彼れの返事は間もなく届いた。殆んど直ちに彼れは救助金三千フランばかりのマンナを送つて、それがフアブルの下に届いたのだ。そして彼れはこの金に對する何等の保證をも要求されなかつたのだ。

そこであうんざりした此の「變則者」は、鞭を振り落してオランヂュへ引込んだ。彼れは最初、何よりも人との接觸を出来るだけ避けようと云ふ心から、所かまはず身を宿した。やがて彼れは全く趣味に適した棲家を發見して、町の端れに遠ざかり、そして田舎に近く棲むことになつた。それは



花を點じた大きな草地の中の、さつぱりとして棲み心地のよい一軒家だつた。大きな美しいプラタ  
アヌの立派な並木が、それをシヤマルレ街道に結んでゐた。この隠れ家は、彼れをしてアヴィニヨン  
郊外のミルのそれを少しく想はせた。そして其處からは、彼れの眼は古代劇場の破風から、セリニ  
ヤンの丘の連りに到るまで、限りない地平線を一望の中にあつめて、すでに樂園を垣間見ることが  
出来た。

## 五

### 偉大な教育家

それは一八七一年である。フアブルがアヴィニオンに棲んでからもう二十年経つた。此の年は彼  
れの經歷に於て重大な標柱をなすものである。何んとなれば、それは恰度彼れが教育界と永久に斷  
つた時期を記すからである。

だから物質生活は之れまで以上に逼迫して來た。此所に於てか彼れは全身を捧げて根氣強く、幾  
多の眼ざましい入門書を書いて、科學を子供等にも親しめるものになしようと努め、よくその原理を  
教へるために、あらゆる彼れの深い智識を用ひたのであつた。

あまり収益はないが、實際無上の樂しみとする此の仕事に、フアブルは之れから先き九年間と云  
ふもの、あらゆる根氣を以つて當り、氣を弛めることはなかつた。それほど彼れは教育の使命、意



識、天才——教育家の宗教を持つてゐたのだ。

在來の教科書と云へば、干からびた概念や、ごつ／＼した智識を以つて充たされた、何んと云ふ下らない、没趣味な、厭氣を起させるものだつたか！それが記憶力を弱らせ、心を空ろにし、判断力を荒ませ、如何に多くの若々しい顔がその上で色を失つたことか！

それに較べればフアブルの小さい本は、何んと云ふ解放であるか！それは實に明晰簡易であつて、始めて智と心とに語つたのだ。「分らない本は讀む人をしてうんざりさせる」ではないか。

抑も他人を藝術なり科學なりへ導き入れるためには、自分自身が研究の對象を了解してゐても、若しくは自分自身が藝術家なり科學者なりであつてさへも、未だ十分ではない。傑出せる科學者も時としては甚だ無能な教師で、碌にア・ベ・セさへも教へることが出来ないかも知れぬ。實際、發見の才と通俗化の才とは相反するもので、之れを兼ね様としても多くの場合それは不可能である。要するに少年を教育することは、換言すれば少年の理解力と自分のそれとを同化させて、その力を測り知ることが、決して誰にでも出来ることではない。それは記憶力や博學よりも、寧ろ本能と明識との領域である。そして生涯何人にも師事したことのないフアブルは、何人よりもよく精神の

通過する色々な局面を體驗してゐた。どんな省察の迂餘曲折、どんな思想の隠れた精勵刻苦、どんな直觀的方法によつて、道に横はる困難をそれからそれと征服し、そして次第に智識に辿りつくものであるかを、彼れは身に沁みて知つてゐた。

だから、根本を選び出し、少しづつ事物に對する觀念を醒まし、卑近な實例を巧みに求め、比較對照し、美しい、印象の強い影象を見出し、そして極めて漠然たる問題、若しくは極めて困難な問題へも、爛たる光明を投じながら、單純なものにしる、複雑なものにしる、實證をそれから／＼と、何んたる熟練さを以つて彼れは進めて行くことか！それは偉觀である。實際かうした事柄にあつては、大概の場合、事實をありの儘に示すことは不可能で、たゞその影象や表象しか云へないのだから、何うしてもそれに缺くべからざる形式——比喻を用ひないわけには行かないのだ。

例へばフンボルト (Humboldt) の熱烈な、凝結した天才がふるへてでもゐるやうな、彼れの「空」(Le Ciel) を精讀してみよ。何んと云ふ容易さを以つて彼れはあらゆる困難を除き、廣い旅の道を



平らにし、そして吾々を無数の太陽や星の限りなき世界へ導くことか！ やがて此の微々たる「地球」(La Terre)へ降りて来ては、それは「始め液化した雲岩や花崗岩の重々しい波を轉がす火の海だつた。それから徐々に、鎔鑪の赤い鐵よりも熱い異様な塊に凝結し、「あんぐりと開いた穴や噴出した山——地殻の最初の壁に蔽はれたその脊を丸める。そして最後に、測り知るべからざる深さを以てそのぐるりを幾重にも包んだ眞黒な水蒸氣の無限な雲が、次第／＼に破られて、大が／＼な驟雨の果てでもない嵐を捲き起し、宇宙を浸す不可思議な海をつくる。「混沌たる煙に蔽はれた此の鑛物の捏ねもの」から、將に原始の地が現れて、草が緑ならんとするのだ！

そしてたとひ「苦痛と快感とを感じ得る一粒の生命ある蛋白質が、宏大な無機物よりも興味ふかい」にしろ、尙ほ且つ彼れは物質そのものからさへも、何んとかして旨く生命を迸出させずには措かぬ。彼れは元素にさへも生命を與へて、空氣の驚くべき作用、鹽素の猛烈さ、炭素の變化、燐素の不可思議な婚禮、「一滴の水の誕生に伴ふ光彩」などを讚美するのだ。(La Chimie de Yoncle Paul)

實際、科學を熱愛する者でなければ之れを他人に愛させ、之れを魅力ある平易なものとなし、そ

の景色よき大道を示すといふやうなことは出来ぬ。ところでフアブルは、何よりも先づ情熱のある教育家であつて、「山楂子や李の生垣の間」へ生徒を導き込むには持つて來いの適者なのだ。醱酵してゐる樹液——「この多産な流れ、このさら／＼した肉、この植物の血」から、草本が神祕な化體に依つてその木質を作ることや、或ひは「臭氣鼻を衝く汚物から果物の風味や香氣を引き出し」たりすることの話をしたり、若しくは「水際で榛の根を締めつける」眞白なクランデステヌス、「何んにも仕事の出来ない」菟絲子、「皮はみつともない鱗を以つて蔽はれ、喪服をつける黒い花を咲かせ、そして菹直の喉元に飛びかゝり、そいつを締めつけて食ひ、そしてその血を吸るところの、でぶでぶ肥つた、力の強い、圖々しい」碌でなしのはまうつば、さうした他を涸らして寄生する人殺しの植物を、はつきりと生徒等の腦裏に刻みつける。

斯んな風に此の天才教育家にあつては、植物學は一の感激をそゝる研究となる。實際、私は比類なき教育の寶玉たる「草木」(La Plante)及び「薪の話」(L'Histoire de la Buche)よりも心を奪ふ讀み物を知らぬ。



若しも自修したいと思ふならば、若しくは子供等へ科學の趣味を植ゑつけるために、ジャン・ジヤック(ルソオ)のしほらしい願のやうに、「出来るだけ安價に」之れを得させようと思ふならば、それならフアブルの方法に従ふがいゝ。天と地、遊星とその月、偉大な自然力の機制とそれを支配する法則、生命とその材料、農業とその實施……凡てに觸れ、凡てに通ぜしめ、それが教育のためにせよ娛樂のためにせよ、何人にも理解出来る寔に優れた之等の手引書を、彼等へ唯一の友として與へるがいゝ。

また人智の頂上に達し、尙ほも遙かに高く昇らうとしてあまりに長く深淵の上を彷徨し、そして、力も根も盡き果てて身邊にはたゞ闇黒しか見ないやうな人々も、之等科學の教理問答書に歸つて支へを求め、足場を取るべきである。

あらゆる智識の摘要、田園に於ける叡智の眞聖典、之等の申分なき聖務日禱書は、既に數代を教習して來たのであるが、未だ之れに匹敵するものはない。

人の云ふ所に依れば、デュリュイが之等の小さい本を讀んで、此の素晴らしい教育家に皇太子の

教育を委任しようとしたと云ふことである。そして彼れがフアブルを殊更に自宅へ呼び寄せた隱密の理由は、如何なる點から見ても實に此處にあつたやうに思はれる。何んと云ふ理想的な師傳シムを彼れは欲したことか！ また他の人々ならば、斯うした選擇を如何に光榮としたことであらうか！ 然しながらフアブルは、飽くまで獨立に戀々として容易に馴致せらるべくもなく、とても朝廷の環境に堪へ得る人ではなかつた。そしてまた、彼れは果して斯うした光輝を與へらるべき人だつたか何うか！ もとよりフアブル自身が此の事に就いて少しも知らなかつたのは怪しむに足らぬ。文部大臣にとつては、數秒間此の科學者と對談した丈で、如何に心を唆るやうな申し出も、あらゆる誘惑の力も、彼れが帝都に滞在することの嫌惡や、田舎の生活に對する排他的な、生得の熱愛などに對しては、何んの效力もないことが看破せられたに違ひない。

事實、之等の著作もフアブルには、少くも國民教育がいよ／＼一段の飛躍をなすまでは、可成り慘めな収入しか齎さなかつた。そして随分永い間、彼れはオランダに於て文字通りにその日暮しをした。



漸く幾らかの餘裕が出来たかと思ふと、彼れはひたすらミルへ借金を返へすことに心がけた。そして彼れは哲學者の許へかけつけた。三千フランと云ふ大金を、廉直さのほかには保證も何んにもなしに、殆んど手渡しに貸して貰へた有難さに堪へなかつたのだ。

斯んな譯で此のエピソードの想ひ出が、生涯彼れの腦裡へ刻みつけられてゐた。三十年後、彼れは尙ほ此の事の一伍一什を想ひ出しては語つた。彼れは幾度び私を前にして回想し、必ず之れを書き止めて呉れと云つたことか！ それほど彼れは彼れの經歷の此の出来事が、忘却の中へ消え去るのを恐れてゐた。幾度び彼れは私に、ミルの限りなき配慮と極端な遠慮とを話したことか！ ミルは彼れ自身の云ふやうに、債務者の良心にしか跡のない此の負債に對して、返済の證書を與へようとしたほどなのだ。

二年経つか経たないうちに、ミルはアヴィニオンで死んだ。

ファブルが最後に彼れと相會し、連れ立つて植物採集をしたのは、オランジュの郊外である。此の旅は永かつた。そしてファブルは何時ものやうに連れの人々を疲らせた。遅れを取ることに嫌ひ

なミルは、辛うじて足を引きずつてゐた。そして何んか植物を摘み取るために屈むと、彼れはもう身を伸ばすに非常な困難を感じた。(セリニヤンでの會話)

アヴィニオンへの歸るさ、彼れは此のきつい一日の疲勞にくづ折れて、幌もない馬車に乗つて家へ歸らなければならなかつた。翌日彼れは、その頃アヴィニオンで流行してゐた丹毒に罹つた。そして一週間と経たないうちに生命を奪はれたのであつた。哲學者に招かれて中食を共にすることになつてゐた或る日、ファブルが何んにも知らずに訪ねて行かうとした時には、彼れはもう、久しい間眼を離さないで來たあの眞白な墓石の下に横たはつてゐた。(一八七三年五月七日)

註一 一九一三年十月七日、ミルの孫娘、メエリ・テイラー夫人(Mrs. Mary Taylor)から私への手紙。

墓場に近いその小さな家へ着く前に、ファブルは何時もするやうに、サン・ジュスト書店へ立ち寄つた。彼れが、彼れらの間の親交を突然に斷ち切つた悲劇を知つたのは、此の本屋に於てであつた。それは實際、幾らか隔意のある交りだつたにしても、不思議に氣高く麗はしいものだつたではないか。



教科書の齧らす所は殆んど零に等しい上に、之れが準備に要する時間は非常なもので、彼れの骨折りと云つたら一通りではない。フアブルがそのプログラムを遂行するに、如何なる注意、如何なる熱情、如何なる自尊心をもつてしたかは想像も及ばないほどである。

第一に彼れは、子供等へ科學の趣味を興へて彼等の好奇心を養ふには、幼時既にそのもてあそぶ單純な玩具に對して、それが極めて貧弱で金のかゝつたものではないにしても、旨く彼等の興味を惹き起させることが何よりも重要であると考へてゐた。寔に彼れが「子供の工業」に依つて意味したやうな、極めて單純な、極めて小さい機械の中にも、時として目ざましい眞理が胚胎せられてゐる。そして書物にも優る玩具の學校は、若しも物やはらかに導かれるならば、子供のために宇宙の窓を開くことになるであらう……」

「……裸麥のパンのはし片れへ、何んか小枝を突通してこしらへたつまらぬ獨樂は、ア・ベ・セを書いた本の頁の上で、音も立てずにくる／＼廻る。それが最初の刺戟を永久に保ち、大きく圓を描いて移動し、同時に自轉する所の地球の像を、可成り正確に與へるであらう。その圓面へ、適當に色をつけた紙片が貼りつけられると、それが、白い光も色々な光線に分たれることの説明になるで

あらう……」

「また葫蘆そくすの突鐵砲もあるではないか。二つの麻屑の栓をつめ込んで、込矢を以つて手許の栓を押すと、壓搾せられた空氣の弾力に依つて、先の栓が放たれる。火藥の彈道學や發動機の蒸氣の壓力などが其處に見られる……」

杏子の核を辛棒強く空にして穴を突き開け、二本の藁を柄のやうに箆め込み、一本をコップの水の中へ入れ、他へは迎へ水を注す。と、それが小さい噴水器だ。そして「太陽の光りがきら／＼映る可愛い水の絲を撒く。」之れが物理學の本物のサイフォンへ吾々を導いて呉れる。

完全なほんたうの教育ならば、斯うした「子供創意學校」(Conservatoire de l'ingéniosité enfantine)から、何んと云ふ面白い、何んと云ふ有益な教訓が引き出されることであらう！

註一 Les Jouets (玩具) Le Toton (獨樂) ——發表されぬ原稿。

最初の噴水器、即ち昔から傳へられて來た「大昔の小道具」は、恐らく「何處かの小さい牧童が、徒然のまゝに考へつたものであらう」が、それはもと／＼三つの穴と三本の藁からなつてゐた。一面には二つの穴が並んでゐて、それに短い二本の藁が上げられ、そして水に突つ込まれる。他の面には一つの穴があつて、長い一本の藁が上げられ、それが水を噴く。ところが或る日、若いフアブルはひよつと各面



へ薬を一本づゝにしてみたところ、それでも矢張り「小道具」がうまく行くのだつた。「こんな具合に、全く何んの氣なしに、思ひがけなくも私はサイフォン、物理学のほんたうのサイフォンを見出した。」

當時彼れは自分で彼れの子供等を教育してゐた。彼れの化學の講義は何よりも彼等の間に大もてだつた。彼れは手作りの「あつさりした」道具を以つて、甚だ興味のあるやさしい實驗を澤山やつた。その道具と云ふのは、大概普通の硝子瓶、芥子の空罐、水飲みコップ、鶯鳥の羽、パイプの羅字などであつた。

註一「化學の講義はわしの所で大流行だ……」一八七五年オランヤユから弟への手紙。

感嘆の眼を見張る彼等の前に、驚くべき現象が相次いだ。彼れは、彼等をしてよく見、味はひ、取り扱ひ、嗅いでみさせた。そして何時でも「手は言葉に手傳ひ、實例は法則に伴つた。實際、「見るは知るなり」と云ふ全く無視せられ閑却せられながら、而かも深遠な意義のこもつた金言を、彼れのやうに巧みに實行した者はない。

彼れは務めて彼等の好奇心を刺戟し、疑問を起させ、考へに秩序をたててやつた。彼れは、彼等をして自ら自分の誤謬を訂正させるやうにした。そして彼れは之等の凡てを利用して、彼れの教科

書の優れた材料とした。

特に女子の教育を目的とした教科書のためには、彼れは娘のアントニアの助言を求め、就中家庭化學のことに關しては、何なりと思ひつくことを暗示して呉れと頼み、彼女の協力を求めたのであつた。洗濯の仕方からスープの作り方に至るまで、「家政の凡ゆる方面へ正確な科學はその光明を注ぐべきである。」

註一 一八七九年十一月四日、息エミールへの手紙、及び Le Ménage (家政)

中學校の氣苦勞を厄介拂ひしたにも拘はらず、彼れのいたく失望したことには、相變らず暇がない。そして、彼れは生れながらに授かつたその仕事に専心することが出来ぬ。既に取りかゝつた鼈甲蜂 (Pompilus) の研究を思ふやうに遂行することも出来なければ、恰度住家に近い小徑へ巢を築きにやつて來たくだ蜂 (Halictus) の觀察を繼續することも出来ず、彼れはやけになる。生の極めて難解な問題の一、即ち性の問題を掲げる之等の膜翅類にあつて、斯うした植民は彼れの二度と出會さないところのものなのだ。だから彼れは二十五年も経つてから、やつとその歴史を築き上げること



が出来たのだ。

「たつた一人、私は顧みられることもなく、悪運と闘つてゐる。哲理を究める前に、先づ生きなければならぬ」——斯う彼れの感じたのは、特に此の時期だつた。(昆蟲記)

彼れの小止みない勞苦に、悲痛な失望が加つてゐた。ミルを失つた年に、フアブルはルツキヤン館の保管係の職をやめさせられた。そこへはアヴィニオンを去つてからも、彼れはその職務を果すために、規則正しく一週二回やつて來てゐた。市當局は、密かに企んで、何んの文句も説明もなしに、彼れを突然免職させた。彼れはこの免職から無限の苦味を感じた。「帯やはたきの仕事に雇はれた小僧だつて、こんな酷い取扱ひはされなからう。」然しながら彼れのもつとも苦痛を感じたのは、かうした理由のない侮辱ではなかつた。それは彼れの師であり友であつたルツキヤンと高貴なステュアート・ミルと、それから彼れ自身とによつて、「あんなにも戀々として集められた」なつかしい植物標本から今や永久に去つて、この貴重ではあるが消滅しかねないものを忘却から救ひ、そして三十年來、ミルと協力してやつて來たヴォウクリュウズの宏大な植物地誌を完成することの出來ない無限の遺憾だつた。

註一 一八七三年十二月一日、フェリックス・アシャル (Felix Achard) よりアヴィニオン市長への手紙

「彼れはアヴィニオンを去つたので、もうこれまでのやうに、彼れの職務に忠實であり得なからうなどと云はれた。だが、實際の理由は、彼れの位置を奪つて、如何なる點から見てもこれに適してゐるやうもない市當局者のお氣に入り、與へようと思ふにあつた。」

註二 一八七八年一月二十三日、ドウラクウルへの手紙——「私は今、縣會とルツキヤン館とへ、ヴォウクリュウズの植物地誌の印刷を請願してゐる。」が、この請願は少しも顧みられなかつた。

かうした理由から、アヴィニオンへ農事試験場を設けようといふ案が出で、そして彼れにその管理を委任しようといふことが問題になつた時、最初、彼れは喜んでこれを承諾する氣になつた。彼れはきまつた位置から來る閑暇と安心との中で、實際の上に重大な影響をもつ無数の魅力のある研究をすでにしばらくにつゞけて行くことが出来るやうに思ふ。そして恐らく彼れは、この廣い領域に於ても、效果に富んだ幾多の眞理を發見することが出來たであらう。實際、彼れは如何なる方面から見ても、さうした努力に適して居つた。そして彼れ自身も亦、そこに眞實の満足を感じたであらう。これまでも既に、彼れは何んとか田舎の子供等に農業の趣味を抱かせようとしてゐたではない



か。彼れは農業をもつて正に小學校の論理的補充であると考へてゐた。そして農業は、彼れ自ら深く研究し、熱心に教へて巧みに通俗化したやうな凡ゆる科學の上に立脚すべきものなのだ。

殆んど十二年間といふもの、彼れはいかなる辛棒を以つて紅蓮の研究に熱中し、實驗を幾度となく繰り返し、嘗にその色素を引出したばかりでなく、またその變質や質造の認知法をも示したりしたか。これは前にも云つてある。

彼れはまた、農業の立場から見た昆蟲學に關して、類ひ稀なる記録を公けにすることが出来たであらう。この小さい蟲けらの世界の重大さを洞察してゐた彼れは、恐らく貴重な救済、極めて論理的な豫防法を示すことが出来たであらう。實際害蟲驅除法を眞に有效ならしめようとするならば、それを粗笨な經驗主義の上よりも、寧ろ彼等の社會生活や習性やの豫備的研究の上に立つべきではないか。さうした豫備的研究がなければ、彼等と闘ふあらゆる方法も何等の效を奏しなからう。それは實際、フアブルはこの方面に於ける吾々の努力の効果が非常に限られてゐると信じてゐたにしまだ。

破壊的な、恐るべき殺象蟲や、夕べ音もなく飛んで、時には幾百萬の損害を與ふる柔かい翅の絶

望的な蛾を、彼れはどんなに根氣よく觀察したであらう！ 花や芽、蔓や間もない收穫を約する青い實などへ、致命的な汚點をつける寄生菌の繁殖を阻止し、もしくは助長する條件を、彼れはどんなに精密に記録したであらう！

然しながら、彼れは突然不安をかんずる——それも吾身の自由を犠牲にするだけの價値があらうか。「生意氣な、碌でもない連中から、いろ／＼な目に逢はされはしないだらうか。」何んとなれば、今ではもう再び「軍隊へ入る」などといふことは、考へても彼れは「ぞつとする」のだ。そして彼れは結局農事試験場管理の椅子を拒絶した。

註一 一八七五年、弟への手紙。

註二 「アヴィニヨン農事試験場は、話があるや否や、私にいろ／＼な邪魔を企てた。そんなことは私は厭だ。て、辭意を表明した。」（一八七六年五月二日、ドウラクウルへの手紙）

五ヶ年後、南フランスの農業に未曾有の災禍が起つて、すべてが消滅しようとしてゐた時、彼れに助力を求めたのは、一人ヴオウクリヌウス縣のみではなく、またフランス學士院團だつた。もう



紅蔓もない。絹絲工業も息の根絶えくだ。あらゆるさうした悲惨に禍て、加へて、豊富な、美しい葡萄園——南フランスのもつとも確實なこの富も、極微なしらみの不斷な、眼に見えない咬み傷によつて潤らされ、褐色にせられ、そして失くなつて行く！ 然しながら、恰度バストウルによつて征服せられた微粒子病やフラツシユレなどよりも、これはまた無際限に巢別れすること、深く喰ひ込むことのために、どうにもかうにも手のつけやうがない葡萄蟲 (Phylloxera) に對しては、彼れも仕方がなかつた。

註一 「アカデミーから葡萄蟲征伐をしると云つて來た。私の『昆蟲記』を見て、ちつとは之れならと思ふたのかな」一八八〇年七月三十一日、ドウラクウルへの手紙。

註二 「私共の氣の毒な縣は、ひどい目に逢ひました。もう紅蔓は無い！ 出來た絹と云つても、やつと知事の官服を飾るに足るか何うか！ 葡萄蟲！」一八八〇年三月三日、ドウウイヤリオよりフアブルへの手紙。

さうしてゐる間にも、殆んど二十五年以來そなへ、据ゑ、刻み、そして磨いて來た彼れの偉業の最初の礎が、徐々として形を取つてゐた。一八七八年の末には、可成りな數の研究をまとめること

が出來た。それが昆蟲記 (Souvenirs entomologiques) の第一卷となつたのだ。

暫し立ち止つて此の昆蟲記第一卷を見てみよう。その出版はひとりフアブルの經歷の上に於てのみならず、また廣く科學の記録の上に於ても、眞に歴史的出來事である。それは同時に、之れから先き吾々の眼前に展開せられ、擴大せられようとしてゐる驚嘆すべき建物の圓天井に對する手引であり、鍵である。そして未來もこれに、更に根本的な何物をも附け加へることは出來なからう。本能に關する主要な思想、進化論に對する批評、動物心理學に關する實驗の必要、生存の調和の法則など、すでにそれ／＼決定的な、完全な形式をもつて、その中で説明せられてゐる。

この多産な、運命を決する年は、フアブルへ非常な苦悶を與へてゐる。彼れは彼れの子供等のうちでも、最も熱愛したやうに見える子息のジュルを失つた。

彼れは「全身悉く火、全身悉く焰」の甚だ有望な少年だつた。その性質は眞面目で、智能は早熟し、科學と文學的研究とに對する類ひ稀な性向は、誠に驚くべきものだつた。彼れの五官の鋭さも



亦異常で、眼を閉ぢたまゝ如何なる植物を手にしても、彼れは單に觸つただけで、これを知り、これを判定することが出来るのであつた。

フアブルがドウラクウルへやつた手紙の中には、シクラメン、きんぼうげ、アネモネ、その他球根植物のいろ／＼な變種に満ちたオランヂユの彼れの庭を跳び廻る所の、彼れ自身の趣味と傾向とをもつた、この素晴らしい後取息子のことがよく現はれてゐる。「そこで彼れの鋭い眼差に止らないものはなかつた。そこで彼れは彼れの大好きだつた美しい蜂共のあとを追つかけ廻つた。」そして昆虫や花の前で狂喜するのであつた。

彼れの急激な發育が、間もなく大きな心配の種となつた。悪性貧血症が、彼れの色艶もない弱々しい肉を犯してゐた。禍を豫感して氣もそゞろになつた不幸な父は、何所か刺戟の強い空氣が、この愛らしい研究の友の精力を生々させるかも知れないと考へる。そしてドローム地方の山中のロツシフォル・サムソンヘジュルを連れて行く。その村の小學教員は、彼れの友人だつた。山毛櫨や縦に取りかこまれた強健な大氣は、一時少年の元氣を回復するものやうに見えた。然しながらイリュジョンはながくはつゞかなかつた。そしてフアブルはドウラクウルへその失望を打ち明けてゐるがして泣く。

四日、ドウラクウルへの手紙)

「私の可愛い子は將に死なうとしてゐる……私は彼れへ君の贈つてくれた素晴らしい球根を見せてた。その時の頬笑みが、此の世に於ける彼れの最後の小さい悦びの現れだつた。」(一八七七年九月十四日、ドウラクウルへの手紙)

彼れの胸には恐しい空虚が出来た。それは永久に滿されはせぬ。三十年後尙ほこれを想ふて感動し、ほんにちよいとした暗示にも、あの懐しい姿が彼れの心眼へ甦へり、その都度彼れは全身をゆるがして泣く。

バストウルが殘忍な哀悼の後、「さらした悲しみに對する唯一の慰め」たる研究へ、再び全身を打込んだと同じやうに、フアブルに取つても仕事は遁れ場であり、慰めだつた。然しながらこの恐しい打撃は、あんなにも頑丈だつた彼れの健康を、さすがに損ねずにはゐなかつた。一八七八年の嚴しい冬の初めに、今度彼れは重患に陥つた。彼れは生命を奪はれようとしたほどの肺炎にかゝつたのだ。そして彼れはもう助からないものと思はれた。だが、彼れの病は癒える。そして寧ろ生れ更つたものやうに、彼れはそこから新しい力をもつて現れ、最後の努力に向つて突進する。

註一 「フツケル (Fuekel) と サツカルド (Saccardo) との細菌に關する二書を送つてくれた君の好意に對



し、私は感謝の念に堪へない。これらの著書は、私にとつて、私の蒙つた不幸の中で唯一の慰藉だった。私は上等の顕微鏡を用ひて、文字通りそれに没頭した。あらゆる私の古い收穫は、最近の收穫と共に、再び眼を通された。私の発見の中には、随分いろ／＼な珍しいものがある。」(一八七八年一月二十三日、ドウラクウルへの手紙)

註二 「三週間ばかりこの方、私はひどい病氣のために床に釘づけにせられてゐる。それは肺炎で、私はもう少ししておさらばだった。」(一八七八年十二月五日、ドウラクウルへの手紙)

思へば極めて多産な決意も頼りないものではないか！そして吾々はすべて「無意識なもの」の掌中にあつて、何んたる哀れな玩具であるか！ファブルをして公然教育界と断たしめ、そしてアヴィニオンへ避けしめるためには、まことに一小些事で足りた。彼れのオランヂユ出發を決定した動機も殆んどそれと變りはなかつた。彼れの棲家の玄關へ導く素晴らしい、あの蔭にみちたプラタアヌの並木——そこでは春、小鳥が囀り、夏、蟬が歌つてゐた。ところがある日、彼れの家主は利慾からか、それとも暗愚からか、残忍にもこの並木を伐り倒さしたのだ。

ファブルは自然に對するさうした殺戮、さうした野蠻な毀損、さうした罪惡に堪へることは出来なかつた。平穩に饑ゑた彼れには、もう住家があるといふだけでは満足出来なくなつた。彼れには

何がどうあつても土地が必要になつた。

そこで、自由を贖ふべきさゝやかな身代金が出来ると、彼れはもうとても堪らず、永久に都市を去つてセリニアンセリニアンの、ほんに小さい茅屋の、しづかな薄暗がりの中へ退いた。そして此の一角の地へ、彼れはこれから先き、その全精神をさゝげたのだ。



## 六

### 隠者の生活

詩人とその詩とを理解したいと思ふならば、その詩人の郷土へ行つて見なければならぬ——かろ何處かでゲーテが書いてゐる。

で、メニイヤアヌ (Mailane) のミストラルの生家へ多くの熱烈な讚美者を導くと同じやうな敬虔さをもつて、吾々も巡禮をやつて行かう。それは自然の謎に魅せられるすべての人達によつて、後の世までもつゞけられるであらう。

オランヂユを出てアイグ川を過ぎる。この早瀬の濁つた水は、ロオヌ河へそゞぎ込むのだが、七月の炎暑によつて乾上ると、河床はたゞもう荒涼たる礫石の廣がり、左官蜜蜂 (Chalcidoma) がやつて來ては、その美しい作岩つくりいしの小塔を築く。やがてセリニヤンの田舎へ這入る。それは乾燥し



て石だらけな、葡萄や橄欖を植ゑつけられた、所によつては地から血でも沁んでゐるやうな、古い  
錆の色調を帯びた田舎であつて、そこ此處に絲杉のこんもりした林が、黒い斑點を點じてゐる。北  
の方には冬青、高いブルーエール、大きな黄楊などに蔽はれた丘陵の、黒い長い線が走つてゐる。  
東の方、遙か奥の方では、際限のない平野がサン・アマンの連互や、ダンテルの脊などによつて閉  
ぢられ、その蔭に高いヴァントウ山が雲表へ石だらけな、龜裂の入つた、その野生の胸を突出して  
ゐる。

北風の強い息吹が拂ふ埃だらけな街道を、二三キロ米突行くと、小さい村へ著く。それは異様な  
小さい村で、本通りはプラタマの並木をもつて飾られ、流るゝその泉、イタリイ風なその外觀、  
平らな屋根をもつた白聖塗りの家、そしてちよい／＼小さな荒屋の傍らに、思ひがけない露臺の穹  
窿が見えたりする。教會につゞいてゐる典雅な鐘樓は古い八角形の塔で、打つて作つた鐵の三輪冠  
を戴き、その中に幾つかの鐘が黒いプロフィールを見せてゐる。

私は私の最初の訪問を、何時までも忘れることは出来ぬ。それは八月だつた。田舎はたゞもう暑

熱に熱狂した蟬の歌で響いてゐた。私は案内を頼むつもりで、オランヂユのある周旋屋をたづねた。  
が、彼れは曾て隠者のところへ人を案内したことはなかつた。彼れは殆んどその人の噂を聞いたこ  
ともなく、その住家に至つては全く知らないのだつた。それにしても吾々は、やつとのこととそれ  
を見出した。小さい村の入口の、森閑とした一隅——松や絲杉の蔽ひかぶさつた高い塀を繞らした  
中に、その住家が匿されてゐるのだ。そこからは何んの音も響いて來ない。忠實な犬のトムが哮え  
でもしなければ、私は思ひ切つて門を叩きはしなかつた。それが眩金の上にぎい／＼音を立てて開  
く。

緑色の鐵戸を持つた桃色の家が、小暗い葉蔭にうづくまつて、通りの方は絲柳の垂幕をもつて北  
風から護られ、春になると、香の高い密錐花の重さの下に撓む。リラの路の底に浮彫されてゐる。  
そして、その正面は高いプラタマに蔽はれてゐる。焼けつくやうな夏の午後には、滿那樹の蟬、  
(Cigale de l'orne) 即ち氣も遠くなるやうな、俗にカルカン (Carcan) といふ蟬が、葉蔭から熱い大氣  
の中へ、熾烈な光のつゞく限り、その身を刺すやうな鋭い鳴聲を仕切りなしに投げる。彼れの耳を  
聳せんばかりの鳴聲と、泉の呟きの他には、この寂寥の深い沈黙を亂すものはない。



註一 「もし君が茲に来てゐたなら、家の前の大した蟬の合奏を聞かれよう。こんなのを私は聞いたこともない。場所が奴等の氣に入ると見える」 (一八七九年七月二十二日、ドウラクウルへ)

前方、眩の高さ位なさゝやかな石垣の彼方、一人ぼつちな塚の上には、互ひに枝を組み合した大木に蔽はれて、縁を苔に覆はれた圓い池が、あめんぼうに大きな圓を描かせながら、しづかな表面を見せてゐる。その池の眞ん中には噴水が水を吐いてゐる。それは山から流れて来る水である。同じ流れがあらゆる村の泉を満し、そして三伏の炎暑の下に、外ではすべてが枯れるやうな時でさへも、有り難い夏の通れ場たるあのブラタアヌの緑蔭へ、何んと云ふ涼味を與へてゐることか！

それから突然、庭のうちでも極めて異常な庭が開ける。それは石だらけなこの土壌の、凡ゆる所へ突き出て来る旺盛な植物に満ち／＼た、野生の廣い園生である。數里の四方から此處へ無數の昆蟲を惹きつけるために、隅から隅まで、新たに作られた草木の混沌。

莢蒾の繁みやラヴァンドの厚い叢は、香ばしいさんとり草の縁があるにも拘らず、あらゆる小徑にはみ出してゐる。とコロニラ、(Coronilla) の大きな鉢が、その黄色い翅のやうな花をもつて、

道を塞いでゐる。そして身に沁み込むやうな香氣が、あたりの空氣を薫らしてゐる。

さながら近くの山が、ある日、歩き出して、通りすがりに此處へ、その薜、きだち、はくか、山茶、黄、連玉、橄欖樹、冬青、椰棧、杜松、大戟、それから一と朝で萎れる桃色の花のこじあふひなどを残して行つたのかと思はれる。そこにはレビン樹、いちごの様な赤い實の楊梅が繁つてゐる。

そして松はこの矮人の森林の巨人であるかのやうに高く突立つてゐる。日本の水蠟樹は柔かい緑な葉の山楂子や玄参と隣り合つて、その實を黒くしてゐる。款冬は莖と交つてゐる。さるひやと百里香の繁みは、その香りを迷迭香、その他無數の香ばしい草花の香氣に混へてゐる。針の突立つた、肉の厚い仙人掌の間には、雁來紅がその野生な花を開いてゐる。さうかと思ふと一隅にはむかご、らのを (Serpentine) が、その小さい喇叭を飾り立てゝゐる。その口へ腐つたものの好きな昆蟲共は、それが發散する屍のやうな厭らしい嗅氣に欺かれてすつぽりと入り込むのだ。

かうした緑の瀧の見ものは、特に春である。この季節には、庭はあらゆる五月の花に彩られた祭りの飾りの中に覺め、そして唸りに満ちた暖い空氣は、酔はせるやうな無數の匂ひに香つてゐる。



さう、青天井の下の観測所、生きて昆虫の實驗場、「このファブルが全世界に有名にした「アルマ」  
(L. Harms)の春こそは、實に偉觀である。

私は食堂へ入つた。その縁に塗られた鍍戸は、太陽と蠅とを防ぐために半ば閉ぢられてゐて、更紗の窓掛を通して入つて来る明りは、覺束ないものである。幾つかの藁張りの椅子、毎日七人を据ゑる大きな食卓、二つ三つの粗末な筆筒、一つの甚だ質素な本棚——それが全家具である。煖爐棚の上には、黒大理石の懸時計がかゝつてゐる。これはアヴィニヨン退却の際に、彼れの古い生徒達、サン・マルシアルの自由講座に通つた若い婦人達から贈られた唯一の贈物、貴重な想ひ出である。此處で毎日午後、昆虫學者は小さい長椅子に凭りかゝつて一寸午睡をする。たとひ眠らないにしてもかうしたさゝやかな休息で、朝の間のはげしい勞苦のために、すつかり弱つてしまつた彼れの活動力が回復せられる。すると彼れはその日の終りまで再び活々し、晴々するのである。が、彼れはもう起きてゐて、何んにも冠らず、シャツの腕をまくり上げ、ネクタイもつけず、そのまゝ私を快く薄明りの中で迎へてくれた。

フランソワ・シカアル (François Sicard) はその缺點のないメダルと見事な半身像の中で、此の年に刻まれてざら／＼した髻のない顔——プロヴァンス風の大きなヘルト帽の下に、快活と好意とを湛へたこの百姓の顔を、後世のためにまことに巧みに現はしてゐる。深い皺に刻まれた瘦せた頬に、歪んだ鼻のこの不思議な顔面、皮膚のたるんだこの頸、皺の寄つた薄いこの脣、その隅には何んといふ悲痛の皺があることか！——それをシカアルは巧みに掴んでゐる。髪は後方へ投げられて、僅かに渦を巻きながら耳の上へ垂れかゝつてゐる。そして高い圓い頑固な、豊富な想の額が現れてゐる。

しかしながら、時々險の痙攣的な顫ひによつて隠される、あの据つた眼差しの驚くべき鋭さは、どんな筆、どんな筆によつて現はすことが出来ようか！ 瞳が擴つて虹彩を無くしてしまふほどな、この黒い眼の異常な光りをどんなホルバイン、どんなシヤルダンが現はすことが出来ようか！ 豫言者もしくは見者の眼。絶えず事物の神祕に對して開かれてゐるやうな、奇妙にも廣く深い眼。自然を詮索し、その謎を解くために作られたやうな眼！ 一度びこれをまともに見たものは、永久に



忘れることは出来ぬ。ちつと据わつたあの眼の底に輝く魅力のあるあの瞳！

註一 Hans Holbein. 1497—1533——ドイツの肖像畫家。

註二 Jean Chardin 1639—1779——フランスの風俗畫家。

かうした眼窩の上に、二つの冠毛のやうに短かい毛ば立つた眉がある。それが眼差を導くために特にそこに附けられてゐるものやうである。その一つは擴大鏡のレンズの上に當てつけられるところから、不斷の注意も伸ばすことの出来ない折れ目がついてしまつてゐる。これに反してもう一つの方は、常に突立つてさながら對談者に挑戦し、その反對を豫見し、そして何時でも應酬せんとしてゐるものやうである。

この賢者が進んで隱遁したのは、彼れ自身が云つた様に、此處「隱者の隠れ家」である。實際、彼れは科學の聖者であり、木の實と野菜と少しの葡萄酒とを以て生活する禁慾主義者なのだ。彼れの平穩に汲々たることは、その村に於てさへも、長い間、彼れは殆んど人に知られなかつた程である。彼れは近くの山へ行くにも人目を避けて、石だらけの細い小徑を取り、そしてたゞ一人、終日、

自然に面接するのであつた。

都會の空氣、空虚な動搖及び人間の息吹などから遠ざかつた此の靜かな隱遁所に於て、彼れは常に一樣な生活を送り、執拗な勞苦と未曾有の忍耐とをもつて、幾多の非凡な、奇蹟的な觀察を、六十年間近くも繼續することが出来たのだ。

實際、職務の面白くもないおきまりの義務、もしくは何んか氣を疲らすやうな仕事を片づけるために、絶えず氣をそらし、時には極めて興味のある最中にも觀察を中止しなければならなかつたので、これまで企てた長い辛棒づよい研究を完成するために、彼れはどれだけの時間を必要とし、どれだけの努力を費してゐるか、それはもう吾々に分つてゐる。彼れの最初の著作は、すでに二十五年ばかりを遡る。そしてセリニヤンの寂寥の中に這入つた今、彼れは僅かに昆蟲記第一卷の材料を辛うじてまとめたに過ぎないではないか。

これから先の多産な三十年とは、何んといふ對照であるか。今や約十卷の、これまた極めて豊富な内容に滿された本が、約三年といふ殆んど正確な間を置いて、それからそれへと世に出ようと



してゐる。

それは實際何處にゐても、研究主題さへあるならば、それが世界の涯にしても、彼れは矢張り收穫することが出来たのだ。そんな風にジャン・ジャック・ルソーは、彼れのか、なりや、へやられた繁<sup>は</sup>葉の束の中でさへも、植物採集をしたのであつた。それにしても彼れがこれまで摘むことの出来た野原は、眞に甚だ瘦せたものだつた。彼れがアヴィニヨンで鼈甲蜂の習性を観察し、そして見事な物語を作ることが出来たのは、それは不思議な昆蟲が、彼れの家へやつて來、彼れの部屋を選んでその住居となしたお蔭であつた。

彼れは偶然彼れの眼についたあらゆる事柄に關しても、等しく熱中したのであつた。たとへば或る蠕蟲の燐光に關する観察などがそれである。その蟲は彼れの住居につゞく小さい中庭に澤山居つた。然もその後、彼れは二度とこれに出會はさないのだ。

註一 *Lumbricus phosphoreus de Duges*——この奇妙な燐光の現象が、その蟲に生れると同時に現れることを、フアブルはすてにはつきりと看取つてゐた。彼れはまた、これまた正確に、酸化の作用、ある特殊な構造の非常に急速な一種の呼吸を、そこに看取つてゐた。(一八五七年二月一日、レオン・デュ

フウルへの手紙

で、彼れが望んだやうに大學の教授にならなかつたのは、彼れにとつてではなくとも、少くも彼れの天才にとつては悦ぶべきことである。勿論その方面に於ても、彼れは相當の舞臺を見出して、教育に對するその無類な資性を十分に發揮させることが出来たのだ。然しながら、其處では幾多の障礙にも出會し、また都會の官界に於ては、彼れの何よりも貴重な観察者としての天分が、なかなかその用途を見出すことは出来なかつたらう。

結局、彼れがその活動力を有効に用ひる爲めには、如何しても完全に獨立自由でなければならなかつたのだ。學者、研究者にとつて根本的に必要なものは、特にフアブルのやうな生ける自然の中に於ける觀察者にとつて何よりも必要なものは、それは自由と閑暇とである。之れ無くしては使命を果すことが出来ぬ。そして、斯うした閑暇が無い所から、幾多の生命、幾多の智能が、餘儀ない無爲の中に消耗せられたことか！ どれだけの科學者が土くれに心を奪はれながら、どれだけの醫者が氣を反らすことの出来ない患者の爲めに忙殺されながら、しかも恐らく云ふ可き何物かを胸に藏しながら、纔かにその計畫を粗描きするに止まつて、そしてこれが實現をば絶えず遠のく神祕な



明日に延して行くことか！

とは云ふものの、イリュージョンを懐いてはならぬ。何か未知の才能が自分の裡にも生れるか、若しくは擴大して行くことを望んで、自分も一つあんな風にやつて見ようと思ひながら、身邊を繞る無数の傳説に對して飽くことを知らぬ揣摩憶測を主宰することは出來ず、そして世を離れて爲すことも無く無爲の中に埋もれ、當初の希望に反して堪へ難く無益な倦怠の中に消滅して行く者も、どれだけ多く有ることであらう！ 隠者の生活をしてたゞ一人新しい道を探し求める爲めには、既に素質や意志や能力やが豊富でなければならぬ。で、多くの人は田舎の靜寂よりも、寧ろ都市の響きと人間の聲とを擇ぶのは、大いに理由のあることである。

大都會の大氣は不思議にも人の心を仕事に向はせる。不斷に實驗室や大圖書館に近く、諸大家の脚きの中に居るのだから、あまり途を失つて當てもなく迷ひ行くやうな虞れはない。他人と接觸して刺戟を感じる。他人の助言や經驗を利用する。そして吾々の持ち合はせない思想を容易に借用出來る。其處にはまた自尊の刺戟、競争の感情、昇進し、顯官に就き、世に輝き、衆目をあつめ、自

分も審判者——驚異と羨望との的になりたいたと云ふ熱烈な希望なども有る。さうでもなければ、多くの人々はする／＼な生活をして、決してものにはならなからう。

之れに反して屢々長い生涯の終りに至つて、それがファブルの場合のやうに、やつと光榮が自らやつて來て吾々の手を執り、そして何處か知られないメイヤーヌ、若しくは隠れたセリニヤンの奥の奥へ導く爲めには、一種の内的放射能と、眞實な才能とが無ければならぬ。

然しながら彼れは、その本性に内在的な一種の宿命に依つて、ジャン・ジャツクの適切な言葉を用ひて云へば、「自分を圍ひ込む」ことが好きだつた。そして彼れは全く孤獨である方が、寧ろ有益であると思ふてゐた。何んとなれば、彼れは久しい前から、否、常に變りは無かつたのだ。遙かに廻つて彼れが師範學校にゐた頃も、他の仲間がふざけ廻つてゐる間に獨り庭の一隅へ引込んで、一片の紙を膝に載せ、一片の鉛筆を指に挟み、そして何んか幾何の難問題を一心不亂に解いてゐるのであつた。また、二十五歳の時に彼れは故郷のことに關して弟へ斯う書いてゐる。

「……情熱を持つた植物學者にとつては、それは何んとも云へない嬉しい地方である。私は一ヶ月でも、二ヶ月でも、三ヶ月でも、一年でも、一人、たつた一人、小鳥や椋の木を啄く懸巢の外に



は、伴れと云ふものが無くても過せるだらう。そして、苔の下には橙色、白、若しくは桃色の美しい茸が有る限り、又野原には小さな花が有る限り、私はたゞの一瞬間たりと退屈することはなからう……」(一八四六年八月十五日、カルバントラスから弟へ)

彼れの著作は、恰度彼れの自由を贖つていよいよ地主になれるだけの金額を齎らした。そこで彼れは小額を出してあの荒屋、あの棄てられた一角の土地——「蕪の種子一つまみ託さうと思ふ者もない畝はれた土地——はまむぎや藓や茨などのみの繁殖に委かされたあの不毛の地」を手に入れたのだ。家の前の泉水は近所近邊の凡ゆる蛙をひきつけてゐた。梟はプラタマの頂で啼き、山の小鳥は人間が去つて以來、何んの不安もなくリラや緑杉の中へ、それ／＼住居をつくつてゐた。多くの昆蟲は久しい間住む者も無かつたこの家を占領してゐた。そして、何もかにもが廢類と放棄の跡をまざまざと見せてゐた。

それは一八七九年の春である。彼れは「石工、左官、ペンキ屋などの間へ」居を構へ、そしてこの混沌の中へ少しく秩序を造りはじめた。彼れが友人のテオドル・ドウラクウルへ送つた手紙に依るに、何んと云ふ注意と愛とを以つて彼れは熱心に家を修繕し、曾て鋤を突立てられたこともない此の石だらけな未開の野を切り拓き、そこへ小屋を作り、そして彼れの隠れ家を一層良く隠して無遠慮な者どもを避ける爲めに、あたりへ塀を繞らしたかが解る。

何よりも先きに、彼れは此の石だらけな一角を地上の一小樂園にして、そこへ極めて異様なものと、極めて美しいものと、更に極めて弱々しいものなどあらゆる種類の草木を集めようと考へる。ドウラクウルとヴェルロとは、彼れの荒地を飾り、之れを驚くべき球根植物のあらゆる變種を以つて豊富にする爲めに、各自の花壇からあれやこれやと持つて来る。彼等は數百種の灌木や大木を植物園から送つてよこす。フアプル自身は山を漁り歩き、ヴァントウ山の傾斜からさへも、楊梅や迷迭香や棘のあるブルユイエールなど、その緑な灌木を引つて抜いて来る。間もなく全セリニヤンが、入り代り立ち代り此の素晴らしい園を見物に来る。物語の中にあるやうなその花壇には、あらゆる見事な花が咲く——百合やグラチオルス。アネモネや毛茛。寒櫻草や天竺葵。さうかと思ふとスピトビイやさるひやが三色堇や風仙花と並び、松雪草がヘパティック(Hépatique 地盤の一種)と隣り合ひ、またノエルの薔薇(Bos de Noël)は黒ヘレボウル(Hellbore noire)と並んでゐる。



不幸にして、此の地方は寒冷な西北の風と交替に熾烈な太陽が燃ゆるので、七八月の極暑になると、あらん限りの配慮にも拘はらず、ドウラクウルの盡きない親切に負ふ之等の富も、凡て消滅して了ふのであつた。そこで、こいあふひ、さるひや、スペインのえにしだ、矢車草——その中でも時に圍の塀を越ゆる程の大きな芽を出すバビロン矢車草などのやうな、風や旱魃に耐へることの出来る植物に代へなければならなかつた。そして、「頑丈な釣浮子草つりうきくさと何時でも緑な迷迭香とは、萬歳！」(ドウラクウルへの手紙)戸外で繁ることの出来ないものは凡て鉢に植ゑられた。棕櫚、蠟椰子、カメロットス(棕櫚科)などは戸口の飾りとなつた。又、彼れが建てさせた温室の温かい空気の中には、彼れが青天井の下へ蔓はびらせたいと思つた凡ての珍らしい植物が並べられた。それはサイネリア、ヒアシンス、アマリリス、ベゴニア、シプリベデイウム (Oxyphidium 熊谷草、若しくは教盛草)、カメラリア、シクラメン (Cyclamen ふたのまんぢう)などを始めとして、不思議な植物の昆蟲獵人、あの肉を食ふと云はれる植物——アモルフオファルス (Amorphophallus) 及びカラデイウムス (Caladi-  
um) などであつた。彼れは此の獵人植物を精細に研究してみようと思ふたのだ。そして理論を實際に吟味して見るために、彼れはそれらを蠶の蛹や蟬をもつて養つた。

註一 「機會があつたら植物の昆蟲獵人を頼む。此奴を研究しなければならぬ。さう失望したものでないやうだ。肉食植物の説は、おいそれと私の頭には這入り兼ねる。そこで、實驗と出掛けるんだ。」(一八八三年九月十五日、ドウラクウル)

あらゆるかうした珍らしい草木の豊富さは、何よりも先づ畫家や詩人の様な彼れの趣味を喜ばした。他方、その他の無数の植込みは、單に骨を折つたものだからと云ふので、云はゞ惜しさうに小賣りせられた。こんな風にして、アルマはだん／＼と南フランスの全植物を集めたやうなものとなつた。誰か植物學に熱心な人がやつて来て、如何とも判定の出来ないやうな甚だ珍らしい植物を、此の「セリニヤンの隠者」に見せでもすると、彼れは何んの躊躇もなく即答を與へると共に、「アルマにもありまさあ」と必ず付け加へるのであつた。そして彼れの顔は、誇りと悦びの色とを見せな  
いではゐなかつた。

彼れは彼れ一個の力で、米國人や日本人や瑞西人などが色々な領域に於て費用を惜しまずにやつて来たものの例に倣つて、動物の種を保存するほんとうの「保存場」を、フランスの此の一角で、しかも自然のまつた中へ實現したのである。それは狭い一つの場所に於いて、地中海岸地方の昆



蟲がすべて見られるやうな、實に豊富な比類なき觀測所である。それは昆蟲、その習性、及び自然界に於けるその宏大な役目の研究の爲めに、今日吾々が持つてゐる一流の生物試驗場であり、唯一の露天生物學の實驗場である。それに、非常に興味のあることは、此處が地理的に二つの植物區及び二つの動物區の境界、即ち北部のそれと、南部のそれとの境に位してゐることだ。で、此處には殆んど兩區とも、幾分づゝ代表せられてゐると云つてもよい。實際、フアブルがあんなにも多くの有名な研究を成就したにしても、吾々はその多くをセリニヤンとアルマとに負ふものである。

註一 アルマを國有にするやうに私が下院でした演説は、主としてさうした理由に基づくものでつた。アルマは私の提議によつて、一九二一年十二月一日の議會で、國有財産といふことになつた。

實際、此處セリニヤンの荒野のたゞ中、ヴァントウ山に面してフアブルがこんな風に出現せしめた此の無数の香精の樂園へ、その鎮靜性の薫りや興奮性の香氣にひかれて、まことに思ひがけない昆蟲の種が頗る遠方から來り集つた。それはボルドウで觀察をしてゐた動物學者ベレエが、フアブルの採集の珍奇に満ちてゐるのにひどく感歎するほどだつた。それに、さうした標本のたつた一つ

を手に入れるためにも、時としてフアブルは遠い道を往つたり來たり、それは實にあらゆる苦痛を嘗めたのだ。

如何なる理由によつて、彼れは特にセリニヤンの此の村へ惹かれたのであるか。それは實際、彼れは他所に住居が得られるかどうか、それを調べて見ないではなかつた。そして、これまた有頂天ならしめるやうな珍奇に満ちたカルパントラスの田舎なども、彼れの心をそよつたのだ。然しながら、彼れの心をそよつて、特に此處へ誘き込んだのは、それは彼れにコルシカ島の密林を想はせるほど、それほど豊富な地中海岸地方の植物や、素晴らしい茸や、いろ／＼な昆蟲などに富んだ近くの山だつた。其處には太陽に焼けた平つたい石の下に、むかでが埋もれたり、さそりが微睡んだりしてゐる。また其處には、糞食甲蟲 (Bousier) 金龜子 (Scarabée) だ、こ、こ、こがね (Coprin) ミノタウル (Minotaure) 金龜子の一種) などの特殊な昆蟲に富んでゐる。そして、少しく北方へ行くと、それらが殆んど直ちに稀れになつて、やがては全く姿を見せはしないのだ。



こんな風にして、彼れはとう／＼行く所へ行つた。そして彼れは彼れのエデンを見出した。

「猛烈な奮闘の四十年を経て、彼れは彼れのあらゆる渴仰ねがひの中でも最も懐しい、最も熱烈な、最も長い間愛撫して来た渴仰ねがひを實現したのだ。「毎日、朝から晩まで、青天井をいたゞいて、蟬の歌を聞きながら、彼れはその親愛なる昆蟲どもを、ゆつくりと観察することが出来た。かうした幸を思ふ存分味ふためには、彼れはもう眼を開いて見、耳を欵だてて聞きさへすればよい。

教授のフロックコートを脱いで百姓の着物を著け、賦役の伴侶だつた燕の尾つぼの禮服を永久に箆の底へ突込み、シルクハットを脱みつけて置いて、これを滅茶苦茶に踏み蹂り、そして彼れは彼れの全過去におさらばをした。

彼れには持つて來いの田舎家、噴水のある大きな庭——彼れはその時どんなに心から嬉しく思つたことであらう。實際、彼れは始めて本當に自分の途に這入つたやうに感じたのだ！

今や自由の身となつて、焦々さしたり邪魔をしたり、いしくは自分の從屬を臭はずやうな一切から遠ざかり、もう横つ腹を殴りつける必要の鞭もなく、つゝましやかな安易に満足し、彼れの小さ

い著書に對して日増しに加はる人氣によつて保證せられ、彼れは徹頭徹尾自分の心身を我がものとして、彼れが性の趣く所へ全努力を献げることが出来た。  
こゝに於てか自然の中に埋もれて、その盡きざる永遠の本を前にして、彼れはほんとうに新生涯を始める。

然しながらさうした生活も、人間性の奥底に動くあのふかい感情の支持と慰藉とがなかつたならば、果して可能だつたらうか。人間は多くの場合、此の感情を左右することは出来ぬ。そして時にはあらゆる理性に反してさへも、それが問題中の問題として第一位に置かれるではないか。  
さうしたデリカな問題を、ファブルは新らたな喪に次いで解決しなければならなかつた。事實彼れはかうした深い平和の幸、それを享樂し出すか出さないうちに妻を失つたのだ。恰度此の頃、既に成長した彼れの子供等は、或ひは結婚したり、或ひは將に彼れを去らうとしてゐた。そして彼の年取つた父も、彼れはもう長くは自分の傍に引き止めて置く望みはなかつた。父は彼れの所へ來て居つたのだ。そして非常な老後までも、天氣の如何に拘はらず、毎日々々セリニヤンのあらゆる



途上にその老軀を引きずり廻してゐた。さう云へば、此の息子は實生活に不向きなその性向を、此の父から受け継いだものである。そして彼れも父と同じやうに、家計その他利害のことにかけては全く無能なのであつた。

註一 彼れは九十六歳で死んだ。

それ故、二年間饒夫の生活をした後、既に六十歳を越えてゐながら尙ほ豊饒たるファブルは、再び結婚をした。世評などは氣にもかけず、たゞ彼れ自身の感情が命する理由と、恐らくは又彼れを何うの斯うのと云ふ人々の智能よりも優れた彼れの確かな本能の直覺とのみに従つて、彼れは恰度ブウズガルウス（聖書の中の人物）を娶つたやうに天下晴れて、或る勤勉な、新鮮な生命に充ちゝた若い婦人と結婚した。彼女はまた秩序、靜穩、慰撫、それから何よりも彼れに必要だつた精神的平穩などの必要を満足せしめることの出来る立派な性質を持つてゐた。

それに此の新しい伴侶は、あらゆる點に於て、その使命に忠實だつた。そして未來が示す様に、ファブルがその研究をこんなにも遅播きながら續けて行くことの出来たのは、此の結婚の功德、此の健氣な夫人の助力によるものである。

一人の息子と二人の娘と、都合三人の子供が殆んど相續いで生れ、そして再び賑かになつた。そこへ最初の夫人の結婚してゐない次女が、間もなくやつて來た。それは幾度となく父へいぢらしい心を配り、そして「頬を活氣に咲かせて」彼れの最も有名な觀察の或るものに力を貸した、誠につましやかな、忠實な、諦めの強い、柔しい心根の「アグラエ」である。

世間へ出ては見たが思ふやうには行かず、彼女はセリニヤンの懐しい軒の下へ歸つて來た。愛し且つ崇拜する此の父から遠く、思ひ切つて離れることは出来なかつたのだ。

註一 彼女が今日アルマの保管人である。

後に、死の影が此のすぐれた昆蟲の詩人の上へ一層廣く、一層厚くなつて來ると、彼れの夫人や新しい子供たちも彼れの仕事に參與する。彼れらは彼れに、凡ゆる物質的な助力——その眼や、耳や、手や、足やを貸す。彼れは彼等の間にあつて、案を立て、推理し、解釋し、指圖するところの腦となる。



これから先のフアブルの傳記は簡單で、全然內的である。三十年間といふもの、彼れはもう山と石だらけな庭の地平から踏み出すことはない。そして、彼れは全く家庭の愛情と、昆蟲學者としての努力との中に埋没する。それにしても彼れは自由教育家の仕事を止めはせぬ。何んとなれば、純粹科學は無私な詩や藝術と同じやうに、その人を養ふに足らないからである。そして彼れは何時までも教育家フアブルとして、彼れの教育プログラムを倦むことなしに遂行して行く。たゞ以前ほど排他的ではない。

註一 「……私は依然として囚人の鎖を尙ほ幾環か足に引きずつてゐる。」(昆蟲記)

「私はまた無盡な教科書へ没頭してゐる……ほんとに、ダナイイドの構みたいなのだ。どんなに注ぎこんでもからつぽぢやないか。」(一八八八年一月八日、ドウラクウルへ)

で、實に活動的な此の長い期間は、たとひその多い月日のたゞの一時間たりと、たゞの一分間たりと充されないではゐないにしても、それは同時に最も靜肅な期間である。引越した最初の月から、彼れはまた勞働歌を歌ふ。息子のエミールへかう書いてゐる。

「仕事のために、たゞの一分間たりと息つく暇のない時ほど、人は幸福なことではない。お前にもだんだんそれが分つて來よう。働くことは生きることだ。」(一八七九年十一月四日、息子のエミールへ送つた手紙)

徹底的に自由であるために、彼れはあらゆる招待——親しい人々や親族のそれさへも何んとかうまく逃れる。それが僅か二三時間にしても、他處へ往くことは大嫌ひなのだ。寧ろさうした人々を、自分の嬉しい慣れた環境へ招待しようと思ふ。未だ探検せられない此の地方にあつては、凡てが彼れにとつて新しいのだ。どうして他處へなぞ往くものか。彼れの懐かしむカルバントラス、其處には彼れの忠實な教へ子で、採集家であり化石學者であり、同時に裁判官であるドウヴィヤリオがゐて、時々彼れを呼ばうとする。ドウヴィヤリオは以前アヴィニョンの昆蟲採集旅行や、ヴァントウ山登りによくお伴したのであつた。そして、趣味は單純で教養は高く、博物學に對する情熱も旺盛な人だから、フアブルをして出掛けて見る氣にならせてもよさうなものだつた。然しながら、彼れは斷然拒絶する。

「……御親切なカツレツも、私を待つたんでは冷たくなつちまうだらう。何しろ、仕事で一杯だ……」



……だが、あなたは別だ。都合のつく時に裁判所を脱け出して来たまへ。そしたら吾々は、性無やたらに、一つ、哲學しようではないか。だつて、そんなのが、一寸でも一緒になれると何時でも吾々の爲ることなのだ。私と来た日には、カルパントラスへ往つて見ようと云ふ氣になるのは、まあ、何時のことかな。テバイイドの隠者だつて、私が此の田舎の小舎でせつせとやつてゐる以上に、その獨房で忙殺されはしなかつ……」(一八八八年十二月十七日、アンリ、ドゥヴェイヤリオへの手紙)

さう、彼れの猫は移轉の際に、遠くへ連れて行かれても、執念深く舊い住居へ立ちかへるのだつた。(昆蟲記)が、ファブルに至つては、そのあべこべに、彼れが前に住んだ家を懐かしみもしなければ、一度び去つた場所をもう一度見たいと思ひもしなかつたのだ。

## 七

## 自然の解説

實際、彼れの周圍と彼れの脚下には、心を奪ふ様なものが十分にあつたではないか。此の深い庭には、無数の昆蟲が跳んだり、匍つたり、ぶん／＼云つたり、もく／＼したりしてゐる。そして、すべてが彼れへそれ／＼の物語をする。歩行蟲は小徑の上をちよ／＼歩いてゐる。はなむぐりはその翅鞘の緑玉や金を輝やかしながら、到るところで唸つてゐる。時としてそのあるものが、薊の咲いた頂へ一寸とまつたりした。と、彼れはそれを細りした顛へる指先で、そつと捕まへ、暫く撫でたり談しかけたりしてゐるやうに思はれた。かと思ふと、突然、彼れはそれを自由の身にしてやつたりするのであつた。

胡蜂が矢車草の上を漁つてゐる。カモミイユの小花の上には、つちはんめうの仔蟲どもが獨房の中へ連れて行つて貰うために、アントフォラ (Anthophora 蜜蜂の一種) の來るのを待つてゐる。さう



かと思ふと、その邊りには緑の胴衣に鶏頭色の斑點をつけた道しるべが彷徨つてゐる。塀の下では「寒がりのみのむしが、ちつちやい柴で作つた着物を着て徐かに歩いてゐる。」リラの枯枝の中では、黒いまるくまばち——此の樵夫の蜜蜂が、一生懸命にその廻廊を穿つてゐる。はりえに、したの蔭ではお祈り蠅螂 (Mantis religiosa, Lin.) が、淺緑の長い翅の衣を頼はせながら、「肩越しに警戒のまなざしを投げ、腕を胸の上に畳み、珠數をつまぐつてゐる様子」をしてゐるが、大きな灰色のばつたを恐怖によつてその場に釘付けにし、動けなくする。

自然には一として無意味なものはない。そして、多くの人を笑はせたり、面白がらせたりするところのものも、屢々賢者をして考へさせ、省察させる。「自然の莊嚴な問題には、詰らないものはない。實驗室の養魚器も、泥の中へ残された驢馬の足跡には及ばない。雨が降ると、此の云ふにも足らない鉢に水が満ちて、生命がその驚異を繁殖させるのだ。」そして、踏み固められた小徑の上で、「偶然吾々の眼につく極めて平凡な事柄も、宏大な星の世界のやうな無限の眺望を開くことがある。」

それは實際、森羅萬象の一つ／＼は、それ／＼一個の記號——凡ての文字にそれ／＼の意味が隠されてゐる解し難い暗號記法の見本かなんかの様なものである。然しながら、これ等の生ける本文を巧みに解いて、その暗示を掴むことが出来るならば——象徴の傍に註解をも見出すことが出来るならば、その時には極めて詰らない一角の土地も、孤獨な探究者には思ひもよらない美術館のやうに思はれる。ファブルは吾々へ、さうした驚くべき美術館を開く金の鍵を與へて呉れるのだ。

判定したり描寫したりすることは、一個の風に思ひを語らせようとするのに較ぶれば、何んと云ふ乾燥無味なことであるか！

一個の黄色い小さな風に過ぎないテレビン樹の木風は、果してそれだけのものに過ぎないか。彼れの系譜によつて見ると、「何んたる情熱と變化との驚くべき試みを通して、生命の傳達を司どる普遍の法則が現はされることか！ 此の場合、父もなく卵もない。凡ての木風は母である。そして子供はそつくりその儘、母と同じ形をして生れ出る。」そのためには、「母の本體の殆んど全部が分解し新らしくなり、集つて球の様な胚子となる……全動物が殻の代りから／＼の皮を持つた、いはば一個の卵となる。顯微鏡で見ると、其處に構成中の全宇宙が現はれる……蛋白質の星雲の中に生



命の新らしい中心が出来る。それは恰度空の星雲の中に、諸々の太陽が出来るやうなものである。」  
くだ蜂 (Halictus) を通しては、他の光りが現はれて、性の暗い問題を少しく照らす。

つちはんめうは厭らしい昆虫に過ぎぬ。然しながら、彼れの變態を辿つて見よ。その興味の點で、如何なる物語も、彼れの驚くべき生涯の色々な激變には及ぶべくもない。

春、牧場の草、特に大戟の上へ、それが恰度頭を擡げて黒い花を太陽に開かうとする頃、通りすがりの人が唾でもひつかけたかのやうな、あの泡は何のであるか。それは蟲けらの仕業である。それは泡蟲 (Cicadula 浮釣子類の一種) の卵を宿した隠所だ。何んたる不可思議な化學者であるか！「極めて巧妙な彼れの刺錐は、植物解剖學の極めて巧妙な腕前をも呆然たらしめる。」それが極めて有毒な植物の脈の中を、樹液と共に流れてゐるびり／＼させる毒を分離して、たゞ無害な液汁のみ引き出すのだ。

昆虫は到る所、さうした端睨すべからざる多様な問題を、絶えずかゝげてゐる。吾々と極く接近してゐる動物は、多くの點で、吾々に似通つてゐる。これに反して、殆んど創造の最初に生れた昆虫は別世界を構成し、その小さい身體の中にレオミュウルがいみじくも云つたやうに、「怪獸よりも多くの部分」を含んでゐる。彼等には、彼等特有の感覺や能力があつて、色々な驚くべき動作をなしてゐる。さうした動作は恐らく甚だ單純な關係を以つて結ばれてゐるのかも知れないが、吾々の眼には、恰度狼星、若しくは火星の住者が、ひよつと吾々の間へ降つて來でもしたならば、恐らくこんな動作をするかも知れないと思はれる程、それ程異様に見えるのだ。彼等はどのようにして聽くか、どうしてその複眼から視力が出るか、吾々には分らない。彼等の感覺の大部分に關し、斯んな風に吾々が無智である所から、いざ、彼等の動作を解釋しようとなると、多くの場合、吾々は行き詰まつて、そして困難がひたすら増加するのみである。

つちすがり (Cercaris) は、その仔蟲を養ふ爲めに、人間が幾時間かゝつても、云はゞ何處にも見つけることの出来ないやうなさう、むしの一種、クレオヌス・オプタルミクス (Cleonus ophthalmicus) を、



殆んど立ちどころに「幾百も見出す。」さうして見ると、つちすがりの眼は廣い自然の中で、人間の視力も及ばないところのものを、直ちに見出すことの出来るやうな擴大鏡、ほんとうの顯微鏡みたいなものであるか。(昆蟲記)

地蠶よつやしを捜し求めて芝生の間を跳んだり檢べたりするじが蜂 (Amnophila) は、どうして地中深く此の蟲がじつと眠つてゐる正確な點を知ることが出来るのか。此の蟲は、深さ數寸の所に在る彼れの窖の中に引込んでゐるのだから、觸覺や視覺ではどうにもならぬ。それに日中は完全な不動を保つてゐるのだから、聽覺だつてどうにもならぬ。それでは吾々の五官にとつて絶対に匂ひが無くとも、彼れは何んか未知な匂ひの發散物によるのであるか。(昆蟲記)

「湿度測定器のやうな微妙な感性を授かつてゐる」松の行列毛蟲は、物理學者の晴雨計などよりも遙かに確かな晴雨計である。「彼れは、遠くで非常に遠くで、殆んど地球の向う側で起らうとしてゐる暴風さへも豫感する。」そして、地平線にはこれを告げる少しの現象も起らない數日前に、彼

れは既に豫報するのだ。(昆蟲記)

或る野生蜜蜂——カリコドマ (Chalcidoma) や、或る胡蜂——つちすがり (Cercaria) などは、暗い函の中へ入れて彼等の棲み慣れた場所から數キロ米突も遠くへ運んで行かれ、そして彼等の首て見たこともない場所で突つ放されても、いつかな道を失ふ様なことはなく、廣々とした未知の空間を驚くべき確かさを以つて飛び越え、そして長い間留守にした後でさへも、寔に思ひがけない幾多の障碍や逆風などにも拘はらず、ちやんと彼等の巢へ歸つて來ることが出来る。彼等を導くところのものは、記憶力ではない。「それはある特務な能力だ。それを説明しようなどとはしないで、單にその驚くべき働きを認めなければならぬ。それ程此の能力は、吾々自身の心理から懸け離れてゐるのだ。」(昆蟲記)

一切が蟲けらの中に含まれてゐる。そして彼等を考察することによつて、結局、あらゆる哲學に含まれてゐる事柄よりも、より多くのものが發見せられるであらう……吾々さへそれを巧みに探し



出す術を心得てゐるならば。

「吾々の衷には何にも類似のものが無いので、吾々をして途方に暮れしめるやうな、想像だに及ばないかうした無数の現象の間にも、吾々はどうか斯うかして、彼方ら此方らで幾らかの光りを認めることが出来る。それが突然不思議な明りを以つて、暗い迷宮を照すのだ。そして「吾々が不意に捉へることの出来る微小な秘密は、極めて挑発的な、寔に御丁寧に研究せられてゐる吾々の情慾の秘密よりも、恐らく一層端的に吾々の起原や終局の深い謎を解くことが出来るかも知れぬ。」(メヘテルリンク——「蜜蜂の生活」)

こんな風にしてフアブルは、當時まで誤解せられてゐた異様な事實の一つを、催眠といふことによつて明細に説明してゐる。異常な事情に喫驚して昆虫が突然ひつくりかへり、恰も頓死したかのやうに、いきなり地べたへ落ちて肢を腹の下へ集め、そしてじつとしてゐることがある。一つのシヨック、或る思ひがけない匂ひ、一つの鋭い音などが、彼等を直ちに多少長い一種の昏睡状態に陥し入れる。昆虫は「死んだやうになる。」それは、何も死んだふりをするのではなくて、事實かう

した磁気催眠にかゝつたやうな状態は、文字通りに死の状態に類似してゐるのである。(昆虫記)

ところで、ひめどろ蜂 (Odynerus)、毛梳蜂 (Anthidium)、ひげなが蜂 (Eucera)、じが蜂 (Ammophila) —— フアブルの観察に依ると、凡てこれらの蜂は夜になると、大顎だけの力によつて宙ぶらりんになり、身體をのして肢を疊んで、氣絶することもなく困憊することもなく「眠つてゐる。またエンブサ (Empusa 蟻螂の一種) の仔蟲は、「十月月といふもの打續けに、その小爪を何んか小枝にひつ掛けた儘、頭を下にしてじつとぶら下つてゐる。」さういふ彼等は、催眠術にかゝつた人と驚くべきほど似通つてゐるではないか。催眠術にかゝつた人には、極めて困難な姿勢をとり、随分長い間極めて異常な態度を執つてゐる能力がある。例へば片方の腕を伸ばしたり、一本脚で突立つてゐたり、而かも疲勞を感じることをなしに、何時迄も——その精力を維持して行くではないか。(昆虫記)

此の昔の微々たる小學教員が、こんなにもふかくかうした新世界に突き入ることが出来て、そして、斯んなにも心をそよる多くの現象を吾々に紹介して呉れることの出来たのは、それは、彼れが「森羅萬象のあらゆる窓に、その鋭い、廣い眼光を投げた」ことに依るものである。彼れの普遍的な



能力、彼れの宏大な教養、及び、教科書を作る必要上不斷に豊富にし、不斷に現實的なものにしなればならなかつた彼れの殆んど百科辭典風な博識などは、彼れをしてその研究にあらゆる智識を結び付けさせることが出来たのだ。私は再び彼れをバストウルに比較せざるを得ないのだが、實際、バストウルも亦、比較對照や、新しい幾多の研究や、更に「自分が専心してゐる科學のあらゆる部分を——それら自身の間に於ける關係若しくは他の科學との關係を、それからそれと抱擁せしめる」教育の偉大な力が齎らす有益な影響を、寔に彼れ獨特な力を以つて浮彫にして見せたのだつた。

こんな譯で、彼れは自分の専門しか分らないやうな人達とは異つてゐる。さうした人達は、自身の家、自分自身の研究を一步外に出でると、もう何んにも分らない。そして彼等の居を構へてゐる狭い地方の彼方の事をば、てんで分らうともしないのだ。

あらゆる植物は彼れに親密で、彼れには花がそれ／＼生きた人間のやうに思はれる。それほど彼れは彼等を手にかけたのだ。だから彼れは極めて細かい伎さへも、極めて小さい植物の部分さへも、例へばみ、の、む、しの美しい柴束の中へ入つてゐるやうなものさへも、巧みに表を作ることが出来るのだ。それに植物の深い智識なしには、植物と昆蟲との密接な、常に繰り返へされてゐる深い關係を

ことが出来ようか。

彼れは地層を詮索し、片岩を點檢した。此の記録保存所は、消滅した構造の形を止めてはゐるが、「本能の起原に關しては沈黙を守つてゐる。」

反應物の上に身を屈め、彼れは——或る哲學者の言葉を用ひて云へば——自然がその火の前に坐つてゐるところの祕密な隠れ場を、その深い奥の現場に於て發見しようとした。そして彼れは金龜子の翅の中にさへも、物質の變化を辿つてみたのであつた。彼れはまた、有機體の滓を埧場の中へ入れて、生命が如何にしてその要素を新らたに組み合はせるか、また尿の要素から、單に幾らかの分子を轉置して以つて、それが如何にして「せんち、こが、ねの紫石英の莖色、はなむぐりの碧玉色、カンタリデス (Cantharides はんめうの一種) の黄金が／＼つた綠色、歩行蟲の金屬光、及び吉丁蟲や糞食甲蟲などの美しくさなど、實に無數のニュアンスを持つた色彩のあらゆる目まぐるしい魅力」を引き出すことが出来るのか、それを觀察したのであつた。

彼れの總ての著作には、近代物理學のあらゆる思想が含まれてゐる。やま蜂によつて解かれる不思議な幾何の問題や、特に女郎蜘蛛の採集網の驚くべき描寫の中などで、數學の最高智識が巧みに



利用せられてゐる。女郎蜘蛛はその「恐ろしい知識」の組合はせに依つて、「あんなにも奇妙な特徴を持つた、何んといふ精緻な幾何學者の對數的螺旋」を實現してゐることか！ こんな見事な觀察は無い。一蜘蛛の云ふにも足らない網の中にも、フアブルは吾々に蜜窩と等しく驚くべき、等しく不可思議な、そして一層嚴肅な傑作を見せてゐる。(昆蟲記)

然しながら、知ることと見ることだけでは十分ではない。

かうした小さい蟲けらの見せ物へ這入るためには——彼等の興業に加はるためには——彼等の動作を相互に結びつけて、それを宏大無邊な宇宙へ繋いでゐる神祕な緒を掴むためには、専門家の鈍重にして冷淡な眼は、多くの場合無力で、奥底を透視することは出来ぬ。觀察術が必要である。そして觀察の才たるや、最後の眞理まで穿つて行くことの必要に小止みなく支配せられ、絶えず眼醒めてゐる智能の眞の作用である。そして「不可知の花崗岩の垣がすつくと突立つまでは、新しい疑問をそれからそれへと片づけて、何物をも理由を究めずには置かぬ。」

就中、愛著せしめるところの熱烈な同情が必要である。何んとなればトゥツスネル (Toussnel) も

云つたやうに、「人は推理よりも心によつて一層深く事物の祕密へ突入る」からである。「直觀に依るのでなければ、生命の本質を知ることが出来ぬ。」かうベルグソンは附け加へてゐる。(ベルグソンの Evolution créatrice)

ところでフアブルは、あらゆる動物を愛するやうに此の小さい蟲けらをも愛する。何んと云ふ優しさを以つて、彼れは彼等のことを話すことか！ 何んと云ふ懇ろさを以つて、彼れは彼等を觀察することか！ 何んと云ふ愛を以つて、彼れは仔蟲等の發育を辿つてみるることか！ 彼れの硝子管の中でびち／＼跳ねたり、頭を揺つたりしてゐる若い仔蟲どもは、何不足なく生を樂しんでゐる。そして彼れ自身も、彼等が「何不足なく健康に輝やいてゐる」のを見ては、限りなく嬉れしく思ふ。「神聖な勞働の悦びのなかで、」蜜蜂がふしだか蜂 (Philanthus) のために締め殺されるのを見て、彼れは惘然の念に堪へぬ。彼れは小さい蟲けらどもの苦痛や、きつい勞苦を身に沁みて悲しむ。たとひ彼れが思想を求めするために、彼等の住居を顛覆させなければならぬにしても、母の愛を「さうした苦悶」にかけることが、何うにも氣がとがめてならぬ。また、若しも彼れが祕密を打ち明けさせるために、何うしても彼等を拷問にかけなければならぬ場合には、彼れは「さうした悲惨」を



惹起したことをひどく遺憾に思ふ！ 祕密を明かして貰つた御禮に、彼等へ必要なものを與へてから、いざ彼等と別れ、彼等を「自由の歡喜へ」歸さうと云ふ時に、彼は苦しい切な名残りを惜まずにはゐないのだ！ 或る美しい夜、大くちやくて、ふが彼れの住居を訪づれて、頻りにランプのぐるりを飛び廻つたことがある。彼れの子供等は手をのべて將にそれを捕へようとした。と、彼れは斯う決めつけた。「お止し、お止し。いたはつておやり。明りの國へやつて來た巡禮者ではないか！」(昆蟲記)

實際、地球の表面に於て吾々と共に呼吸してゐる凡ての動物は、或る莊嚴な、整然たる務めを果してゐるのであると、彼れは極めて堅く信じてゐる。彼れは自分の家へ燕を喜んで迎へ、ノートや書籍がどんなことにならうが一向構はずに、その小さい家族へ實驗室を解放してやる。此の家族の父ちゃんや母ちゃんは何時も外へ寝てゐたが、彼れは夜がほのぼのと明けそめると、彼等へ窓を開けてやるために、「睡氣に尙も重たい臉をしながら」起き上る。彼れは墓の肩を持ち、努めてその思ひ誤まられて來た特徴を浮彫にしようとする。彼れは人に嫌はれ、追ひまはされ、踏み躪られ、石を抛りつけられ、磔にされて來た蝙蝠や、針鼠や、鼻などの名譽を挽回してやる。(昆蟲記)

人の魂に憐愍の情を起させ、哀れを催させ、そして、萬有を浸す博愛の深い源泉に達せしめるものは、自然を措いては何物も無い。

フアブルへ動物學の途を開いたモツカン・タンドンは、醫者であつて同時に博物學者であるが、無限に鋭い感性の持主で、ほんに些細な搔傷を見てさへ身震ひするのであつた。(セリニヤンの會話) フアブル自身も幼い時分には、一寸した傷を見てさへも人事不省に陥るほど感動したと云つてゐる。バストウルも亦、彼れの傳記によると、色には現はれないがその感性は實に深く、實に鋭敏だつたといふことである。近代爬蟲學の最も傑出せる大家ロリナ (Rollin) が、彼れの肺炎に罹つた老犬を自分の子のやうにいたはつてゐたことがある。彼れは、自分が先きに死んで了ふと可哀相だと云ふので、他の犬を飼ひはしなかつた。彼れが、あんなにも立派な研究をした毒蛇でさへも、不本意ながら、たゞ「同胞に對する連帶義務によつて」のみ、餘儀なく殺すのだつた。

それにつけて、私が思ひ出しては感動を禁ずることの出來ないのは、或る日、彼れが幸にもアルジャントン・シュル・クルウス——Argenton-sur-Creuse——の靜かな隠れ家からやつて來られ



て、一緒に博物館へ行つて見たことである。吾々が爬虫類の陳列室へ這入つて、之等の動物はその極めて單純な必要さへも充たされず、窮屈な、何んの慰めもない中で、みんな可哀相にも氣息奄々としてゐるのを見た時、私は心底から云ひ知れぬ無限の憐愍を感じたのであつた。

フアブルが昆虫と交つて送る生活は、實に親密なものである。彼等は彼等の伴侶となつて彼等の物語をしながら彼れ自身を語り、そして彼等の苦痛や歡喜の中に、彼れ自身の苦しみや喜びを見出し、彼等の記録のなかへ、彼れの想ひ出や印象を打ち混ぜるのだ。それは、彼れの蘊蓄に富んだ著作の中に鏤められてゐる純朴な自叙傳の、何んとも云へない妙味の有る斷片をなしてゐる。さうした感動に富んだ恍惚たらしめる幾多の頁には、此の極めて高貴な魂のあらゆる質朴さが、人を動かさずには措かない眞率さと共に、まどく／＼と現はれてゐる。また、あの置はしい、魅力のある、そしてあんなにも非現世的な新鮮味が、恰かも純の純なる水晶を通ほして見るかのやうに、それらの頁の蔭にすぎ透つて見える。

こんな風に、感情なしには——光りを投ずる情熱なしには、ほんとうに自然と融合することは出

來ぬ。それは自然の意味を發見せしめるところの恐らく唯一の力である。趣味も、知能も、論理も、あらゆる學派のあらゆる造詣も、それだけでは十分でない。もつと突込んで観るためには、觀察や經驗の境界を通り脱けて、現象の彼方に生命の深い祕密を豫感せしめ、看破せしむるところの、何んか交感力と云つた風のものが無ければならぬ。これを授かつてゐる者のみが、其の眼を開きさへすれば、時に眞相を洞察して、これを感じる事が出来るのだ。

實際、偉大なる觀察者は詩人のやうに想像し、また創造するのである。兩者の手に持つ道具の相違などは問題にならぬ。顯微鏡、擴大鏡、若しくはメスは、恰度立琴の絃の代りとなる。「科學的創意を構成する仕合せな、多産な假定は、感情から生まれて來る。」かう、クラウド・ベルナル(Claude Bernard 181-31878 フランスの偉大なる生理學者)が書いてゐる。此の生理學の泰斗は、最初純想像の作品を試みたが、最後にその天才は生ける肉の多様な變化をテエマとしたのであつた。彼れも亦「詩の炬火を掲げて」生命の迷宮を跋渉したと云はれなからうか。

また、パストウルの素晴らしい發見の全體を司どつてゐる調和のとれた連絡も、やはり眞の宏大な詩の感じを與へるではないか。



ファブルにあつてもまた、そのあらゆる辛棒強い観察へ齎らした、あゝした情熱こそ、寔に創造の源だつたやうに思はれる。「彼れの胸は感動を以つて搏ち、汗は額から地上へ滴り落ちる。それが埃と混つて捏り粉を作る。」そして彼れは飲食を忘れ、知ることの幸福の中に限りなく甘い天上の悦びを味ふ！ 彼れが實驗室で、青蠅の卵を研究してゐた時の光景は、永久に私の眼を去らないであらう。その時私は彼れの傍にあつて、腐つた牛肉や青大将から發散する強烈な臭氣に殆んど堪へ得なかつた。然るに彼れと來ては、さうした恐ろしい臭氣にも平然として、その顔は悦びに溢れてゐた。

さうして見ると、此の場合認識力が、原始的な、神祕な、本能的な感情——直觀の僕となつてゐなければならぬ。これのみが、ファブルのやうな偉大な科學者、ミシュレ (Michalet 1798—1874) のやうな偉大な歴史家、ボエルハアヴ (Boerhaave 1666—1738) 及び吾々のビシヤ (Bichat 1771—1802) 若しくは吾々のブルトノウ (Broussais 1778—1862) のやうな偉大な醫者をつくるのだ。此の最後の

人々は必ずしも最も優れた科學者でも、最も教養のある人でも、將たまた最も忍耐強い人だちでもない。然しながら、彼等はあの特殊な洞察力、人が呼んで眼利きとなすところの、一見以つて病氣を確認する、云はば詩的天才を強度に持つてゐたのだ。

事實に於て、ファブルの精神は、あらゆるかうした方面にも適したものだつた。若しも事情が彼れの眼を醫學の事に——それは實際無數の事實に依據してはゐるが、大部分明識と一種の洞察力とに占められる此の科學へ向けしめたならば、疑ひもなく、彼れは此の舞臺に於ても燦爛たる光りをはなつたことであらう。ほんの子供だつた頃、水仙の花冠から、その赤い總苞の底に球なす蜜の滴りを、彼れは舌をつけて舐めたりしてゐる中に、これを食べ過ぎると、頭が痛くなることを知つたのだつた。(昆蟲記)

彼れは、これまたヴォウクリユウズ縣の有名なフランソア・ラスバイユに對して讚嘆の念に充たされてゐた。パストウルも彼れの中に醫學の天才を豫感したのであつた。ファブルは彼れの中に、自分自身の何ものか、尠くとも同じ見方、同じ考へ方を見出してゐたもののやうである。彼れは常



識と明識とに富んだラスバイユの著書や處方を好いてゐた。これに反して、込み入つた處方や小才の利いた手當などをば、彼れは自分自身の爲めにも家族の爲めにも却けてゐた。カルバントラスに於て、彼れの最初の赤ちゃんが生死の間を漂つてゐた時、診察に来てゐた醫者は「手が盡きたといふので」、もう何んの手當もしないのみか、子供は翌日まで保つまいと云ふので、それなり來なかつた。その時フアブルは、ラスバイユの著書に頼つたのであつた。

註一 Francois Raspail 1794—1879 カルバントラスで生れ、矢張りその中學校で教鞭をとつた。「ラスバ

イユの著——衛生の業を手に入れて置くがよい。たつた十錢かそこらで、お前の家には何時も確かな寔に巧みな醫者がゐる事にならう。斯んなよい醫者はない。此の小さい本は筋道がたつて、智識が一杯に含まれてゐる。それを讀め。それを研究せ。他のお醫者なんぞ、ふん！」一八四八年九月三日、弟へ)

「一體彼れの病氣が何んであるか、私はそれを確かに知らうとした。そして知つた。で、それから、日夜それ相應に看護してやつた。今日彼れは恢復期に在る。食慾が出て來た。奴、助かつた様だ。で、私もアンブロワーズ・パレ (Ambroise Paré 1517—1590 外科醫) が云つた様に云ひたし——私が彼れを看護した。神様が彼れを癒して下された。」

註一 一八四八年九月三日、弟への手紙。子供は恢復し切らないで、間もなく死んで了つた。

アヴィニヨンの師範學校で、化學の講義の眞最中に、突然レトルトが破裂して硫酸鹽のお粥が四方へ飛散したことがある。その時、彼れは敏活に同僚の一人の眼を救つてやつた。かうしたエピソードを彼れは物語つてゐるが、それは彼れの獨創性と沈着とを語るものではないか。(昆蟲記)

實際、「彼れの巧みに發見する事實の前には、どんな醫者も頭を下ぐべきである。」が、彼れはまた、衛生と醫學とが専心してゐる或る難問題へ、昆蟲學の不思議を直接に齎らすことをも知つてゐる。毛蟲が分泌して、「それを取扱ふ指をほてらす」ところの、あのびり／＼する毒も、有機體の或る滓——尿酸に由來するものに過ぎないと云ふことを、彼れは明らかに示してゐる。彼れは實證を供給するために、苦しい實驗を彼れ自身の上に試みることを躊躇しない。彼れはこんな風にして、「養蠶家の間にしば／＼見られるあの奇妙な皮膚病を、頗る生理學的に説明してゐる。彼れは肉を蛆 (Asterix 青蠅の幼蟲) にたかられないやうにするために、鐵網の蠅帳がよいなどといふことはイリュージョンで、一枚の紙を蔽ひ被せる方が、單に蠅の害を避ける爲めのみでなく、また、衣蛾 (Tinea) に衣服を荒らされぬやうにするためにも、どれだけ有効であるかを證明してゐる。彼れはプロヴァンス地方の奇妙な料理法を紹介してゐる。それは怪しい茸を食ふ前に、それを鹽水で茹でるのだ。



彼れは醫者に對して、さうした色々の不實な植物の怖るべき毒から、或ひは妙藥が引き出されるかも知れないといふ假定を提供してゐる。最後に、私が前にも一寸觸れた彼れの奇妙な實驗を、もう一度云つて見る。彼れは死んだ昆蟲の汁を注射して、敗血症、脱疽などの凡ゆる現象を實驗的に起させたのだ。彼れはそれに彼れなりの解釋を與へてはゐるが、比喩に富んだ、その正確な描寫に到つては、實にその比を見ないのである。(昆蟲記)

要するに、これまであんなにも缺けてゐた、かうした無際限の閑暇が、彼れに必要なのであつた。何んとなれば、かうした儚ない蟲けらの生活に起る事件は、凡て刻々に起つて定りは無く、そして永くは繼續しないのだ。

今やファブルは、彼れらの極めて些細な動作にも細心の注意をはらつて、清々しい朝、外が明るくなるのを待つて觀察に出掛ける。さうした時刻には、「蜜蜂が、今日のお天氣は如何かしらと、その住居の天窓へ頭を突き出し」てゐる。また蜂の蜘蛛は、「夜の涙をもつて露の珠數みたいに蔽はれ、その美しい寶石が朝日にきら／＼してゐる」毘の飾りの下で、もう凝と蚊や蝶を待ち伏せして

ゐる。

幾時間も／＼テレビン樹の一枚の葉を前にして、彼れは擴大鏡を通して木虱の、のろ／＼した動作を辿つて見る。「その吸口は、葉を膨らまして大きな瘤——若い仔蟲らが睡眠期を過すあの不恰好な、奇怪な浚食子を作る毒を巧みに滲み出させる。

夜、彼れは、角燈のぼんやりした明りを頼りに、百足の産卵の秘密を知らうとしたり、シオヌス(Cionus やらむしの一種)が薄皮の囊を作るところや、若しくは行列毛蟲が繻子の軌道の上を、縦隊つくつて往くところなどを、そつと覗いてみたりする。そして眠りが彼れの臉をしばた／＼させるやうになると、彼れは初めて蠟燭を吹き消す。

蠶の蛾の夢幻劇のやうな夜の復活を見物するために、彼れは夜半に眼を覺ます。「蛹が襦袢を脱ぐ瞬間を失はざらんがため」である。ばつたの翅がその鞘から「生え始める」時にも、彼れは既に其處にゐる。何んとなれば、此の世の如何なる光景も、「此の見事な解剖學が浮び出る」光景に及ぶものはないからだ。「ほんに詰らない翅の軸の中へ、巧みに疊まれて極めて小さい嵩になつてゐるその布地が、恰かも一粒の麻の實のなかに入られてゐた物語の女王の着物のやうに、寔に壯麗な



帆か何んかの如く擴がつて行くではないか。そして彼れの材料が整理せられ、分子が積み上げられ、一部一部が結びつけられ、骨組みが按配せられ、擴張せられ、そして卵、幼蟲、若しくは翅が育ち、大きくなり、生えて、恰かも工業の産物たる機關車が、はじめ一と塊りに溶かされてゐたその鐵材以上に場所を占めるやうに、これまたそれ／＼の種族の重さを増減することなしに膨らんで行く。これを見ると、生命の素晴らしい力に愕かざるを得ないので。(昆蟲記)

彼れは彼れのアルマにあつて、恰かも未知の世界を發見した人のやうである。「狼星からやつて來たお人好しの巨人が、擴大鏡を眼に當てて、その觀察する矮人等を踏みじつたりしないやうに、或ひは息で吹き飛ばしたりしないやうに、はら／＼してゐる」態である。

到る所、生命のスフィンクスへ不斷に質問する彼れの情熱は、年が年中彼れの變化に乏しい生活を充たして餘りある。何所か遠方に、彼れの興味を唆る物でもあると、それが極めて熾烈な日でも、彼れは一個の林檎と一片のパンとをポケットへ突込んで、焰々たる太陽を冒して出掛ける。そんな時にはアヴィニヨンの彼れの弟から貰つた、あの堂々たる犬のヴァスコ、若しくは、オラン

チュから連れて來たブルを伴つて行くのであつた。或ひはまた、夏の眞中に一家打ち揃つて屢々朝の四時頃から、山若しくはアイグ川のほとりへ出掛け、炎熱が田舎を焦す前には家へ歸つて來るのであつた。

庭を散歩してゐる時でも、彼れは何んにも見逃しはせぬ。日蝕と、さうした天空の現象が動物生活の全體に及ぼす影響とを、彼れが精細に記録したなどはこれを語るものである。

彼れの子供等が燻し硝子を透して太陽の苦悶の成り行きを辿り見てゐる間に、彼れは田舎に起つてゐる凡ゆる出來事を注意深く觀察する。

「四時だ。陽はどんよりして來る。温度は下つて來た。鶏が歌ふ。時刻前にやつて來たかうした一種の黄昏に驚かされたのだ……犬が二三匹吠えてゐる……一寸先まで澤山ゐた燕が、みんな姿を消しちやつた……一と番ひ、窓の明いてゐる私の實驗室へ避難にやつて來た。明りが常態になると、此の一と番ひの燕はまた外へ行くだらう。……先程ひつきりなしに歌つて、とても煩さかつた鶯も、とう／＼黙りこんだ。頭の黒いほいじろが、べちやくちや鳴いてゐたつけが、突然これも音を立て